

岐 阜 大 学

留学生センター紀要

2015

岐阜大学留学生センター

岐阜大学留学生センター紀要

2015

論文編

【研究論文】

柳原吉兵衛の支援活動

—朝鮮人女子教員内地学事視察を中心に— ……太田孝子 1

岐阜の伊奈波の芝居小屋(2)

—末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興— ……土谷桃子 19

【授業報告】

初級日本語学習者を対象としたパソコン授業

—「パソコン演習A」授業報告— ……野原美和子 31

初中級学習者を対象とした聴解授業

—「聴解演習B」授業報告— ……富田久仁子 43

年報編(2015年4月～2016年3月)

1. 日本語研修コース …… 53
2. 日本語・日本文化研修コース …… 67
3. 日本社会文化プログラム …… 70
4. 全学共通教育 …… 72
5. 留学生指導 …… 73
6. 留学生センター年間行事 …… 82
7. 留学生センター交流ラウンジの利用について …… 100

資料

岐阜大学外国人留学生数 …… 102

論文編

柳原吉兵衛の支援活動

- 朝鮮人女子教員内地学事視察を中心に— …………… 太田 孝子 1
- 岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）
- 末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興— …………… 土谷 桃子 19
- 初級日本語学習者を対象としたパソコン授業
- 「パソコン演習A」授業報告— …………… 野原 美和子 31
- 初中級学習者を対象とした聴解授業
- 「聴解演習B」授業報告— …………… 富田 久仁子 43

柳原吉兵衛の支援活動

—朝鮮人女子教員内地学事視察を中心に—

The Supporting Activities of *Kichibei Yanagihara*:
Focusing on the Educational Inspection Opportunities for the Korean Female
Teachers to visit the Main Islands of Japan

太田孝子

要旨：

柳原吉兵衛（1858～1945）は朝鮮人のために多くの支援活動を展開したが、3回にわたって朝鮮人女子教員を内地（日本）に招く「学事視察」を実施した。朝鮮各道から選ばれた女子教員たちは各地の小学校や新聞社、名所旧跡を訪ねて様々な体験をしたが、柳原が実施した内地学事視察には、①昭和天皇即位式関連諸行事への拝観、②李王家並びに総督府関係者宅への訪問、③皇室や朝鮮王室の関係者等との面談、など朝鮮総督府が主催した学事視察とは著しく異なる点が見られる。

柳原が営む大和川染工所が完成させたカーキ色の軍服地が献上品御嘉納となったこと、セルロイド人形が宮内省お買い上げとなったことなどを通して皇室への尊崇の念を深めた柳原の意向が、内地学事視察の目的や見学場所にも反映されたためである。「文化の発達した内地」を見学させ、皇室や朝鮮王室の人々と会うことが、植民地朝鮮の教員に利すると考えた結果であるが、柳原は優秀で高い技術を持つ多くの女子教員と接しながら、最後まで朝鮮の文化への関心を表明することはなかった。本稿では、柳原が招待した女子教員内地学事視察の全体像を把握・検討するとともに、視察の背後に内包された動機・意図を考察した。

はじめに

柳原吉兵衛は、大和川染工所の経営によって得た資産のほとんどを朝鮮人に対する支援活動に費やした。柳原の行った支援活動は、①朝鮮人個人に対する支援、②内鮮協和会を通しての各種支援、③李王家御慶事記念会を通しての女学生・女子教員に対する支援、の三つに大別できる。②は大阪府内鮮協和会の組織・運営による支援であり、③は朝鮮の高等女学校・女子高等普通学校の最優秀卒業生の表彰、内地に留学した女学生の支援、朝鮮人女子教員の内地学事視察の実施、が主なものである¹。①は②③から派生した人々をも含み、その数は計り知れない。筆者は、高等女学校研究会に所属して③を調査・研究対象としてきたが、柳原自身も生涯の中で最も多くの努力を重ね、支援したのは③であった²と述べている。

柳原は1920年に「李王家御慶事記念会」を創設して、朝鮮の女子高等普通学校（以下、女高普も使用）等の最優等生を表彰し、記念賞牌（メダル）を与え、一部の卒業生には奈良女子高等師範学校（以下、女高師も使用）を中心とする内地の高等教育機関への留学を仲介した。留学生には奨学金を貸与しただけでなく、渡日前から卒業まで細部にわたる支援を行い、卒業後も書信を交わしている。卒業生の多くは教員になったが、柳原はほぼ毎年朝鮮に渡って親睦会を開き、勤

務校を訪問しては激励し続けた。さらには3回にわたって女子教員に内地学事視察の機会を提供している。御慶事記念会が表彰した女学生は1,048人、世話をした内地留学生は80余人、学事視察に参加した女子教員は57人である。

柳原が行った朝鮮人女子学生への支援活動は、規模・内容などの点で稀有な事例であるだけでなく、留学した女子学生が卒業後教員になり、内地を知らない女子教員のためにリーダーとなって内地学事視察に参画し、その経験を教育の中で発揮させ、さらには教え子の中から留学生を誕生させようとする循環的な形態であった、という点でも注目に値する。

しかし、上記のような支援活動を展開した柳原を、朴宣美は「帝国のさまざまな価値を植民地人に積極的・組織的に伝播し、植え付けようとするコロニアル・ミッシヨナリーのような存在」³だったと評し、樋口雄一はその活動を「朝鮮人としての精神的生命を奪い去る非道の行為」⁴だったと断じている。上記の評価には否定できない面が多々あるが、柳原自身にはその意識がなかったばかりか、内地の諸学校を卒業して帰郷後に柳原に送付した書簡1,202通（送付者57人、桃山学院大学史料室蔵）やその他の残存する資料を読む限り、女子学生・女子教員たちもそのようには受け取っていないことが分かる。

本稿では（1）これまで言及されることのなかった朝鮮人女子教員内地学事視察の全体像を把握・検討すること、（2）柳原自身がどのようなことを考え支援活動を行っていたのか、背景に内包された動機・意図を掌握すること、（3）柳原の活動に対する周囲の人々の評価を把握することが目的であり、柳原が行ってきた支援活動を総合的に捉えるための基礎作業の一部として位置づけるものである。

なお、1）資料のほとんどは旧漢字・旧仮名遣いで書かれているため、そのままの引用を心がけたが、変換できない漢字もあること、2）柳原吉兵衛の姓は戸籍では「柳原」と記されているそうだが（曾孫の柳原高志氏談⁵）、柳原自身による署名・文書、先行研究等では「柳原」が使われているため、本稿でも特別な場合を除き「柳原」に統一したこと、の2点を予めお断りしておきたい。

1. 朝鮮人に対する関心の芽生えと公的組織の結成

具足屋の7代目として家督を相続した柳原は、衣類販売業に失敗したことを機に、聖公会聖テモテ教会で洗礼を受け、家業を染色業に変えて再出発を図り、1896（明治29）年、堺市に大和川染工所を創業した。同染工所は大阪紡績株式会社の染工部門として陸軍軍服の加工に関与したことにより日露戦争時には大きな利益を得、さらには日本綿布の海外輸出のための染色・漂白という民需も手伝って、関西地域における代表的な染色工場へと成長を遂げた。

1906（明治39）年5月、紡績業界の私設経済視察団の一員として初めて朝鮮・満州へ渡った柳原は、日本人の朝鮮人に対する無法な振る舞いに衝撃を受け、「内鮮融和」のためには、民間の役割や朝鮮人との接触・交流という方法が必要であるという確信を持つに至る。柳原の自伝には「最初の渡韓の際、在留日本人の反省を促すと同時に“我は一生涯韓人の友人になろう”との堅き決心を固めた」⁶と記されている。韓人の友人となるためには、「一視同仁のキリスト教精神を持って彼らと交際すべきであると信じ、日本へ渡来してくる韓人に愛の手を伸ばす運動をはじめた」⁷のである。この決心は、1910（明治43）年、堺で鉛売りをしていた金相哲⁸を染工所に雇い

入れ、5年間家族の一員として面倒を見、朝鮮に帰国・就職させたことを皮切りに、同染工所の一割を超える朝鮮人労働者の雇用等として実現している。

さらに、柳原の朝鮮人に対する関心は公的な形を取り始める。在朝鮮人問題を大阪地方における最大の社会問題と捉えて「内鮮協和会」を結成（1923年）、方面委員として朝鮮人児童を対象とした夜学会・夜学校の開設、職業紹介、救療援助、御大典にあたっての優良朝鮮人の表彰、映画会による啓蒙活動等を行っている。「教育第一主義」「教育報国」「教壇を通して」が柳原のモットーであり、1925（大正14）年4月、堺市で開催された全国各市小学校聯合会の講演では、在朝鮮人に対する初等教育の普及を訴えている⁹。

他方、柳原は1920（大正9）年4月28日に挙行された李王垠と梨本宮方子の結婚を記念して「李王家御慶事記念会」を結成し、会長に就任した。幹事には元田作之進（立教大学初代学長、後日本聖公会の日本人最初の監督主教）、齋藤研一（堺市長）、柳原貞次郎（吉兵衛三男）、松本寛一（堺聖テモテ教会牧師）が就任している。同会は地方の有志を集め、柳原が財源を負担して運営しており、朝鮮にある高等女学校の最優秀卒業生の表彰を主な事業とした。これは、1900（明治33）年に皇太子（大正天皇）の結婚を記念するために、聖公会近畿教区内のミッション・スクール（平安女学院）の優等生を表彰し、賞状・賞牌を授与しようという行事が教区大会で決議され、毎年継続して実施されたという先例からヒントを得ての結成だと言われている¹⁰。

1922（大正11）年に挙行された最初の表彰・賞牌贈与は淑明女高普、進明女高普の2校¹¹であるが、翌23（大正12）年には16校20人、24（大正13）年には21校27人、1938（昭和13）年62人、39年67人、40年68人と増え、1942（昭和17）年には計1,048人に達している¹²。次いで、卒業後奈良女高師等に留学した女子学生に奨学金を貸与ようになった他、週末や帰省・帰校の前後、正月、柳原家の行事など機会あるごとに柳原家に招き、社会的人望家や皇室・朝鮮王室との接触の場も提供した。さらに、内地を知らない女子教員のために柳原の企画したものが、本稿で検討する「女子教員内地学事視察」である。

2. 女子教員内地学事視察

2.1 総督府による視察

本稿が対象とする「女子教員内地学事視察」は、李王家御慶事記念会の招待によって実施されたものであるが、桃山学院大学史料室には『朝鮮総督府主催女教員内地学事視察録（昭和2年度）』が残されており（全41頁）、御慶事記念会主催による視察の前年の記録として興味深い。文中にも、下関観世音寺で「京畿道主催の私立学校男教員内地視察団員十余人と邂逅」¹³との記述がある。高等女学校・女子高等普通学校卒業生に対する聞き取り調査からも、「2週間程度の内地への修学旅行」に関して多くの証言を得ており、内地旅行が頻繁に行われていたことが分かる。昭和2年度の内地視察が何度目のものかは不明だが、李良姫の研究によれば、朝鮮人女子教員を中心とした教育内地観光は1918（大正7）年から実施されているとのことである¹⁴。李王家御慶事記念会主催による内地学事視察との比較のため、同視察の概要を紹介しておきたい。

朝鮮総督府によって実施された1927（昭和2）年の女教員内地学事視察は、同年10月7日から11月1日までの26日間に及ぶものであり、11道（当時は全13道）から29人の女教員が参加している。小学校8人、普通学校21人、うち1人は女子普通学校¹⁵勤務であり、参加者名簿より15人が

日本人だと思われる。団長は京城師範学校教諭河野宗一、同小林貞雄である。

総督府に集合した一行は朝鮮神宮に参拝後釜山から出航、福岡（大宰府神社、観音寺、箱崎宮、医科大学、女子師範学校、千代松原など）、広島（厳島神社、広島市内名所、広島高師、同付属小学校、呉軍港）、大阪（湊川神社、造船所、大阪毎日・大阪朝日新聞社、大阪城、造幣局、鐘紡会社、三越呉服店など）、奈良（市民博物館、春日神社、若草山、正倉院、大仏殿、奈良女高師、同付属小学校など）、名古屋（内宮・外宮、徴古館、熱田神宮、名古屋城）、東京（二重橋、明治神宮、靖国神社、東京女高師、同付属小学校、東京音楽学校、東京美術学校、日比谷・上野・浅草公園、図書館、帝展など）、栃木（東照宮、中禅寺湖など）、長野（小学校、製糸工場、善光寺など）、京都（桃山御陵、東西本願寺、小学校、金閣寺、天橋立など）を回り、釜山で解団している。

内地学事視察が企図された目的は「団員相互間は勿論至る所内鮮融和の活模範を実現」することであり、「心を誠に志を堅くし半島教化のために奮闘すること」¹⁶、すなわち、視察を通して観たこと・得たことを朝鮮の各学校で実行することであった。

いずれの視察地でも、立派な建物や美しい自然、静謐な神社仏閣に感激し、多くの人々の供応接待に感謝する文章が記されているが、美辞麗句が飛び交う中で、以下が朝鮮との違いに言及した素直な感想である。

東京女高師範学校付属小学校に到り二時間を限り各々自由参観をなす。合科と相互学習の有様は只教室を一巡したるのみにも其の真剣さを窺はれども更に教場に入り詳細を観れば児童は何れも生氣満々として自発的に自己の学習に没頭し本学習法の効果の一般を知ることが得愉快に堪へざるものあり、然れ共経費不十分にして設備完備せず環境を学習に便ならしめ得ざる而も児童の素質に於て優劣の差甚しき吾等の学校にありては直ちに真似すべきものにあらず（後略）¹⁷。

同付属小学校では、「労作教育、児童自治」で著名な主事北澤種一より、同校の教育方針と女教員の使命についての講話を聴いている。大阪では内鮮協和会主事代理広瀬勝、同会坂本深蔵が応対しているが、柳原に関する言及は皆無である。



伊勢山内宮神苑に於ける女教員内地学事視察團
(昭和二年十月十八日撮影)

写真①朝鮮総督府主催の女子教員内地学事視察（伊勢山内宮神苑）―「朝鮮総督府主催女子教員内地学事視察録（昭和2年度）」より引用

2.2 李王家御慶事記念会主催による視察

①第一回「大札奉拝朝鮮女子教員内地視察」

李王家御慶事記念会による一度目の内地視察は、1928（昭和3）年11月19日から12月7日まで19日間に渡って実施され、その様子は『大札奉拝朝鮮女子教員内地視察記』（全69頁、以下、『視察記』）、『向上』¹⁸第9号（昭和4年1月15日発行）、『青霞翁柳原吉兵衛傳』等に残されている。団長（京城師範学校教諭兼付属普通学校主事鈴木文夫）、幹事（朝鮮総督府学務局編輯書記田島泰秀）引率の下、13全道から20人の団員が参加している。団員全員が朝鮮人であり、うち5人が元留学生で女高普に勤務しているが、他は師範学校（1人）、普通学校（12人）、女子普通学校（2人）の訓導である。柳原（漫画①）も名誉団長として記載されている。『視察記』は団員が順番に記しており、旅程、視察個所とその内容・感想、会った人々（項目名は「特に好意を寄せられた方」）などが詳しく記されている。しかし、後で触れるように、45頁からは幹事田島による「漫画女教員視察団」が載っており、第二部とも言うべき構成になっている。内容も宿舎や車中、見学先での失態や驚き、団員の素朴な疑問・逸話等を扱っており、各項目に象徴的な一枚の絵（漫画）が付いていて前半とは全く趣の違う記録となっている。

柳原が本視察を企図した目的は『視察記』の表題からも推察できるように、「未曾有の御大典（昭和の即位式）に女子教員を招待すること」であった。出発に先立ち、団長の鈴木主事は以下のように述べている。

柳原氏は今回の御大典を機会に、主として未だ内地見学の経験なき皆様朝鮮女子教育家を招待し、御大典の鹵簿や御盛儀の御跡、大禮後の觀兵式などを拝觀し、皇室と国民の父子間関係及び進みゆく内地の文化を詳さに觀察し、體驗して貰ふ事は直接教育の任にある皆様にとり、思想界の現状と内鮮関係の複雑し行く今日の場合に鑑み、誠に意義深い事であらうと云ふお考へから、此の春、突然京城師範學校校長赤城先生の處に依頼状を寄こされたのである。そこで赤城先生は淑明の學監淵澤先生と御相談の結果、中等學校の人選をお引受になり、他は總督府の朝鮮教育會に人選方をお願いせられ、愈々今日の様な團體が出来たのである¹⁹。

総督府による視察と同様に朝鮮神宮参拝後、釜山を經由して下関に着いた一行は厳島を参拝し、小学校で綴り方の研究授業を参観、大阪に移動して小学校や新聞社等を見学後、李王家御慶事記念会による盛大な歓迎会に出席した（11月24日、写真②）。染工所青霞會館講堂で行われた歓迎会の会衆は400余人、大阪府知事、堺市長、堺市教育会長他から祝辞を受けた。余興では浜寺小学校有志児童、鳥田児童舞踏研究会、柳原の孫の清子等による合唱、独唱、舞踏など20種目以上が披露さ



漫画① 柳原吉兵衛



写真② 李王家御慶事記念会による歓迎会

れた。女教員たちには菓子、記念徽章、旅行用洗面用具・裁縫道具等たくさんのお土産が用意され、大歓迎を受けた。

続いて第一の目的である「鹵簿奉拝」のため前日から京都入りしていた一行は、26日早朝4時半に京都御苑に集合、13区に莫蔭を敷いて9時45分の奉拝を待った。席を確保(写真③)するために柳原は前年より準備をしており²⁰、それに対する感謝の気持ちは「幾十万の奉拝者が夜を通して沿道に露と霜に打たれてお待ち申して居るのに比べると、有難い事である。もったいない事である」²¹と記されている。鹵簿奉拝に関しては、入場券の写し、写真等も含め4頁を割いているが、ハイライトは以下のとおりである。



写真③ 鹵簿奉拝のための座席票と女子教員

祝意天地に満る国民奉拝のうちを御羽車を押し鳳輦は肅々と進御あらせ給ひ・・・仰ぎ奉れば、陛下には一々両側に居並ぶ赤子を嚮せられつゝ、舉手の禮を賜ふ御さまの、餘りに畏しとも長く感激の涙頬に傳ふ赤子の姿を彼處此處に見られたのは感激的な美しいシーンであった。私共一行は金光燦たる歴史的鹵簿を押し、国民的情景に十分ひたり、感激を語りながら、御所内を出た²²。

次いで、奈良女高師に向い留学生たちと懇談、翌朝から奈良(奈良公園、大仏殿、春日大社、若草山など)、伊勢神宮などを巡り、11月29日には東京に着いた。宮城を参拝後、社会局、東京日日新聞社を見学し、前朝鮮総督齋藤実宅を訪問した²³。翌30日は上野公園、明治神宮、靖国神社、三越等を巡り、12月1日は新宿御苑拝観後自由学園を訪問、学園長羽仁もと子の接待を受け、全生徒250人と共に当番が作った昼食を味わっている。

12月2日は早朝から昭和一回限りの大礼後の最初の盛大な観兵式に参列し、次いで李王邸を訪問、李王・李王妃に拝謁した。この二つの行事が、本視察第二の目的であり、感極まり感激に打たれた様子が3頁に渡って綴られている。

全国各地より集った光榮ある三萬五千の兵士が整列し、天皇陛下の御臨御遊ばされるを今か今かとお待ち申し上げてゐた。此の壯大な観兵式の陪観者十数万實に御大禮後最初の盛大な儀式である。午前八時四十分、儀仗兵を先頭に、天皇旗をひらめかしつつ御鹵簿は肅々と中央の玉座へとお進みになった。この時おこる君が代の吹奏。三萬五千の将卒動かんともせず・・・恐れ多くも天皇陛下には、御愛馬に召させられ、親しく軍容を閲はせられる。空中では分列式が開始され、百五十三機、翼を列ねて玉座の御前を爆音勇ましく進み・・・陸上では軍楽隊が新作の御大典奉祝の行進曲を奏して進み・・・李王陛下御指揮の御姿も、すぐ目の前に勇ましく拝されて御懐かしく感じた²⁴。

午後二時李王殿下の御邸に参上する。心しづめて別室に行き、整列して居ると、襖がゆるゆると両方に開かれた。兩殿下の御平和であり、且つ御優しき御顔を近く拝し得た時は、感極まって胸がどきどきするばかりであった²⁵。

京都に戻った一行は、12月4日には即位式の行われた紫宸殿や大嘗宮を押し、「国家最高の御

儀のあとをつぶさに拝し」²⁶、市教育会女子委員との茶話会、都踊りの見物を終えて帰途に就いた。柳原は大阪、奈良、東京、京都に同行し、団員と共に「国家最高の御儀」に参加したのである。

上述してきたように、小学校や新聞社等の見学もし、留学生や女子教員等との懇談も行ったが、この視察は、大礼を奉拝することこそが目的だったのである。柳原は「千載一遇とも申すべき御日出度い御大禮を機会に、建禮門前の鹵簿奉拝、代々木ヶ原の大観兵式の拝観、李王同妃両殿下への拝謁、京都御所御大禮あとの拝観等」²⁷をさせたかったのであり、「願っても叶はない身に余る光榮の数々に浴しました」「教へ子の前に修身のお話をする自信と新しい力を得たやうな気がして嬉しくてなりません」²⁸等の感想に満足したに相違ない。

しかし、前半とは異なり、後半の「漫画女教員視察団」からは、一行が常に緊張し全神経を注いで御大礼に参加していたのではないことが伝わってくる。鹵簿を待つ間、見知らぬ隣人から菓子やキャラメルが配られ（漫画②）、見学先での聞き取りにくい説明にも「分かった様な顔をしなければ失禮に当たる」²⁹から頷いていただけとうそぶく等、異文化の中での失態や疑問、体験談が面白おかしく描かれている。後半の漫画と記述がなければ、“窮屈で立派な記録”という印象は拭えなかったと言える。



漫画② 鹵簿奉拝時

※写真、漫画は何れも『大礼奉拝朝鮮女子教員内地視察記』より引用

②第二回「李王家御慶事十周年記念朝鮮女子教員内地視察」

二度目の内地視察は、1930（昭和5）年4月18日から5月7日（全20日間）に実施され、その様子は『李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記』（全50頁、以下『御慶事視察記』）、『向上』第22号（昭和5年7月20日刊）、『青霞翁柳原吉兵衛傳』等に残されている。団員が順番に記述するという方法や項目は前回と同じである。団員は出発際に2人の不参加があったため18人（女子高等普通学校教員3人、普通学校訓導15人）で、前年秋の柳原の依頼により京城府（7人）、11道（11人）から選出された朝鮮の人たちである。団長（朝鮮総督府視学官玄樞）、幹事（京城師範学校教諭砂田孝次郎）が引率し、柳原は今回も名誉団長として東京に同行している。

本視察の目的の第一は「李王家御成婚十周年記念奉祝と先般竣工された御新邸のお喜びを申し上げること」³⁰であり、前回参加の訓導崔承愛が勤労教育を実施して予想外の実績を上げるなど、教育界に及ぼした効果が多大であったことに励まされて³¹企図したと記されている。

総督府に集合後、前参加の田島泰秀や京城在住女子教員から「有益な面白いお話を承った」³²ことが二度目の利点である。厳島、大阪、奈良、東京、京都と視察ルートは前回とほぼ同じだが、1）歌舞伎を観劇したこと、2）李王家新邸並びに関屋宮内次官宅を訪問したこと、3）地下鉄、地下売店、高架鉄道、デパート見学等に関する素朴な感想が多数綴られていること、4）観兵式拝観が雨で中止になったこと、5）帝国議會（衆議院・貴族院）を参観したこと、6）教育現場の視察や女子教員との懇談が増えたことが主な特徴であり、前回との相違点ともなっている。概要・感想等は以下のとおりである。

東京に着いた一行は宮城遥拝を終え、夜は柳原夫妻と共に歌舞伎を観劇した（4月27日）。朝

鮮政務総監児玉秀雄の招待によるものであり、幕間には児玉から茶菓の饗応も受けた。「舞臺背景の美しさ、それに装置の完全にして轉換のすみやかなことと相俟って俳優たちの洗練された演技に恍惚と我を忘れて居る中に次から次へとプログラムは進んだ」という記述が残っている³³。翌日は容儀を整えて李王邸を訪問（写真④）したが、李王夫妻に接見した時の感想が、既述した一度目の訪問時とほぼ同じ文章であり、この点には驚きを禁じえなかった。皇室や日本精神等に関する感想は学校等で教え込まれた語彙の範囲を超えられないということなのであろうか。



影撮念記るり於に前駐立御邸新御京東家王李が行一團察視回二第
官務事執順王李・官務事堂三官李製・妻夫長會展和・官次田後唯王李りよ日人五右てつ向判前

写真④ 李王家新邸訪問写真

※写真は『李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記』より引用

続いて宮内次官関屋貞三郎宅を訪問、朝鮮を知っている夫妻から熱の籠った話が聞けたようで、「此一日は感激と感謝に満たされた恵まれた一日であった」³⁴という言葉で長い一日を結んでいる。しかし、天長節（29日）の観兵式拝観は雨で中止となったため、代わりに明治大帝聖徳記念絵画館を見学し、明治神宮、靖国神社等を参拝した。続いて訪れた三越での感想は生き生きとしたものであり、それは大都市東京の感想にも表れている。

最も近代的な設備の整った文化館とも云ふべき三越へと足を運んだ。さすがは日本一のデパートであるこの三越！文明の利器はかくも偉大なものであらうとは・・・稱賛に言葉なく、驚異の目で凡てを見つむるばかりであった。食堂で晝食を済ませ、買い物をし、午後五時に宿に歸った。一日の疲れは宿に於ける友達の感想談と懇談に依って癒されるものではあるまいか！？³⁵。

さすが東洋第一の都、否世界三大強國の一たる日本の首都だけあって秩序整然たるアスファルトの道路、両側に並ぶ宏壯な建物、なんと形容してよいやら³⁶。

上野驛に着き地下賣店を見た。地下道の両側に地上の如き店が並んで居るのである。そして地上にも省線電車は高架鐵道になって居る。・・・なんと便利なそして進歩した安全な東京ではありませんか³⁷。

帝国議會参観の感想は以下のとおりである。

吾等女の身として議會を傍聽し得られたことは實に光榮の至りであった。・・・整然たる

會場の有様誠に壯觀を呈して居た。かくて政友會代議士の猛烈なる質問演説また民政黨側より妨害反對する氣勢！本當に傍聽する我等一同の心を引きつけ緊張の氣分を漂はした。嚴肅なる議會の秩序熱烈な政治家の雄辯は何千哩も離れた處よりはるばると来た私共一同の永遠のインスピレーションになった³⁸。

本視察の最も大きな特徴は、教育現場の視察や女教員との懇談が増加したことである。内地到着以来、大阪市教育会視察、同女子部部員との懇談、大阪府立大手前高等女学校、堺市高等女学校、堺市殿馬尋常小学校、大阪市渥美小学校、京都皆山尋常小学校、本能小学校視察、奈良女高師留学生との懇談、同付属小学校、東京音楽学校、東京女高師付属小学校視察、同付属北沢種一主事の講話、京都教育会、京都市女教員会視察、同女教員との懇談、の順で実施された。主な感想は以下のとおりであり、生産・勤労教育、礼儀作法、教授法に深い関心を示していることが分かる。

殿馬小学校教師と生徒の勤勞即ち汗の結晶で出来上がった所の學習園へ導かれた。可成廣いものでここに植ゑられてある總べての植物は當校生徒の栽培によることは勿論築山あり、泉水あり、動物飼養せるあり、特に簡易運動器具等の設備もあったのが一同の目を引いた。丁度見學中五學年の兒童が油菜園に来て教師の指導の下に嬉々として實物につき觀察研究して居る様子竝に一年生がきれいに咲いて居る花壇の間で遊戯して居る可愛らしさ、また處々にて實物又は風景を寫生せるもあり、日常の學習に大いに利用されて居る實状を見て有益に感じ又多大の参考となった³⁹。

本能小学校四女の裁縫教授に於ける教師の巧妙にして熟練せる手なみと兒童の活動と相呼応せる學習振り、六男の手工に於ける夫々箱の製作に夢中なる仕事ぶり、三女の唱歌學習に於いては設備の完備と共に指導者の楽器に堪能にして兒童の取扱の巧みな餘裕ある教授振り等技能科の指導法は多大な参考になった⁴⁰。

生産教育及生活指導は大いに其の主義を汲み得る様に努力しなければならぬ。兒童の禮儀作法の範を採り又學校職員として來客に對する親切なる接待振り大いに私の學校に私の身に以て實行すべきものと感ず⁴¹。

しかし、前視察時と同様に、以下の感想が正直な気持ちを表わしていると言える。

小學校教育が生活指導生産教育と密接なる結びを示したるは、之れ朝鮮教育に身を投じて居るものは大いに範とするの価値ある。豊富な設備は朝鮮の學校に直ちに其の儘採用することのできない点もある⁴²。

また、時代に即応した感想もある。

設備完全なるは云ふまでもなく、・・皇室尊崇の念を養ふ爲、屋上に遥拝場を設け月の十五日には全校生徒を集合せしめて遥拝を行ふこと又長者を尊敬し相互扶助の精神を養ふてゐるとのこと。これが国民精神を養ふ理想的施設ではあるまいか、朝鮮にはいまだかゝる設備なきを残念に思い⁴³・・・。

學校の視察が増加した背景に、前参加者の意見があつたのかどうかは定かではない。団員たちの文章が生き生きするのは、上述のとおり、異文化に對した時の驚きや感嘆であり、學校教員として馴染みのある教育現場での感想である。

③第三回「朝鮮女子教員内地視察」

三度目の内地視察（以下、「第三回視察」）は1934（昭和9）年4月20日～5月7日（18日間）に実施された。後日報告書が刊行されたようだが、入手できていない⁴⁴。『櫻樞の華』第2号（昭和9年4月20日刊）、同第3号（昭和10年4月6日刊）、『青霞翁劉柳原吉兵衛傳』、『文教の朝鮮』106巻6月号（1934年）等に残存する記事から「第三回視察」を把握・検証していきたい。

団長（朝鮮教育会囑託北川清之助）、幹事（京城樞華女学校教員金東玉、桜井公立尋常小学校訓導中谷文子）引率⁴⁵の下、13道から選出された18人（女学校教員4人、普通学校訓導14人）が参集した。幹事の金東玉と団員の女学校教員は5人とも奈良女高師の卒業生であり、最優等表彰を受けた者が7人（教員3人、訓導4人）いる。柳原が名誉団長として、東京、奈良に同行した。

視察の目的は、「李王家御慶事記念日（四月二十八日）当日ニ王家東京邸へ一行伺候ノ爲メ及び天長節観兵式拝観ノ爲メ且ツ奈良女子高等師範学校創立二十五年記念祝賀式（五月一日）参列」である⁴⁶。奈良姫によると、報告書には「日本の権威を確認させ内鮮融和を進めるとの狙い」と書かれているようである⁴⁷。柳原は「女子教員を内地に迎へるに際して」と題する文章の中で、「親しく御面會の上、育英事業にある方々に微衷をお話し充分に御了解を願って理想に進んで行きたい」と記しており、微衷とは「国民精神作興の門に入る鑰である教育への奮起を期待する気持ち」⁴⁸と読める。前二回にわたって招待した人々が、「帰国後教育事業の第一線に立って御活動であり、學務當局において其の功績を認められて居られる方もあり・・・この催しの決して無駄でなかったこと」⁴⁹を喜び計画したことが分かる。

コースは前二回とほぼ同じだが、京都、宇治山田、東京、奈良、大阪、巖島と逆回りで実施された。一同揃って日光見物（4月27日）を終え、翌28日の李王家御慶事記念日に柳原は金東玉（今視察の幹事で昭和5年に皇太后に献上した人形衣服の謹製者）、崔貴蘭（今視察団員で昭和7年献上の朝鮮金剛山図刺繍の謹製者）を連れて大宮御所を伺候、入江皇后宮大夫に面接している。その後、朝鮮総督も歴任した齋藤実首相の招待により一行と共に官邸を訪問し（写真⑤）、大食堂で茶菓の接待を受けた。団長の北川は、齋藤が一行に「柳原君は名利を離れて内鮮のために尽くして居られるのには常々から私は敬意を表していると語られたのは全くハラボジの大きい徳の輝き」だと記している⁵⁰。次いで李王家東京邸へ伺候、両殿下に拝謁し御成婚第十四回目の祝詞を述べた。29日は天長節恒例の観兵式に陪観、柳原は「特別観覧席に着き燦然と輝く天皇旗を拝し奉る」⁵¹と綴っている。

奈良女高師開校25周年記念式に参列（5月1日）し、染工所青霞館で歓迎会を開催（3日）、翌4日はバスを借り切って大阪の名所、教育施設等を見学後、大阪知事別館で開かれた内鮮協和会主催の歓迎会に招待された。

団長北川は本視察を下記のようにまとめているが、女教員たちをこれらの諸行事に参列させたかったために、「逆回り」で日程を組んだのである。

伊勢大神宮での御優待、東京にて首相官邸の齋藤首相御夫妻の御懇切なる御歓待、李王家の御引見の光栄、新帝国議事堂の偉観見学、明治神宮参拝の優遇、奈良女高師の二十五周年



写真⑤ 齋藤実首相邸訪問（『櫻樞の華』第3号、1935年4月6日刊）より引用

記念式参列、堺市青霞会館にて李王家御慶事記念会の盛大なる御歓迎の歓喜、大阪府知事官邸別館の官民多数の御歓迎の盛会等・・・又京都成徳小学校、堀川高等女学校、宇治山田市厚生小学校、奈良斑鳩小学校、堺錦綾小学校、巖島小学校等の参観・・・⁵²

上記のまとめに続き、神宮・官邸などを訪問した前半部、各学校を見学した後半部に対する感想が以下のように記されている。

一生涯を通じて記念すべき事で、国家観念に燃え内鮮融和の真諦を体験し真に人類文化の進展に貢献すべき感銘を強くし・・・各校参観には深刻なる精神的陶冶、訓練の徹底など筆舌に到底尽くし得ざる或る力を如実に観取し得たのであります⁵³。

「御優待、御歓待、御歓迎」等の文字が頻出するが、その背後には柳原と関係者との多くの遣り取りがあった。北川はその点にも触れている。

朝鮮教育會に入って僅かに一年足らず・・・卓を並べるお隣の方で早くから人選や日程や往復の交渉等準備に手数のかかって居る事を承知していた。わけても日程作成の朝野主事はあれこれと主催者と團員との各々の心持や互の儀礼的行動のとれる様にとか、とても苦心して日程を作成して居られたのであった⁵⁴。

反面、李の論文には次のような団員たちの発言が載っており⁵⁵、日中戦争へと進んでいく時代の潮流を感じる。

内地の児童は幼き時より家庭において父母の慈愛の教育を受け、父母と共に神の教育を受け、成長するにますますの敬う心養われ、神社崇拜の念が培われ、全国民の信仰の心に集中し、之より国民精神は統一され、純化され国家的観念が啓培される。

吾等を守る兵隊さん、教育の完成は立派な兵隊に仕立て上げること。

李良姫は「視察で観察した事柄を朝鮮の地で実行することが求められた。つまり、教育の場における見知の還元である。・・・内鮮融和に即した形で、児童を教育することが求められたのは疑い得ない。とりわけ、教育観光団は・・・植民地政策の一助として利用されたと言えよう」⁵⁶と断じている。しかし、堺での歓迎会の後、柳原は団長に下記のような依頼をしていることを付け加えておきたい。「植民地政策」がもたらしたもののの中には、以下のような交流も存在したのである。

團長さん、今晚一晩だけ娘四人を私に預らしてください。さあ皆、みんなの好きな美味しい澤庵漬を昨年の秋から澤山こしらへて待っている。なんと其の嬉しそうな様は全く孫娘が帰着したように嬉しがって居られる。

此の情愛の発露、人類愛の美しさに傍の私は胸が詰まって唯黙って快諾したのであった⁵⁷。

3. 皇室に対し敬意を持つことになった機縁

上述してきた内容からも明らかなように、李王家御慶事記念会主催による三度にわたる内地視察の特徴は、①昭和天皇即位式関連諸行事の拝観、②李王家並びに総督府関係者宅への訪問、③皇室や朝鮮王室の方々及びその関係者等への朝鮮人女子教員の引見、ということであり総督府主催の視察とは著しく異なる点となっている。これは柳原が関与したために実現したことであり、既述のような謁見の場の設定を何よりも柳原自身が望んだのである。柳原は方々に働きかけ、実現に向けて時間と労力を注いでいるが、柳原が皇室に対して敬意を持つようになった機縁に言及

しておきたい。

1903（明治36）年、柳原は大阪で開催された第5回国勸業博覧会にカーキ色軍服地を大和川染工所の製品として出品し受賞した。京都滞在中の天皇は国産軍服のカーキ染色が完成することを日頃から望んでいたため、受賞した品を京都御所に差し出して天覧に供するよう申し付けた。柳原始め染工所の一同は驚喜し、この予期しない光栄は非常な感激となり、皇室をこれまで以上に尊敬する機縁となった。さらに、1914（大正3）年11月、大阪城に駐輦していた天皇に実業方面から種々の生産品の天覧があった中、特に国産カーキ色の軍服地に目を止められ、「献上品御嘉納の上、お買上げの御命に浴するを得・・・大正5年にはシャム国軍服地の染色加工を特約」⁵⁸することとなった。また、1916（大正5）年には、柳原が関与していた堺加工セルロイド株式会社（染工所の合名会社、1921年に閉鎖）が制作したセルロイド人形（大阪府知事が「やまと人形」と命名）が宮内省のお買上げの栄を賜うこととなった。このような出来事が大きな感激・喜びとなり、既述した諸例の後押しもあって1920（大正9）年の「李王家御慶事記念会」結成へとつながっていったのである。

1924（大正13）年11月、皇后が堺市に行啓の際、柳原は奈良女高師在学中の朝鮮人留学生を引率して水族館内で奉迎したが、皇后から会釈があり、さらに大森皇后官大夫から「内鮮事業に、殊に学生の世話は・・・ご満身に思召さる」との言葉を伝えられ甚く感激した。続く12月2日の皇后御陵参拝の折には実業奨励のため宮内事務官を染工所に差遣、柳原には「朝鮮学生の世話をよくせられることを喜ぶ。工場の精神は朝拜⁵⁹から発する」との御言葉と共にお菓子の下賜があり、工具朴は「我らはこの光栄を如何に感謝してよいか知りません⁶⁰」と述べている。染工所全体に、皇室を敬う気持ちが浸透していたことが窺える。さらに翌14年1月、大阪府知事が皇后に拝謁の際、「堺の柳原が朝鮮学生の世話をするは篤志のことなり」との言葉を伝え聞き、感涙にむせんだ⁶¹と記されている。このように立て続けに直接皇室との関わりを持ったことが、ますます尊崇の念を強くすることにつながったものと思われる。

上記のような体験に感激した柳原は、折につけ多様な品々を皇室に献上している。1920（大正9）年、李王世子垠と梨本宮方子の御成婚が公表されると、柳原はセルロイド加工の化粧道具を謹製して献上し、皇后奉迎の際には奈良女高師留学生謹製の刺繍付きクッション一対を、また別の折には市松人形を献納した、等々である。

実業家、大阪内鮮協和会方面委員、御慶事記念会会長等としての活動が評価され、柳原は何度も観桜会、観菊会に招待されており、1932（昭和7）年には大演習のため大阪に駐輦中の天皇に拝謁御陪食者十人の内の一人に選ばれた。紡績、人造絹糸、ペイント工業、日本の製鉄工業、鑄造鉄管などについて事業功労者9人が5分ずつ言上したが、柳原の言上は20分に及んだ。御下問の第一は綿布加工業について、第二は朝鮮と柳原についてであり、時間が超過した経緯は以下のように綴られている。

吉兵衛は二十分、まさに四人分を費やした。退出すると鳩山文相が時計を示しながら「柳原さん、どんな話をしたか知らんがこれはレコード破りですよ」と言う。「ヂヂとババが朝鮮行の話を申し上げましたところ陛下は聲を立ててお笑い遊ばしつぎつぎに訊かれましてナ、話すことは何ほでもあります」と言ったので並る高官連もどっと笑い興じ⁶²・・・。

この日の喜びを「一介の老実業家がこの光栄に浴したことは家門の譽であります。粉骨碎身この天恩に答え奉らんことを期して居ります。・・・いかにすれば天恩の万分の一にも報い奉るこ

とができるかと衷心恐懼している次第であります」と記し、後日、県知事も「陛下は君の話が面白かったと仰せられた」と伝えている⁶³。

柳原の衷心恐懼には、皇室・朝鮮王室との直接の面談や諸体験が大きく作用していると思われる。何度にも及ぶ謁見等の直接体験、折にかなった適切な言葉や伝聞を耳にしたことなどが相乗効果をもたらし、柳原はますます皇室への尊崇の念を強くし、柳原自身が企図する支援活動に励んでいったものとする。他方、柳原はキリスト教会でも長老として活躍している。柳原の皇室への尊崇の念は、一神教のキリスト教信仰と矛盾するものではなかったことを付記しておきたい⁶⁴。

4. まとめ—支援活動に対する関係者の評価

上述してきたように柳原は朝鮮人女子留学生や女子教員に対する種々の支援を実施してきたが、周辺にいた関係者はどのように評価していたのだろうか。その点を諸資料の中から探っておきたい。まずは、李王家御慶事記念会結成に対する評価である。

4月28日の吉辰を記念して喜びを共にしようというのが発端であった。しかし名は実を示さねば意味なく名実ともに会の成長と発展を示すに至ったのは、吉兵衛の他意なき熱心がこれを大成なさしめた⁶⁵。

吉兵衛は日韓親善とか内鮮融和の本体は人格の触れ合いが、お互いの親愛感を増すことにあるので、派手なお祭り騒ぎをすることでない信じていた。吉兵衛の最も喜んだことは、成立した御慶事記念会を通じて、韓国の人々と触れ合う場を造り、人間同士が人種を超えて親愛の交りのできる事であった。・・朝鮮八道の女学校の最優等卒業生を表彰したことが縁となり、そうした親愛の場が作られるようになったのである⁶⁶。

いずれも柳原の素朴な願いが発端であり、相互の交流に喜びを見出していたという評価である。一方、支援に対する評価は以下のとおりであり、支援を受けた側からは深い愛情から発したものと捉えた内容が記されている。

今回の催しは本當に人類相愛の泉から湧き出た已むに止まれぬ尊い愛の迸りだと只々感激の外はありませぬ。斯うしたやさしい美しい御事業は慥かに熱烈な宗教的信念に立脚した純粹無垢のものたることを固く信じるものであります。・・・貴殿の恬淡、無邪氣、童顔を以って誰彼の区別なく接せらるる御態度、お気持ち様が特に奥床しく、嬉しくて堪らないのです。かかる温い尊い御心情に親しく接した我らには何か知れぬ深刻なる或る物を印象付けられました⁶⁷。

一視同仁のキリスト教的精神を以って彼らと交際すべきであると信じ、日本へ渡来してくる朝鮮人に愛の手を伸ばす運動を始めた⁶⁸。

さらには皇室や朝鮮王室、それは日本の朝鮮支配を象徴するものであるが、女子留学生や女教員の感想・手紙には、皇室との謁見等には違和感を抱かず、光栄に思うというレベルで捉えられており、拒否や反発などマイナスの評価は見られない⁶⁹。前述した通り、女教員全員が皇室等に対して同一の語彙・語句を使用している点から学校教育の影響力の大きさが分かり、柳原が期待するほどの受け止め方をしていないことが窺える。しかし、1920年代から、朝鮮では抗日学生運動が頻発し、中・高等教育機関の生徒・学生だけでなく、児童や教員にまで拡大していた。内地学事視察は、そのような教育事情の中で実施されていたのであり、総督府学務局は、国民精神涵

養を期待して、柳原の企画を支えていたのである⁷⁰。

柳原は、1926（大正15）年3月には事業を長男に任せ、御慶事記念会の事業を始めとする社会事業に専念するようになった。朝鮮への渡航は計8回であり、柳原が行けないときは三男で御慶事記念会幹事の貞次郎、松本寛一等が代行した。帰朝した元留学生や知人を訪ね、交流することが何よりの喜びであった。それを裏付ける証言は幾つも残っているが、柳原は「乗客の中にはブラリと遊覧気分で出かける人、一儲けてやろうと行く人もあらうが、私たちは・人との和、友情を温めに行くのだ」と言い、貞次郎は「親しい方々と睦む事のできる幸福を感じる。朝鮮に来る父の唯一の楽しみは是⁷¹」と応じている。以下からは、柳原がこの支援活動を楽しみ、あたかも道楽のように行っていたことが伝わってくる。

実際彼はこの仕事を楽しんでやっていた。かつてある有力な一婦人が吉兵衛の横顔について「柳原さんが韓国の方々のことを語るとき、笑みを含みいかにも楽しそうに親善の働きに打ち込んでいると言う奥床しい人格が伺われました」といっているが実際周知の方々も異口同音に「柳原さんは朝鮮八道の方々と親善融和を恰も道楽に凝る人の如く愉快にやっていた」と言われた。確かにこれが彼の晩年の道楽だったと言ってよい⁷²。

しかし、一点気になることがある。8回も訪朝し、多くの朝鮮人女学生・女子教員等と交流を持ちながら、柳原自身による朝鮮の文化に対する言及、関心を窺わせる文章が見当たらないことである。皇室に献上するだけの刺繍や絵画の腕前を評価し、優秀な女学生と記しながら、それを生み出した朝鮮の文化に対する言及を現時点では見つけることができていない。「文化の発達した内地」⁷³を良しとし、内地のようになることを願った点に、柳原の異文化への眼差しの欠如が窺え、それが、多くの支援の中にあつた水泡の一つとなったように感じる。もし、朝鮮を内地とは違った文化を持つ国と見ることができたならば、内鮮融和政策や植民地政策をも相対化し、疑義を持つ一助となつていったのではないだろうか。

柳原は1945（昭和20）年3月2日に88歳の生涯を閉じた。2月15日、書類を整理するために土蔵に入り、階段を上ろうとした曲がり角で躓いて倒れた時の後頭部の打撲が致命傷となつた。前年10月には李王夫妻の銀婚の祝いに上京し、傷を負う前日には伊勢大廟に参拝して梨本宮と懇談するなど、最後まで皇室との交流を持ち続けた。柳原の最後に対し、自伝は以下のような感想を記している。

それから間もなく東都の爆撃ますます激しく大宮御所に爆弾が落ちるし、宮城内の炎上なども報じられたが、故人はついにこれらの一切を知らずして天上に召されたのであつた。皇室の罹災を知つたとしたら身もだえしたであろう故人にその悲痛を味わうことなく、いとも平和のうちに「必勝」の信念を守り続け、八十八歳の生涯を全うして天国に凱歌をあげた⁷⁴・・・。

もし、柳原が元気で戦後を迎えていたら、柳原は天皇のいわゆる人間宣言や自身の支援活動をどのように捉え、評価したであろうか。その意見を聴いてみたいというのが率直な感想である。

注

- 1 柳原吉兵衛の支援活動に関しては、「植民地下朝鮮の女学生—進明高等女学校を中心に—」でも一部を記述した（『岐阜大学留学生センター紀要2006』所収）。参照されたい。
- 2 「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」（『大和川染工所七十年小史』所収、1966年）、p.140

- 3 朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学』（山川出版社、2005年）、p.83
- 4 樋口雄一『協和会—戦時下朝鮮人統制組織の研究』（社会評論社、1986年）、p.230
- 5 注8で引用した柳原高志編集・発行の『青霞翁柳原吉兵衛傳』では、「柳原」になっている。2014年12月の同氏への聞き取り調査でも表記について言及があった。
- 6 前掲「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」、p.22
- 7 同上、p.120
- 8 後に、金相哲は伊藤博文暗殺を目的に鉛売りに化けて渡来した諜報者の一人であったことが判明した。堺に流れ込んだ金は染工所が工員見習の志のある朝鮮人を募集していると聞き、時機を窺うまでの身の隠し場所として好都合と考えて働き始めたのだが、金は、日本人に対する憎悪が薄らぐのを恐れ、何度も逃走を繰り返した。しかし、八方探し回っては連れ戻し、叱ることもなく我が子と同様に接する柳原夫妻に次第に心を開くようになる。夜学に通って中等以上の学力を付けた金に、柳原は有力な紹介状を持たせて帰朝させた。金は、水原の拓殖会社に入り、模範的農業監督者となっている（梅田安之『青霞翁柳原吉兵衛傳』1949年刊の私家本を、曾孫の柳原高志が2013年に編集・発行）、pp.50～51
- 9 内鮮協和会発足当時（1923年）、大阪府の朝鮮人夜学校は2校であり、27年に4校設立したものの初等教育の普及は進まなかった。
- 10 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、pp.36～37
- 11 淑明女高普、進明女高普の2校は朝鮮王朝第26代高宗皇帝の側室、嚴妃によって開校した女学校であるため、最初の対象校となった。李王垠と方子妃も同校を度々訪問している。
- 12 柳原の書簡には「毎年表彰者増加セルハ新設学校ニ付テモ卒業者ヲ出ス毎ニ表彰セルコトトセル関係ニ由ル」と記されている（昭和16年11月4日付朝鮮総督府学務局学務課内財団法人李王家御慶事記念会理事長真崎長年宛）。また、「金属類ノ制作ハ時局下ノ事情ニ於テハ殆ンド不可能ニ有之・・・従来ノ通「メタル」ノ贈与ハ困難ト被存候ニ付テハ他ニ適当ノ物ヲ選定スルカ又ハ金属ニ代ルベキ品物即チ代用品ヲ以テ之ニ充ツルカノ方法ヲ今ヨリ考究シ準備ニ着手スルノ必要有之候」（昭和16年11月11日付同上理事原田次郎宛）という書簡も残っており、柳原が細部にわたって配慮し関与していたことが分かる。
- 13 『朝鮮総督府主催女教員内地学事視察録（昭和二年度）』、p.13
- 14 李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」（『北東アジア研究』第13号、2007年刊）、p.158。朝鮮人が日本への観光旅行を組織的に行う際には「内地観光団」という名称で呼ばれることが多く、教員や学生の父兄を中心とした「教育観光団」や修学旅行など様々な形態が存在した。同論文によると、朝鮮人に対する最初の内地観光団は、1909年に『京城日報』が主催して組織・実施したものである（同上、p.157）。他方、日本からの修学旅行は、1896年に行われた兵庫県立豊岡中学校の満州・朝鮮旅行が最初であり、1906年には広島高等師範学校も満州・朝鮮の修学旅行を実施している。1920年代に入るとその数はますます増加し、1920年5月1ヵ月間の国有列車利用団体旅行客21,408人のうち学生の団体客は16,900人と記されている（同上、p.156）。
- 15 普通学校とは朝鮮人児童のための小学校のことである。男子あるいは女子のみの普通学校も存在した。1938年制定の「第3次朝鮮教育令」により、名称が小学校に統一されるまで、「普通学校」が使用された。

- 16 前掲『朝鮮総督府主催女教員内地学事視察録（昭和二年度）』、p.39
- 17 同上、p.28
- 18 柳原は1907年、染工所内に「克己団」という労使扶助団体を結成し、雇用労働者や地域住民に対する慶弔、病気・災害時の共済援助等を実施した。また、「職工講話会」を開催して労働者の健全な職分意識の鼓舞、科学的知識の習得、教養・趣味のある生活の奨励をただでなく、リクリエーションの場も提供した。克己団の機関紙が『向上』（1919年7月23日創刊）であり、紙面を通して修養、節約、節制などの価値観を訴えた。李王家御慶事記念会、朝鮮からの女子留学生等に関する記事も当初は『向上』に載せられたが、後に『櫻権の華』（1933年12月25日創刊）を刊行し、関連記事を載せるようになった。
- 19 朝鮮総督府編輯課田島泰秀編『大礼奉拝朝鮮女子教員内地視察記』（非売品、以下『視察記』）、1929年4月、pp.2～3
- 20 柳原は、元朝鮮総督府学務局長で当時宮内次官だった関屋貞三郎に宛て、御盛儀奉拝・鹵簿拝観等に関し「何日より御所拝観御許し相成候哉御洩し被下度偏に御願申上候」との手紙を出すなど（昭和3年8月16日付）、早くから準備を進めていたことを示す資料が残されている。
- 21 同上『視察記』、p.16
- 22 同上、p.17
- 23 「四時頃五臺の自動車に分乗し、前朝鮮總督齋藤閣下のお宅を訪ふ。奥様、若奥様の御接待によって御馳走になり、おまち申上ぐ。五時頃御帰りになり、温顔に接し得ておなつかしく感じた。今日ここで親しくお目にかかれ、御一家の皆様とお話し出来たのはほんとに嬉しかった」と記されている（同上、p.24）。
- 24 同上、pp.28～29
- 25 同上、p.30
- 26 同上、pp.32～33
- 27 前掲機関紙『向上』第19号（1929年1月15日刊）、p.2
- 28 前掲『視察記』、p.41
- 29 同上、p.51
- 30 玄櫛編集『李王家御慶事十週年奉祝記念朝鮮女子教員内地視察記』（非売品、以下『御慶事視察記』）1930年7月31日、p.3
- 31 「ただ家の中で座食していることが一つの誇りであるかのように思っていた朝鮮婦人に勤労教育を実施した結果、泥田で働くようになり夫や子どもにまで影響を及ぼし、学校では児童の勤労の一部が正課に加えられるようになった」ことにより、崔承愛は教育界から注目を集めたようである。それを喜び、柳原は1930年夏に崔を大阪に招待し、社会事業（石井記念愛染園、博愛社など）や農事の現場（農事試験場、葡萄組合農園など）を見学させている（『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.138）。
- 32 前掲『御慶事視察記』、p.7
- 33 同上、p.27
- 34 同上、p.29
- 35 同上、p.31
- 36 同上、p.26

- 37 同上、p.29
- 38 同上、pp.31～32
- 39 同上、p.17
- 40 同上、p.23
- 41 同上、p.40
- 42 同上、p.40
- 43 同上、p.20
- 44 前出の李良姫によれば、北川清之助編『朝鮮女教員学事視察報告書』（1934年）が刊行されたようだが、国内の図書館には保存されていない。同編「女教員内地視察團の記」が『文教の朝鮮』106巻6月号（1934年）に載っている（pp.64～83）。
- 45 『櫻権の華』第2号（昭和9年4月20日刊）の記事では、団員、日程・見学場所は決まっていたものの、団長、幹事とも未定となっており、団員の中に中谷・金両名が記されている。日付から見て、直前まで決まらなかったため、二人が幹事に移行したものと思われる。中谷は日本人、金は奈良女高師卒業で最優秀表彰も授与されているための人選であろうが、学事視察始まって以来初めての女性幹事であった。団長の北川も「さて出発の日が近づいた。突然自分に團長として出発せよとの事、こんな事であったら初めから之に関する事務だけでも自分でして置くのであったなどと悔んだり・・・団長としての決心、注意等々に頭をひねった」と記している（前掲『青霞翁劉柳原吉兵衛傳』、p.143）。
- 46 有松しづよ「朝鮮人女性教員による『内地視察』と李王家御慶事記念会」（『桃山学院年史紀要』第29号所収、2010年）、p.8
- 47 李前掲論文、p.158
- 48 前掲『櫻権の華』第2号、p.1
- 49 同上、p.1
- 50 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.145
- 51 同上、p.3
- 52 同上、p.145
- 53 同上、p.145
- 54 同上、p.143
- 55 前掲李論文、p.159
- 56 同上、p.159
- 57 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.144
- 58 同上、p.102
- 59 柳原は毎朝個人的に讚美歌を歌い、聖書を読み、祈祷してから仕事を始めていたが、その習慣を工具に呼びかけたところ、強制ではないにもかかわらず、全工具が集うようになり就業30分前に朝拝が行われるようになった。この集いから克己団が誕生し、数々の救済運動が開かれるようになったのである（同上、pp.40～41）
- 60 同上、p.47
- 61 同上、p.115
- 62 同上、pp.165～166

- 63 同上、pp.166～167
- 64 柳原は皇室、朝鮮王室に対する尊崇の念を持ち続け、文章にもその気持ちを多数記している。その言動は当時の聖公会も有していたものであり、佐治孝典は著書（『歴史を生きる教会—天皇制と日本聖公会』、神戸学生青年センター出版部刊、2003年）の中で、「戦中の天皇・天皇制を肯定し、協賛する資料は『基督教週報』をはじめ、各種の公文書、書簡などに残されているが、当時これに意義を唱え、疑問を呈する資料はほとんど見出されていない」（同上、p.1）と指摘し、柳原に関わる二人に言及している。一人は御慶事記念会幹事の元田作之進（聖公会東京教区初代主教で、初期の『基督教週報』発行編集人）であり、「良山」のペンネームで「君主の馬前に忠死することを知るものは、天の王の為に全身全霊を挺出することを知り易く、国家の為に一身を犠牲にすることを解するものは、亦天国の為に身命を^{なげう}抛つことを解し易し。蓋し其主義に於いて同一なればなり」と書いている。佐治はこの文章を、「君主と天主、国家と天国が何の否定的媒介もなしにそのまま直結してしまっている」と批判している（同上、p.18）。もう一人は柳原の三男貞次郎（当時聖公会大阪教区主教）であり、『基督教週報』に「キリストの十字架の恵みを通して真に己に死に、神に生き、私に死に、公に生きる途を見出すのである。キリスト教が此の国家非常時において貢献する途もまったくここにある。…利己的な己を捨て国家社会の為に身を挺する奉公の真に生きる時である」（同上、pp.56～57）と書いている。佐治は「当時の天皇制国家の有様を正当にして、道義にかなったものと捉えており、…イエス・キリストの神と公、即ち国家との間には、何の否定的契機も介在する余地がなく、そのまま直結するものと信じているようである」と評している（同上、p.57）。柳原を支えた二人の言動には、柳原の主張と同様の思考傾向が窺える。三者とも上記のような批判を招く思想を持っていたばかりでなく、当時の聖公会自体も同様の思想を有していたのである。
- 65 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.119
- 66 前掲「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」、p.141
- 67 同上、p.148
- 68 同上、p.140
- 69 視察記は半公的なものであり、皇室との接触到違和感を唱える文章を綴ることは難しく不可能に近い。しかし、朴宣美も「柳原に送った彼女らの手紙に限って言えば、皇室との接触到違和感を抱かず、光栄に浴するものとして認識し、少なくとも拒否・反発はしていなかったように思われる」と記している（朴前掲書、p.103）。
- 70 李王家御慶事記念会と朝鮮総督府学務局の関係については、前掲有松論文に言及されている。
- 71 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.148
- 72 前掲「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」、pp.149～150
- 73 前掲『青霞翁柳原吉兵衛傳』、p.167。柳原は天皇の御下問に対し、「文化の発達した内地で教育して朝鮮に帰らせしめて内地のことを朝鮮人に理解せしむる点に於いて大いなる効果のございますことを多年の経験によって知ったのでございます」と応えている。
- 74 同上、p.179

岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）

—末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興—

Theaters in *Inaba* area of Gifu (2) :
Suehiro-za and *Kunitoyo-za* after the *Nohbi* earthquake

土 谷 桃 子

要旨：

明治初年の岐阜の伊奈波地域には、末広座、国豊座という芝居小屋があった。筆者は「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7）で、両座の開場について述べた。本稿はその続編として、明治19年（1886）11月に焼失した末広座、24年10月に濃尾地震で倒壊した国豊座が、その後どのように再築・再興されたのか、主として『岐阜日日新聞』の調査から判明したことを著したものである。両座ともに再築はスムーズではなく、年単位での時間がかかった。両座不在の間、伊奈波の空地が興行用地として使われることもあった。両座は最終的には再築され、末広座は規模を縮小して26年4月に、国豊座は会社組織による運営で28年12月に復活し、伊奈波の芝居小屋が再度並び立つこととなった。

岐阜の芝居に関する記録については、別途『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』（JSPS 科研費25370213（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）助成調査成果）としてまとめたが、その調査過程で、両座以外の新興芝居小屋、来岐役者や上演演目等への目配りの必要性を感じた。今後はこれらの点についても考察したい。

はじめに

筆者は「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7）で、明治初年に開場した両座の動向を中間報告として著した。末広座は明治9年（1876）、国豊座は同11年以前に開場し、伊奈波に存する大規模な芝居小屋として興行を重ねた。実態を垣間見るべく、「団菊左」と並び称された9代目市川団十郎（1838～1903）、5代目尾上菊五郎（1844～1903）、初代市川左団次（1842～1904）の両座での興行実態を新聞及び雑誌記事から浮かび上がらせ、名古屋劇壇との関連が深いことや、役者たちが岐阜ならではの風物を楽しんでいたことを記した。

しかし、末広座は19年11月27日に焼失しており¹⁾、その後いつ再築・再興されたのかを明らかにすることはできなかった。また、国豊座は岐阜一帯に甚大な被害を与えた濃尾地震（24年10月28日）で被災したが、その後どのように復活したかも追えなかった。本稿では、継続調査（主として『岐阜日日新聞』を対象とした）で判明した、その後の両座の再築・再興の経緯を記し、前稿で述べた時期以降の明治の伊奈波地域の芸能状況の一端を明らかにしていく²⁾。

1. 末広座 ～焼失から再築まで～

末広座は、明治19年11月27日に焼失したが、その再築についての最も早い言及は、『岐阜市史通史編 近代』（1981）の「末広座は、翌二〇年一月四日元の大きさの小屋に新築することに決定した」（p.1057）であるが、残念ながらこの記述の根拠を確認することはできなかった³⁾。この記述を信じればすぐに再築が検討されたように見えるが、実際には再築までかなりの時間がかかっている。『岐阜日日新聞』で末広座（跡地）のその後を濃尾地震まで追うと、以下のような記事が散見される（旧字は新字に改める。空欄挿入、下線は筆者。振り仮名は適宜削除。以下の引用にても同様）。

○一町内の喧嘩 兼て本紙にも掲げし如く 今度末広町山手の稲荷堂を 末広座焼跡へ移す付ては 夫々入費も掛るとなればとて 町内より一同若干宛の金を献納したり（略）（岐阜日日新聞 明治20.9.15）

○国豊座移転 国豊座近傍には 今度倶楽部を設置するに付 同座は今度末広町旧末広座焼跡へ移転する由にて 目下其地主と談判中なりと聞く（岐阜日日新聞 明治20.10.1）

○闘鶏処分 予て日外の紙上に掲げし 去十五日 当地末広町三浦千春氏の扣地（芝居小屋跡）にて 鶏の角力を興行せしせつ 密に懸勝負をなしたる科により 岐阜警察所へ拘引せられ（略）（岐阜日日新聞 明治21.3.28）

○寄合相撲 当地末広町の末広座の跡にて 来る二十六日 素人角力を興行するよし（岐阜日日新聞 明治21.4.21）

○喧嘩 一昨二十七日当地末広町の末広座跡にて 素人角力興行の際 厚見郡旦之島村の若者連と市中の者との間に 何かと口論を始め（略）（岐阜日日新聞 明治21.4.29）

○相撲興行 予て本紙に掲載せし如く 東京幕の内にて有名の力士 若湊、嵐山一行の大相撲は 愈よ来る三日より興行する由にて 場所は伊奈波広小路の如く記載せしが 末広町の旧末広座跡になりたりといふ（岐阜日日新聞 明治22.10.1）

これらの記事によれば、跡地は一定の広さがあることで相撲等の興行に活用されていたようだが、再築の気配はない。20年10月1日の国豊座移転の記事が気になるが、記事中の「倶楽部」が謎であるし、続報も見られない⁴⁾。なお、国豊座は同年9月に5代目尾上菊五郎を迎えた興行で好評を博しており隆盛である。21年3月28日記事の「三浦千春」という人物が調査の手掛かりになるかもしれないが、現時点ではこの人物について未詳である。末広座は再築の目処が立たないまま、濃尾地震に遭ったのではないかと想像される。

調査の過程で、末広座焼失後の事実と齟齬が生じている資料があったので、それらについて簡単に触れておく。『岐阜県史 通史編 近代下』（1972）に「岐阜末広座で一九年末「岐阜侠客水野弥太郎騒動」の上演があったと記載されているが（p.1003）、19年末には同座は既に存在していない。一方『岐阜市史 通史編 近代』には、「同年（=19年）六月九日から市川小伝治・市川照太郎一座の二の替りの戯題は岐阜の侠客水野弥太郎の騒動。」とある（p.1057）。末広座焼失の時期から考えて後者が正しいと思われる。末広座が焼失した19年の『岐阜日日新聞』は、1月から4月までしか現存せず、焼失前後の記事を確認できないため、『市史』が何を根拠にしたの

か確認できないのは残念である。

また、東京の演劇雑誌『歌舞伎新報』（歌舞伎新報社のち玄鹿館）の1027号（明治22.7.13）の「関西通信」の一部に「片岡我童は本月四日岐阜の末広座へ乗込 猶同所を打上 名古屋へ赴く都合なり」とあるが、『岐阜日日新聞』22年7月9日の「国豊座の芝居」記事に「片岡我童、尾上多賀之丞一座の芝居は 愈々来る十三日大入りにて興行することに決し」とあることから、これは国豊座の誤りである。濃尾地震前の末広座再築は、やはりなかったものと考えられる。

末広座焼失後、国豊座は次々と興行を重ねており、濃尾地震まで伊奈波の芝居を一手に引き受けていた感がある。国豊座の地震後の再築・再興については次章に譲るとして、末広座のその後を追うと、同座名がようやく現れるのは、濃尾地震から1年以上後の26年3月、4月である。

○末広座の小屋開き 今度岐阜市末広町に建築したる極小型の劇場末広座は 来四月四五日の伊奈波神社例祭日を当込み開場せんとの意気込みにして 既に名古屋市へ俳優を抱えに行きたるよし 多分は沢村四郎五郎の一座が来るならんとの評判なり（岐阜日日新聞 明治26.3.28）

○末広座の小屋開き 岐阜市末広町に新築せし小劇場末広座は 愈々明後三日の神武天皇祭を以て開場と定まり 出勤の役者は名古屋の山崎河蔵 嵐橋三郎一座にて 出物はおぼさかちんき魁難波戦十二幕通しなるよし（岐阜日日新聞 明治26.4.1）

せっかく開場した末広座だが、この興行はうまく行かなかったらしい。「末広座の評判」（岐阜日日新聞 明治26.4.2）では出演役者の悪口とともに「小屋開き早々ケチを付けては 末広座を改めて末狭座とせにやアならないからね」と、小屋の小ささも揶揄されている。更に、「見事に損耗」（岐阜日日新聞 明治26.4.14）では「役者と見物人と孰らが多いと云ふ様な不人気で 見事に損耗し」と赤字が暴露されている⁵⁾。しかし、その後素人芝居（同4.26等記事）、西洋手品（同6.6記事）、軽業（同6.20記事）、幻燈会（同7.9記事）等、小ぶりな小屋ではあるが多種多様な興行で人々を楽しませたようである。

これらの記事では、この新末広座が19年に焼失した旧末広座の再築であるとは明確に述べていない。しかし、「末広町の末広座」という場所と名称の一致と、以下に述べる新聞記事内の人名を手掛かりに、両者を結びつけることは可能だと考えている。

拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋―末広座と国豊座―」で、明治初年に末広座を開場したのは、記録上のオーナーである安藤作次郎の父安藤半助という人物ではないかと記した。末広座焼失後も、末広町に安藤姓の者がいたことを記した記事がある。

○末広町に道場を開く 当市中竹屋町牧野某外二三名は 撃剣の稽古を為さんと談合し去る五日より末広町安藤九郎方の裏の土蔵を以て 撃剣の道場とし（略）（岐阜日日新聞 明治24.5.10）

末広座焼失後4年以上経ているが、同地に安藤姓の者がいた。それを踏まえると、次の記事の「小屋元の半助」は安藤半助ではないか。彼は小間物を扱うこともあったというが、それが「古道具」と表されているのではないだろうか。

○小屋元と鰻屋の八分 岐阜市末広町末広座にて 此頃中素人芝居を興行し居れるが 其の開場当日より 町内若者の承諾を経て 加和屋町の或る鮓屋が末広座の前へ屋台店を出せしに 其れが為め中店の売高に影響を及ぼしければ 小屋元の古道具半助は去る二日 右屋台店の退去を促したり 乃で末広町の若者連は忽ちメリ〜と掃溜の淵に生へた露ほどの青筋を額に現はし (略) (岐阜日日新聞 明治26.5.6)

この話の続きは、怒った若者たちが二度と末広座の木戸は潜らないと決し、その興行で主役を張っていた鰻屋の長男にも芝居に出るなど言ったが、困った小屋元が親の鰻屋をおだてて長男を舞台上に上がるように仕向けたところ、若者たちが更に激高して鰻屋を町内八分にしたため、同店では鰻が売れなくて困っている、という他愛もないものである。日常的で他愛もない記事であればあるほど、ここに登場する「小屋元の半助」の存在が現実であったことを感じさせる。

焼失前の旧末広座は、団菊左を呼ぶほどの大きな芝居小屋だったが⁶⁾、再築後の同座では大歌舞伎を呼んだ形跡はない。しかし、濃尾地震で壊滅した国豊座が28年12月に再築されるまでの間、伊奈波の芝居を担ったのは末広座であった。『岐阜日日新聞』新聞紙上に繰り返し現れる同座の素人芝居興行の記事に、末広座が観客席からも舞台上からも慕われていたことを読み取ることができる。

2. 国豊座 ～濃尾地震からの再興～

明治24年10月28日朝、後に濃尾地震と言われる大きな地震が岐阜地域を襲った。死者7,273名、全半壊家屋22万2,501という甚大な被害を引き起こし、伊奈波地域にあった国豊座も倒壊した⁷⁾。当時既に末広座はない。この地震がきっかけとなり、岐阜地域の娯楽の中心地は伊奈波地域から南下することとなる。

面白いことに、濃尾地震で被災した伊奈波以外の岐阜の地では、同地震後かえって芝居が好評になった記録があった。名古屋の役者が皆景気のいい岐阜に行ってしまう、名古屋が空になったという。

○俳優の話し 岐阜地方は震災の為め一時は世が減する様な有様なりしが 所謂世直し地が揺つて景気が定まり 此頃に至つてはドシドシ金儲けがある 依つて名古屋より幾層人氣がよいか知れず 芝居も諸方にあつて何れの興行も当たらぬなし 然から名古屋の俳優は 大体岐阜県へ出稼ぎに行き 幾人といふ程しか残つて居ないといふ景気に 松本錦升の一座は中村知鶴を一枚加へて同県恵那郡岩村へ昨日出発したり 是れにて名古屋に居残りの俳優は皆無といふべし (金城新報 明治25.4.23)

また、地震があつたにもかかわらず素人芝居に熱を上げる若者に苦言を呈する『岐阜日日新聞』記事も少なからず見受けられ、岐阜の芝居熱は地震でも冷めることはなかったようである。岐阜における素人芝居(地芝居・地歌舞伎とも)の隆盛は本稿の主旨と離れるが、いずれ考えてみたい課題である。

伊奈波に話を戻すと、濃尾地震の24年10月から末広座が復活する26年4月までの間、芝居小屋

は存在しないのだが、開帳などに合わせて徐々に賑わいを取り戻し、芝居等も興行されるようになったらしい。以下6番目の記事「芝居小屋の立廻り」二重下線部にあるよう、空地に仮小屋を建てていたのだろう。最後の記事「竹澤亀吉一座の軽業」は、末広座の開場後であるが、引き続き空地が興行地として活用されていたことを示している。

○伊奈波の賑ひ 当市伊奈波は震災以来至つて淋しかりしが 目下薬師如来の開帳に納涼かたがた 旁々出掛くる者多く 見物の興行なども有り 中々賑ふ由 (岐阜日日新聞 明治25.8.12)

○女足芸 当市伊奈波に於て 今三日夜より女足芸を興行するよし (岐阜日日新聞 明治25.9.3)

○伊奈波善光寺の開帳 当市伊奈波善光寺如来の開帳は いつぞや 日外の本紙に掲載したる如く明七日(旧七月十七日)より 向一週間執行する趣きなるが 明日は彼のお十七夜と称へて早朝より尾張地方を始め遠近の男女陸續参詣するなるべく 天気都合さへ好くば 市中も頗る賑合ふ事ならん (岐阜日日新聞 明治25.9.6)

○伊奈波の芝居 当市伊奈波に於て明二十八日より 此の程の本紙にも掲載したる彼の市川鱗花改め重五郎を座頭とし 中村松鶴、市川高之丞等の一座 芝居の大入をなすよし 外題は再仇討三世主取ほりべやすべいちだいき(十二幕通し)なりと云へば 例の轟真連は初日からドシへ見物に出掛くる事なるべし (岐阜日日新聞 明治25.9.27)

○伊奈波の芝居は昨日大入 去る二十八日より当市伊奈波に於て興行をなすべき筈の市川鱗花改め重五郎一座は 雨天の為め延引して昨三十日より大入興行せりといふ (岐阜日日新聞 明治25.10.1)

○芝居小屋の立廻り 当市益屋町柴田松次郎が一昨夜八時頃 目下伊奈波に於て興行中なる市川重五郎一座の芝居仮小屋としごらの前に居ると 年配二十七八の男が松次郎の懐中へ手を入れたので 松公は 曲者何しやアがると 其の手を引捕へて立ち回りし末(略) (岐阜日日新聞 明治25.10.4)

○伊奈波芝居の二の替り 去月三十日より当市伊奈波に於て興行大人気を占めたる市川重五郎一座の芝居は 今七日より二の替りとして 先年国豊座にて好評を博したる義兄弟三家英勇ごさんけさんゆうしといふ面白い芸題を 大序より敵討迄十二幕演すよし (岐阜日日新聞 明治25.10.7)

○伊奈波の芝居 当市伊奈波に於て今二十三日より 中村芝右衛門、嵐豊司一座の芝居を興行す 芸題は有馬筆錦之縁取を ありまふでにしきのふちどり 大序より大切までの由 (岐阜日日新聞 明治25.10.23)

○伊奈波芝居の芸題替ふ 当市伊奈波にて興行中の中村芝右衛門一座芝居は 今日より二の替りとして 四ツ谷階段お岩実記十八冊続きを車輪で演ずるよし (岐阜日日新聞 明治25.11.1)

○興行二件 昨夜より当市今小町関本座に於て 善光寺由来記の造り物興行を 又来る廿五日より当市伊奈波に於て 目下尾州中嶋郡に興行中なる東京大坂合併相撲の興行を為す由 (岐阜日日新聞 明治25.11.22)

○竹澤亀吉一座の軽業 当市伊奈波の空地に於て昨十三日より竹澤亀吉一座の軽業興行を始めたるよし (岐阜日日新聞 明治27.3.14)

伊奈波地域の濃尾地震からの復興は、国豊座の再築の気運も高めた。最も早くこの件に言及したのは、25年8月末の記事である。

○国豊座再築の計画 岐阜の伊奈波と謡はれし繁華の地も 昨冬の震災火災以来 景気を下向に取られて 凄い程淋しくなり 伊奈波が淋しくなれば淋しくなる丈下向が盛んになり 廓の事は別問題としても 八間道辺に劇場を建築するなど、云ふう人気 捨置く可きに非ずと 旧伊奈波国豊座の座主等は昨今頭を擡げ出し 愈々劇場再築の評議を決定して 既に四五日前 図面の調整を了りたる由にて 近日其の筋の允許を受け 直ちに工事に着手するといふ（岐阜日日新聞 明治25.8.24）

○伊奈波善光寺堂の再建 当市伊奈波善光寺堂は 昨冬震災火災の当時焼失し 僅かに仮堂を建立せしま、今日に至りたるが 今回いよ―市中の有志者が発起尽力して本堂の再建を計る由にて 目下其の絵図面を調整し居るといふ、国豊座再築の計画と云ひ 又此の善光寺堂再建の発起と云ひ 追ひ―上向に景気を付くると覚へたり（岐阜日日新聞 明治25.8.26）

更に10月になると、場所や時期や招く役者等、より話が具体的になってくる。

○劇場国豊座の再築 当市伊奈波劇場元国豊座の小家元は 今回隣地安乗院地内に 広大にして立派なる東京風の劇場を再築する事に頃日評議一決し 愈々来る十二月頃より普請に着手して 来春早々花々しく小屋開きの式を挙げ 大立物を聘して興行せん都合のよしに聞けり（岐阜日日新聞 明治25.10.21）

これらの記事を読むと、国豊座はすぐにでも再築されそうであるが、実は歩みは順調ではなく、この後全く話題に上ってこなくなる。再び確認できるのは翌年6月で、その後は10月と翌年1月と、散発的に紙面に現れる。

○国豊座の再築 岐阜市伊奈波の元劇場国豊座（震火災の為め灰燼となりし）再築も 最早や久しい話しなるが 今度旧小屋元一同 いよ―相談を纏め 近日標杭を建てるといふ 扱て其の場所は元西行庵の跡だとの事（岐阜日日新聞 明治26.6.2）

○国豊座の再築 震火災の為め烏有に帰したる当市伊奈波の劇場国豊座は 今度愈々旧小屋主一同に於て再築の相談纏り 既に四五日前再建築用地の標杭を建てたり 猶ほ場所は従前の地なるが 小屋は余程立派なるよし（岐阜日日新聞 明治26.10.31）

○国豊座の再築 震火災の為め烏有に帰せし当市伊奈波国豊座は 愈々近日立派なる改築に取掛るよし（岐阜日日新聞 明治27.1.1）

標杭を立てた、愈々であるという再築の掛け声は定期的に聞かれるが、なかなか実際の行動につながらない。26年4月には末広座が開場しており、芝居を求める世間の声は小さくなくはなずであるが、再築に何らかの故障があったことが次の記事からうかがわれる。

○国豊座の再築 当市伊奈波の劇場国豊座は 旧位置に再築せん筈なるも 取引所位置未定の為め 其れ等の影響にて 猶ほ工事着手を見合せ居る趣きなり（岐阜日日新聞 明治27.2.6）

ようやく本当に話が具体化するのは、濃尾地震から約4年、前掲記事から1年以上を経た翌28年9月であった。ここからは今までの逡巡が嘘のように順調に計画が進み、いよいよ柿落しの興行に漕ぎ着ける。

○劇場新築工事の入札 岐阜市伊奈波の劇場国豊座は 旧株主に於て愈々新築する事に確定し 今二十日を以て右新築受負工事の請負入札を為すよし（岐阜日日新聞 明治28.9.20）

○国豊座の手斧始め 当市伊奈波劇場国豊座再築のことは 屢々本紙に記せしが 右は愈々今日手斧始めを行ひ 来る十二月中旬には落成を告げ 来年一月に開場式を行ふ目算なるが 其工事費金は三千円の予定なりといふ（岐阜日日新聞 明治28.10.10）

○国豊座の工事 当市伊奈波国豊座は 国豊演劇合資会社といふを創立して 既に再築工事に着手したる由は先日の本紙に記せしが 工事も着々歩を進め 来る廿八日頃を以て立前を行ふ筈なりと（岐阜日日新聞 明治28.10.22）

○伊奈波の近況 岐阜市の繁華の中心として 震災以前まで殊の外賑はしかりし伊奈波は 震災後打つて変つて淋しき場所となりけるが 爾来追ひへに景気を恢復し 昨今にては芸妓屋も二軒ほど御神燈をブラ下げ 又料理屋も余り上等といふには有らねど数軒あり 汁粉屋 鶏肉屋とりやなども甲処乙処こかしこに行燈を出し 入口の角には寄席と勸工場も出来たる上 劇場国豊座もいよへ新築に取掛りたれば 何となく以前の倂げを見るの思ひありて 急に旧態に復する事は六かしきも 次第に繁昌を來たすならんか（略）（岐阜日日新聞 明治28.11.1）

○国豊座の落成近し 当市伊奈波の劇場国豊座は 去る明治廿四年の震災に焼失したるまゝ、久しく再築の運びに至らず 人をして岐阜市に一の好劇場なきを遺憾に思はしめし事久しかりしが 愈々岐阜演劇株式会社なるもの起り 其手を以て之を新築するの運びとなり 過日貴校以来専ら工事を取急ぎたれば 最早や瓦伏せを終り 今月一杯には是非とも全部成功せしめ 大道具小道具の類 是れ又手を分つて大至急に調整し 来月早々花々しく小屋開きの興行を為すべしとの事にて 今より市中却々の人気なれば 開場の暁きには定めて非常の大入を占むる事にならん 因に同座小屋開きの初興行には 当地出の大阪俳優卯三郎を初め 鴈次郎、琥珀郎、珊瑚郎など花方揃ひの一座を招き 出しものは吉礼を選び 一挙して大当りを占まんもので 昨今座元相談中のよし（岐阜日日新聞 明治28.11.14）

○国豊座の落成 当市伊奈波劇場国豊座は 過日来新築中の処ろ 愈々落成したるを以て 本日其筋の検査を済まし 来る十三、十四両日の中には小家開きを為す筈にて 出勤俳優は夫の当市出生の大坂役者尾上卯三郎及び中村富十郎の二人丈は既に確定し 其他東京役者をも招かんとて 目下掛合中なりと（岐阜日日新聞 明治28.12.4）

拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋一末広座と国豊座一」で、岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』の第1回実施分（明治28年）の「商業 会社」の項目に、「国豊演劇合資会社 演劇場ヲ建設シ 之ヲ貸貸若ハ演劇ヲ興行ス」があると指摘したが、上記3番目

の記事「国豊座の工事」によれば、これはまさに28年に国豊座が再興するその時に組織された新会社だったわけである⁸⁾。

国豊座の小屋開きに呼ばれたのは、岐阜市出身の2代目尾上卯三郎（1860/61～1928）であった。初代卯三郎門人で、主に上方で昭和初年まで活躍した役者である。ご当地役者として柿落しに相応しい人物である⁹⁾。このとき共演する中村富十郎は3代目（1866?～1901）である。小屋開きは同年12月14日と決まった。

○国豊座の小屋開き 屢々記したる当市伊奈波劇場国豊座の新築工事も愈々成工の運びに居たりたと以て 来る十四日を以て小屋開きを為すことに確定したり、出勤俳優は大坂にて花方の当市出身俳優尾上卯三郎及び、中村富十郎（目下東京歌舞伎座出勤中）、中村駒之助（東京春木座出勤中）に 尚ほ中村駒雀を差加へ 毎日午前八時より開場 昼夜通しにて勉強するとの事（略）（岐阜日日新聞 明治28.12.11）

卯三郎、富十郎に加えて春木座の座頭も勤めた4代目中村駒之助（1848/49～1900）も呼ばれている¹⁰⁾。まずまずのビッグネーム揃いだと言っていだろう。文中の中村駒雀は、7代目浅尾奥山（1863～1925）であろうか¹¹⁾。愈々開場した状況はどうだっただろうか。

○国豊座小家開きの景況 当市伊奈波に再築せる劇場国豊座の小家開き興行は 予て触込みの通り昨十四早朝より蓋を明けたり 其の景況をザツト記さんに 見物の中には初雪の寒さにもメゲず 五六里の道を懸けて態々出て来たといふ剛勢な連中もあり 互ひに玄武門の先登を気取つて 我れ一に上等の場所へ御輿を据ゑんものと 前夜十時ごろよりと犇々と小屋前へ押寄せ 手拭に味噌玉を包んで立つもあれば ケツトに身をくるんでシヤガムもあり オ、寒いぞ〜と 遼東半嶋雪中の露營宜しくといふ辛さを忍んで札の売出しを待つといふ人気 扱も劇道信仰の善男善女茲許殊勝と申すべし 聴て午後七時には見物を入れ 八時頃にはシヤギリ太鼓の音勇ましく 愈々爰に新舞台の幕を明けしが 雪の中にも拘はらず 木戸は忽ちメ切となり 東京本郷春木座々附の座頭中村駒之助、大坂道頓堀弁天座の座頭尾上卯三郎（当市出身）及び東京木挽町歌舞伎座出勤中中村富十郎の三優を初め 役々何れも好評なりしが（略）当市近來の大芝居好劇家は何れも大喜びの模様 殊に卯三郎は故郷の事とて人気高しとぞ（岐阜日日新聞 明治28.12.15）

卯三郎自身も、伊奈波神社社殿への寄付をするなど、地元を飾る思いであったことが類推される¹²⁾。しかし、千秋楽に近づくにつれて本興行は盛り下がってしまったようで、必ずしも大盛況とはならなかった。まだ馴染みのない「会社」という形態での運営に苦勞している様子もうかがえる。

○国豊座の芝居 昨今興行中なる当市伊奈波新劇場国豊座の芝居は 蓋を明けぬ前の評判程にも無く 開場後無類飛切と云ふ人気立たざるは如何のものにや 俳優は兎に角立者二三枚の揃ひ 特に尾上卯三郎は故郷の事とて車輪玉の働らき 加之に場代は低廉し 小家から道具は新らしく 如何して見ても岐阜市を騒がせる程の評判と人気が出なければならぬ勘定

なれど 市中の風呂屋評は先づ^まと云ふ有様は不思議 夫れも其の筈 之れと賞め立てる廉が無いとか云ふ者もあり 去る代り会社組織の劇場で株主一同が勸進元なれば 毎日内輪揉めのする事甚しとか云へり 能く揉み上げて将来の評元を取る積りにや (岐阜日日新聞 明治28.12.18)

○国豊座芝居の千秋楽 当市伊奈波国豊座の小家開き興行は 蓋開け以来かなりの入りを占めしも 一昨日に至りて人気はガツタリ落ちて 見物は小家の殆んど半分位ひしか無かりしかば 「廿一日限り日延なし」との貼札を市中一般は勿論 近在まで出しありしにも拘はらず 俄かに一昨十九日にて千秋楽となし 小家開き早々^{なりゆき}ウンをつき 面白からぬ評判を招きたるは亦是非もなき成行といふべし (岐阜日日新聞 明治28.12.21)

初興行は残念な幕切れとなったが、その後の国豊座の記録を繰ると、精力的に興行を打ち人氣が高いものも少なくない。開場翌年の29年6月には初代左団次一座を呼ぶことに成功し、非常の大入りを誇った(拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」参照)。同年11月には川上音二郎一座が舞台上に上っている(『岐阜日日新聞』明治29.11.8他)。小ぶりの興行が多く見受けられる末広座に対して、国豊座は伊奈波の大劇場として復活したと言っているであろう。明治初年とは景色が違うが、このようにして明治20年代末期に両座が再び伊奈波の地に並び立ったわけである。

3. 周辺と拾遺

筆者は伊奈波の芝居ひいては岐阜の芝居の姿を浮かび上がらせるべく、『岐阜日日新聞』を初めとした資料から、出来る限りの事実を拾ってきた。その成果(中間報告ではあるが)は『岐阜地域芝居興行記録一覽稿(明治初年～)』(JSPS 科研費25370213助成調査成果)としてまとめた。この調査の過程で、今後追求したい興味深い点が複数見つかった。それらについて簡単に触れておきたい。

『岐阜地域芝居興行記録一覽稿(明治初年～)』を見ると、末広座と国豊座が姿を消している間に新築され、盛んに興行を打ち続けた小屋があることが如実に分かる¹³⁾。その中から、関本座(関本席とも)と美殿座を『岐阜日日新聞』記事から追ってみる(括弧内の年月日は『岐阜日日新聞』の記事掲載日)。

関本座は、今小町の尾関万次郎が新築した(明治22.4.4)。落成後初の興行は、5月5日からの講談浮れ節の吉川虎丸の興行であった。(同5.2)。その後、上竹町常磐津師匠岸澤加久壽の門弟の温習(同5.13)、東京講師一徳齋親玉一座(同5.16)、岡田屋小団次の浮れ節(同5.25)、風流浪華節白里軒岡山一座(同6.6)、東京府女太夫竹本小土佐と当地豊澤廣猿一座浄瑠璃興行(同6.18)、笹川東玉の軍談浮れ節(同6.25)というように、ほぼ切れ目なく種々の興行が続く。舞台上に上った者たちについては未詳であるが、様々な芸人が岐阜の地を彩ったことは確実であろう。

現在の柳ヶ瀬地域的美殿町に作られた泉座は、伊奈波の芝居が絶えていた頃、主たる劇場の地位を占めた。上加納の棚橋常八等が美殿町泉座建築許可を得(明治25.7.31)、開場が噂され(同8.31、9.22、9.25、10.11、10.12)、いよいよ小屋開きは名古屋末広座興行後の片岡我当一座であった(同10.15、16、19)。その後、片岡我当一座の二の替り(同10.21)、市川重五郎二の替り(同11.10)、

名古屋の服部武三郎が興行主で歌女太郎・橘蔵等の興行（同12.11）、京都の嵐寿三郎同三勝一座の安芝居（同12.29）、泉座安芝居二の替り（明治26.1.8）、同三の替り（同1.11）と、ほぼ毎月興行が打たれる。30年に改築され名称も美殿座に改め、興行を続けた模様である。

その他に、蛭子座（笹土居町）、泡雪座・寿座（金津廓）の名前も多く現れる。岐阜市を離れると大垣の高砂座・宝福座、多治見の榎元（榎本）座の記事も目立つ。榎元（榎本）座は、26年1月に中村芝翫一座（4代目、1830～99）を呼び大成功を取めたが、その舞台で芝翫が足を痛めて要療養という話題も劇界に提供している。

このように、筆者が追跡に力を注いだ末広座と国豊座の他にも、岐阜には多くの芝居小屋が出現し、大小様々な娯楽を人々に提供していたのである。

本稿は、芝居小屋というハードの側面に焦点を当てていたため、役者や演目などのソフト面についてはほぼ手付かずである。今後の課題である。例えばどのような事項を拾えたか、今後の研究の頭出しとして紹介しておこう。

明治26年4月に再出発した末広座において、未曾有のロングラン興行をした女役者がいる。上方の女役者で市川鯉京という人物であるが、27年4月から11月まで、実に三十九の替りまで末広座で興行を続けている。安いから人気なのだという記事もあるが、三十九の替りまで打ち続けられるレパトリーの広さには感服する。翌年にも末広座で興行をしており、岐阜との薄からぬ縁を予感させる。

演目について言えば、筆者は以前、明治15年の板垣退助の岐阜遭難事件の芝居化について論じたが（「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に～」『岐阜大学国語国文学』38、2012.3）、その時同芝居の上演が確実に確認できた下限は、26年1月の壮士芝居「板垣総理岐阜春雨」（名古屋・音羽座、武知元良一座）であった。しかし、今回の調査で、29年6月に泉座で川上薫一座が「板垣退助君岐阜遭難実記」を上演していることが判明した¹⁴⁾。先の調査で見出せなかった事実を発見したことは、本稿の主旨とは離れるが、筆者にとってはひとつの成果であった。当たり前のことであるが、地道な調査を継続することの意義を改めて感じた。

おわりに

明治初年の岐阜の伊奈波の芝居の象徴であり中心であった末広座と国豊座が、前者は明治19年11月に焼失、後者は24年10月に倒壊してからどのように再築・再興されたのかを示すことが本稿の目的であった。『岐阜日日新聞』に丹念に目を通す中で、末広座は26年4月、国豊座は28年12月に再築されていることを明らかにした。ある程度目的は達したと言っているが、新旧末広座をまっすぐ結びつけられる根拠が十分ではないし、国豊演劇合資会社のメンバー等の詳細も不明である。これらを脳裏に留めつつ、今後は「3. 周辺と拾遺」で示したような、両座の周辺や役者等のソフト面の謎に迫っていきたい。また、前稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」でも言及した、岐阜で盛んな地芝居・地歌舞伎のことも、大いに気にかかっている。大局を忘れることなく、同時に細部への目配りを怠らない調査を今後も継続していきたい。

なお、本研究は、JSPS 科研費25370213の助成を受けたものである（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）。

注

- 1) 末広座の焼失については、名古屋の新聞『扶桑新報』の明治19年11月30日紙面の「去廿八日岐阜通信」に、「末広座焼失 昨廿七日午後六時頃 当地末広町の同座にては 失火の為焼失及び類焼家屋二棟許りありたり」とある。
- 2) 本調査で集めたデータを一覧にしたものは、冊子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』にまとめた。本稿と同様 JSPS 科研費25370213（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）の助成による。
- 3) 筆者が利用した岐阜県図書館蔵のマイクロフィルム資料における現存の『岐阜日日新聞』は、明治19年については4月まで（5～12月欠）、20年については1月25日以降であるため、同資料から確認することはできなかった。
- 4) 『岐阜日日新聞』明治20年6月28日に「○国豊座の改築 当地伊奈波国豊座は当夏中に改築する由にて 已に其鉄柱等も大坂表へ注文の由なるが 愈々右鉄柱等が到着すれば追々改築に取掛る由」の記事があり、関連する可能性も考えられるが、この改築についても続報はない。
- 5) 両新聞記事の全文は以下の通り。
 ○末広座の評判 今回岐阜市末広町に新築したる末広座は 愈 明日を以て小屋開きを為す由は既に掲載したるが 其の芸題の魁難波戦記は 是迄名古屋地方にて面白くないと云ふ不印を土産として持ち来りし様に聞きたり 何にしても河蔵の如き 以前門付け役者の矮が座頭の位置にすわり 橋三郎とか聞く俳優が書き出しにては 余り感心仕らず お負けに松本男升と云ふ暫く東京の地を踏んだ計りを滅法鼻にかけける狎児役者が 恰似強気に中軸に構へ居ては 呆れて見物する気がさゝないと 区々の噂あれと 左様に云ふのも余り気の毒なれば 一度見て遣つておくなんし 何だつて 小屋開き早々ケチを付けては 末広座を改めて末狭座とせにやアならないからね（明治26.4.2）
 ○見事に損耗 岐阜市末広町に玩弄物の蔵程な小屋を建て、末広座と名づけ 先頃小屋開きだと云つて 名古屋東小屋の山崎何んとやらいふ役者の一座を招き興行した処 役者と見物人と孰らが多いと云ふ様な不人気で 見事に損耗し 末広が末狭に成りさう故 次ぎ興行は何が好からうと 座元は頭痛捻ぢ鉢巻きの由（明治26.4.14）
- 6) 末広座では、明治15年2月に菊五郎と左団次、16年2月に団十郎が興行している（拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」参照）。
- 7) 国豊座が倒壊したことを明記した記録は地震当時には見られないが、後掲の記事で「震火災の為め灰燼となりし」（岐阜日日新聞 明治26.6.2）とあり、倒壊は疑いない。
- 8) 5番目の記事「国豊座の落成近し」中の「岐阜演劇株式会社」が疑問であるが、他に例が認められないため、同一の会社を指すものと現時点では考えている。
- 9) 尾上卯三郎については、『岐阜市史 通史編 近代』「三 岐阜市出身の俳優」の「二代目尾上卯三郎」（p.1087）に詳しい。
- 10) 中村駒之助について、『歌舞伎俳優名跡便覧（第四次修訂版）』（国立劇場調査記録課）では4代目で春木座座頭を務めたのは明治21年以降28年7月までとし、『歌舞伎人名事典』（日外アソシエーツ）では6代目で29年頃に同座座頭を務めたとしている。
- 11) 7代目浅尾奥山は、16年駒雀、26年藤蔵の改名を経ているが、28年に駒雀を名乗る役者は見

当たらない。

- 12) 当該新聞記事は「○俳優の寄附金 今回伊奈波国豊座開場に出勤する筈の当市出身俳優尾上卯三郎丈は 伊奈波神社々殿新築費の内へ 金拾五円を寄附したりといふ」(岐阜日日新聞 明治28.12.13)。
- 13) 岐阜の芝居小屋については、『岐阜市史 通史編 近代』の pp.1054～1086に詳しい。ただし、同書の記載と筆者の調査結果が一致しない部分がある。
- 14) 当該新聞記事は「○川上薫一座の壮士演劇 夫の川上薫一座は昨十七日より 当市美殿町泉座にて演劇を開場せり 芸題は板垣退助岐阜遭難実記八幕、義賊固め小僧四幕にて 役割は左の如し(略)」(岐阜日日新聞 明治29.6.18)。

参考文献

『岐阜県史 通史編 近代下』 岐阜県 1972

『岐阜市史 通史編 近代』 岐阜市 1981

『近代歌舞伎年表 名古屋篇』 1～8 八木書店 2007～14

倉田喜弘編『明治の演芸』 1～6 国立劇場調査養成部芸能調査室 1980～85

国立劇場調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧(第四次修訂版)』 日本芸術文化振興会 2012

清信重『岐高百年史』 岐高同窓会 1973

土谷桃子「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に～」『岐阜大学国語国文学』38、2012.3

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7

土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿(明治初年～)』JSPS 科研費25370213助成調査成果、2016.3

富澤慶秀・藤田洋監修『最新歌舞伎大辞典』 柏書房 2012

野島寿三郎編『新訂増補 歌舞伎人名事典』 日外アソシエーツ 2002

『明治十五年七月十二日～二十二年十二月二十九日「岐阜日日新聞」見出し一覧(発行順)』 岐阜市歴史博物館 1988

『岐阜日日新聞』、『金城新報』

初級日本語学習者を対象としたパソコン授業

— 「パソコン演習 A」 授業報告 —

A Class Report of “PC Practice A” for Novice Japanese Learners

野原 美和子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級学習者を対象とした「パソコン演習 A」について報告するものである。筆者は約14年間の長期にわたり担当した。2016年度前期から「パソコン演習 A」としての独立した授業がなくなるのを機に、この授業でどのような活動を行ってきたのか、本稿で総括を行う。また、今後、総合授業でパソコンを利用した学習を取り入れる際の学習方法を考える。

1. はじめに

本稿が対象とする「パソコン演習 A」は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級学習者を対象とした「集中 A クラス（以下、「集中 A」）」の一授業である。筆者は2004年度を除き、2000年度後期から2015年度後期まで、約14年間にわたり担当した。学生数は学期によって異なるが、3～12名である。学生の出身も多岐にわたり、これまで、約40の国、地域からの学生に出会った。コース開始時の日本語能力は、殆どの学生がゼロ初級レベルで、『みんなの日本語初級 I』¹の第1課から学習を始め、14～15週間、週9～11コマ（1コマ90分）の「総合 A」の授業で、『みんなの日本語初級 II』²の第50課まで終える。それ以外に、「口頭表現 A（会話）」や「文章表現 A（作文）」などの技能コマがあり、パソコン演習 A もその技能コマの一つである。週1回、全14～15コマで授業を行った。

2016年度前期に、パソコン演習 A としての独立した授業がなくなることとなった。これを機に、本稿では、パソコン演習 A でどのような活動をしてきたのか報告し、14年間の総括を行う。

2. 授業の目的

パソコン演習 A の目的は三つある。一つ目は、学生のコンピュータ・リテラシーを高め、コース修了後の専門の授業で必要となるスキルを身に付けることである。学生の多くは岐阜大学の大学院修士課程、博士課程で学ぶ学生、または、研究生である。専門の授業では、レポートや論文などを提出する際、多くはパソコンの文書作成ソフトウェアを使って作成しなければならない。また、研究発表でプレゼンテーション用ソフトウェアの使用を求められることもある。そのような状況に対応できるよう、パソコンの基本的な操作を学ぶことが目的の一つである。

但し、コースを担当し始めた当初と近年では、学生が元々持っているコンピュータ・リテラシーがかなり変化しており、それに伴い、この目的も徐々に変わってきた。当初は母語での入力さえ

ままならない学生もあり、文書の開き方、保存の仕方など、かなり基礎の説明が必要であったり、プレゼンテーション用ソフトウェアを使ったことがない学生も多く、それは何か、どのように使うのかを説明し、実践してみせなければならないこともあった。当初は文字通り、「コンピュータ・リテラシーを高める」必要があったのである。

しかし、最近はそのような基礎的なことを説明する必要は殆どなく、大抵の学生がパソコンの基本操作に精通している。元々、ある程度、コンピュータ・リテラシーがあるのである。とは言え、日本語能力が初級の学生にとっては、日本語表記の環境でパソコンを操作することはやはり簡単なことではない。画面上には初級学習では学ばないような漢字や片仮名の語彙が多く使用されており、それを理解し、操作しなければならない。母語で表記されている環境での操作なら特に問題のない学生でも、日本語でとなると、一つ一つの操作に時間がかかってしまう。当初の授業では、基本操作をマスターすることを優先し、日本語以外の言語で説明したり、質問を受けたりすることも多くあったが、近年の授業では、コンピュータ・リテラシーを“日本語で”高め、日本語表記の環境でもスムーズな操作ができるようになるということに重きを置くようになってきた。

二つ目の目的は、一つ目の目的とも関連があるが、コースの最後に行われるプレゼンテーションの準備をすることである。集中 A はコースの修了条件として、最終プレゼンテーションに参加することを義務付けている。文章表現 A と総合 A の数回と連携し、コース後半、約一ヶ月かけて準備をし、専門の授業でも役立つ発表スキルを習得する。

三つ目の目的は、コース修了後も、学生が自律して学習が続けられるようなストラテジーを紹介し、自律学習を支援することである。詳細は後述するが、例えば、インターネット上の日本語学習サイトを紹介し、実際に練習したり、日本語学習者用のオンライン辞書を紹介し、言葉の意味や読み方、漢字を調べるなど、復習やコース修了後の学習にも役立つ情報を提供し、実際に体験してもらっている。これらの知識、体験が自律学習につながり、日本語能力を向上させる一助になることを目指している。

3. 授業実践

では、実際にどのような授業を行ってきたのか、授業内容の概要を述べる。学生は学期ごとに変わるので、授業の内容も自ずと変わってくる。ここでは、先ず、2015年度後期の授業を例に、授業内容の概要を述べる。次に、これまでに行った活動で、2015年度後期には行うことができなかったものについて紹介する。

3.1 2015年度後期の授業実践

3.1.1 授業内容

2015年度後期は全14回授業を行った。場所は岐阜大学総合情報メディアセンターの一室である。使用した OS は Windows 7、また、授業で使った文書作成ソフトウェアは Microsoft Word 2010（以下、「ワード」）、プレゼンテーション用ソフトウェアは Microsoft PowerPoint 2010（以下、「パワーポイント」）である。

学生は6名³、出身は中国3名、インドネシア、バングラデシュ、内モンゴルが各1名である。

内モンゴルの学生は男性で、他5名は女性である。

以下、実際に行った授業内容を示す。

表1. 2015年度後期の授業内容

回	授業内容	宿題
1	1. パソコンの各部分の名称と授業でよく使う言葉の確認 2. パソコンの起動から終了までの一連の操作の確認 3. 平仮名の入力	平仮名の入力*
2	1. 平仮名入力の復習 2. 片仮名の入力	片仮名の入力*
3	1. 片仮名入力の復習 2. 漢字の入力 3. 記号の入力 4. 単文の入力 5. 作文「自己紹介」**を自己訂正しながら入力（第2稿作成）	「自己紹介」第2稿の作成*
4	1. タイピング練習（『みんなの日本語初級I』L15, 16の新出語彙） 2. 「自己紹介」第2稿の入力データを使用したページ設定の練習 3. 「自己紹介」第2稿の入力データを自己訂正（第3稿作成） 4. 各自、第3稿を基に「自己紹介」の発表練習 ※翌日の文章表現Aで発表	「自己紹介」第3稿で発表練習
5	1. タイピング練習（『みんなの日本語初級I』L20, 21の新出語彙） 2. 作文「休みの日」第2稿入力データ***のページ設定 3. ルビ機能の紹介 4. 「休みの日」第2稿入力データの漢字にルビを付ける 5. 「休みの日」第2稿入力データを自己訂正（第3稿作成） 6. パワーポイントのスライドの作り方を説明 7. 「休みの日」のパワーポイントを作成	「休みの日」第3稿の作成とパワーポイントの作成
6	1. タイピング練習（『みんなの日本語初級II』L26, 27の新出語彙） 2. 一人の学生の作文「私の町」第1稿****について、全員でピア・レスポンス 3. ピア・レスポンスを踏まえ、各自、第1稿入力データ*****を自己訂正（第2稿作成） ※翌日の文章表現Aで引き続き作成	
7	1. 作文「私の町」第2稿入力データを自己訂正（第3稿作成） 2. 「私の町」のパワーポイントを作成	「私の町」第3稿とパワーポイントの作成*
8	1. 「私の町」のパワーポイントを完成させる 2. 「私の町」の発表練習 3. 「私の町」発表（2名発表）※他4名は翌日の文章表現Aで発表	「私の町」パワーポイントの完成*、発表練習*
9	1. 作文「今年の三大ニュース」第1稿入力データ*****を自己訂正（第2稿作成） 2. 「今年の三大ニュース」のパワーポイントの作成 ※翌日の文章表現Aで発表	「今年の三大ニュース」第2稿とパワーポイントの作成*

10	最終プレゼンテーションの準備： スピーチ「今までで一番〇〇こと」の第1稿を作成しながら入力	第1稿の作成*
11	最終プレゼンテーションの準備：全員でピア・レスポンス（2名分） ※他4名は当日の総合Aと翌日の文章表現Aで行った	
12	最終プレゼンテーションの準備：スピーチ原稿を完成させる	スピーチ原稿を完成させる*
13	最終プレゼンテーションの準備： 1. スピーチ原稿を完成させる 2. パワーポイントを作成する	パワーポイントを作成する
14	最終プレゼンテーション	

* 授業中の課題を終了できなかった学生のみ。

** 文章表現Aで作成した作文。教師がチェックし、訂正箇所を明示している。

*** 文章表現Aで作文を作成。教師がチェックし、訂正箇所を明示している。それを宿題で自己訂正しながら入力し、データを授業までにメールに添付して送付してきている。

**** 文章表現Aで導入。第1稿を入力し、データを授業までにメールに添付して教師に送付してきている。教師はチェックしていない。

***** 文章表現Aで導入。第1稿を入力し、データを授業までにメールに添付して教師に送付してきている。添付書類を教師がチェックし、訂正箇所を明示している。

全14回の授業は大きく三つの段階に分けることができる。以下で、各段階の内容を述べる。

3.1.2 第1段階：基本操作と日本語入力の練習

第1段階は基本操作の確認と日本語入力の練習である。2015年度後期では、第1回から第3回の授業に当たる（学期によっては、2回で終わることもある）。教材は『留学生のためのプロジェクトワーク:簡易・MS Word 2010版』⁴を使用した。第1回でパソコンの各部分の名称（「画面」「スイッチ」「キーボード」など）やキーボードのキーの名称（「スペースキー」「エンターキー」「半角/全角キー」など）、また、操作を指示する際に教師がよく使用する表現（「開きます/開いてください」「インプットします」「セーブします」など）を確認する。その後、パソコンの起動、ワードでの文書の作成、保存の仕方を説明し、パソコンを終了させるまでの一連の操作を確認する。

そして、日本語入力で重要な「半角/全角キー」の機能、画面上の「言語バー」の表示内容を説明後、平仮名の入力練習を行う。入力はローマ字入力で行う。母語での入力ではできても、日本語を入力するのは初めての学生が多い。また、文字をローマ字で考えることにも慣れていないため、ローマ字表記の確認の意味も含め、単音の入力から始める。日本語の表記で使われる音はここで全て入力をする。この段階では片仮名入力の説明はしていないので、「てい」「ふい」「でゅ」など、片仮名の語彙でしか使われないようなものも平仮名で入力する。そのため、ここである程度の時間が必要になる。単音の入力後、既習語彙で平仮名の入力練習をする。

第2回の授業では片仮名、第3回では漢字の入力練習をする。スペースキー、シフトキーと矢印キーの使い方を説明し、既習語彙の入力練習をする。片仮名の入力では、入力方法自体は平仮名と変わらないので特に問題はないのだが、コースが始まって、まだ間もない頃なので、練習問題の片仮名を読めない学生もあり、人によって、かなり入力のスピードが違ってくる。速い学生

には、追加の課題を与えている。また、漢字の入力では、間違っただけの入力し、正しい漢字に変換できないことが多々ある。教科書や辞書で読み方を調べる学生もおり、言葉をしっかり覚えようという意識にもつながっているようである。

学生がなかなか入力できなかつたり、入力方法を忘れやすい文字は、「を」「づ」、拗音、片仮名の特殊音、促音である。教材の中でこれらを特に取り出した問題もあり、練習をしているが、コース後半になっても、どのように入力するのか聞いてくる学生も時々いる。その都度、教材で確認し、覚えるよう促している。

第3回では、『』「」～（）⇒など、記号の入力練習もする。ここまでで、一通り、入力に必要な練習は終わる。その後は入力のスピードを上げる練習になる。速く、間違いが少ない入力方法を紹介し、単文入力、長文入力の練習を行う。

3.1.3 第2段階：日本語入力練習と発表練習

第2段階では日本語での入力練習を引き続き行いながら、文章表現Aと緊密に連携し、発表の練習をする。2015年度後期では、第4回から第9回の授業に当たる。日本語入力の練習にはタイピング練習を取り入れている。使用したソフトウェアは「Flash Typist ver 1.28」というフリーソフトウェアである。このソフトウェアは問題を自作することができる。事前に『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』の新出語彙で筆者が問題を作成し⁵、総合Aの進度に合わせて、授業当日や前日に習った課の言葉で入力練習をした。問題が終了すると「タイプ速度」「タイプ精度」など、詳細なデータが表示される。それを各自記録用紙に記録し、上達度が確認できるようにした。結果が数字で表れるので、より精度を高めよう、スピードを上げようとする姿勢が見られた。また、問題に出てくる言葉の意味がわからない時は辞書等で調べており、良い復習になっていたようである。自習ができるように、問題のデータは50課分全て最初に渡している。特に文字認識が弱い学生や入力が遅い学生には、授業外でも練習することを推奨している。

発表練習は、この学期では、「自己紹介」「休みの日」「私の町」「今年の三大ニュース」の4つのテーマで行った。まず、文章表現Aで作文を書き、それをパソコン演習の授業内で入力、または、宿題で入力する。提出された作文や入力データを教師がチェックし⁶、それを基に、各自、自己訂正、推敲をし、改稿する。推敲作業の際には、学生の推敲能力の向上を図るため、「ピア・レスポンス」を行っている。「ピア・レスポンス」とは、作文の推敲活動において、学習者同士が書き手・読み手の立場を交換しながら作文内容を検討する活動のことである（池田・館岡2007：71）。読み手の立場を考えた、わかりやすい文章が書けるようになるのではないかと考え、この手法を取り入れている。ピア・レスポンスは通常、ペア、または、少人数のグループで行うものであるが、この段階では、ピア・レスポンスに慣れるため、クラス全員で一人の作文について行っている。

作文の入力データは、ページ設定や文字のフォントスタイル、サイズの変更など、原稿の体裁を整える練習や、漢字にルビを付ける練習にも使用する。体裁の整え方は他の言語のワードでも大体同じ仕様なのでスムーズにできるが、ルビ機能は日本語版に特徴的な機能であり、説明、練習が必要になる。最近のワードは自動でふりがなが表示されるので、漢字の読みが苦手な学生には、実用的で人気が高い機能である。ただ、100%正しく表示されるわけではないので、ワードを過信せず、必ず自分でチェックするよう、指導している。

作文の完成後、パワーポイントを作成し、発表する。2015年度後期は、一つ目の「自己紹介」以外の三つの作文でパワーポイントを作成した。色使いやレイアウトなど、見やすさを考えることはもちろんだが、作文の内容に沿ったスライドを作成すること、意味のないアニメーションを使用しないなど、発表を聞く人の理解を妨げないスライド作成を心がけ、話を聞きながら見た時にわかりやすいスライドかどうかを考えるよう指導した。また、インターネット上の写真や画像を使用する場合は、その参照元の URL を必ず明示するなど、情報の扱い方も指導した。パワーポイントの完成後、パワーポイントを操作しながら、発表をする。発表時の態度や声の大きさ、聞き手とのアイコンタクトの取り方、パワーポイントのスライドを切り替えるタイミングなどの指導を行っている。

3.1.4 第3段階：最終プレゼンテーションの準備

第3段階はコースの最後に行われる最終プレゼンテーションに向けた準備である。2015年度後期では、第10回から第13回の授業に当たる。プレゼンテーションの時間は質疑応答も含め、一人10～15分程度である。テーマは学期によって異なる。以前には、学生が自分でテーマを決め、アンケートやインタビューをし、データを取って発表したこともあった⁷が、近年は、「今までで一番〇〇こと（楽しかったこと・大変だったこと・びっくりしたこと、等）」「私の国の〇〇（観光地・行事・有名人、等）」が多い。この学期のテーマは「今までで一番〇〇こと」であった。

まず、各自タイトルを決め、スピーチ原稿の作成を行う。自分の発表したい内容と言語レベルが一致せず、辞書に頼りがちになるが、辞書で調べた言葉は他の学生には伝わらないことが多い。聞き手がわかるように、既習の言葉や表現を使うよう、指導した。文章表現 A と連携し、原稿は何度も推敲、改稿を繰り返す。その際に、ピア・レスポンスを取り入れている。この学期は時間的な制約があり、学生数も少なかったため、クラス全員でのピア・レスポンスを学生一人につき1回だけ行った。学期によってはクラス全員でピア・レスポンスをし、その後、ペアでピア・レスポンスをする、場合によってはペア活動を2回するなど、数回、ピア・レスポンスを取り入れることもあった⁸。

スピーチ原稿が大体出来上がった頃から、パワーポイントの作成を始める。第2段階の発表練習の時と同様、スピーチの内容に沿ったスライド作成を心がけ、必要な写真や画像を準備したり、図表の作成を進める。スピーチ原稿の内容変更に伴い、パワーポイントも変わってくるので、随時、確認を行っている。

スピーチ原稿が完成したら、まず、声に出して読む練習をする。発音に注意しながら、スピーチ原稿を読む。各自、ICレコーダーに練習の声を録音し、自分で聞いて聞きにくい所や、話しにくい所を重点的に繰り返し練習する。また、ペアになってお互いが読むのを聞き、アドバイスをし合ったり、総合 A と数回連携して、学生一人につき30分ほど時間を取り、教師と読む練習をする。最終段階で、発表を「見せる」練習をする。パワーポイントを使い、他の学生が聞き手となって、実際の発表と同じような状況で練習をする。パワーポイントのスライドを切り替えるタイミングやアイコンタクトの取り方、発表態度などに注意しながら練習を行う。他の学生や教師から質問を受け、質疑応答の練習もする。できるだけスピーチを覚え、聞き手を見ながら発表できるように、繰り返し練習を行っている。

この学期では最終プレゼンテーションがちょうどパソコン演習 A の時間（第14回）に当たっ

たが、他の授業の時間に行われることもある。発表は他のコースの学生や日本人学生、専門の授業の指導教員、留学生別科の教員など、毎回、30人位の方が見に来てくださる。集中 A での日本語学習の集大成でもあり、発表後は、毎回、学生の満足気な顔が見られる。

3.2 その他の活動実践

3.1節では2015年度後期の授業で行った活動を中心に述べたが、これまでには、その他にも様々な活動を行ってきた。ここでは代表的な活動について紹介する。

3.2.1 視聴覚教材を利用した活動

日本語入力の練習として、視聴覚教材を見て、内容の説明や与えられた質問の答えを入力する活動をした。学期によって、3、4回取り入れた時もあった。

主に使用したのは『ヤンさんと日本の人々』『新日本語の基礎Ⅰ復習ビデオ』である。『ヤンさんと日本の人々』は、来日した外国人のヤンさんと日本人の友人家族、会社の人との交流を描いたビデオである。『新日本語の基礎Ⅰ復習ビデオ』は『新日本語の基礎Ⅰ』シリーズ（スリーエーネットワーク）の視聴覚教材で、既習の言葉、文型を使用しながら、日本の会社での出来事、人間関係を描いている。どちらも初級学習者でもわかりやすい日本語を使用しているだけでなく、一話の時間が長すぎず、台詞や演技が自然で、一般のドラマを見ているように感じる。学生もビデオの内容に興味を持ち、楽しそうに視聴していた。

総合 A の進度に合わせ、視聴する回を決定した。内容を詳細に説明するのは初級の学生にとって難しいことではあったが、既習文型を使いながら積極的に取り組んでいた。

3.2.2 自律学習を支援する活動

2章で述べたように、パソコン演習の目的の一つには学生の自律学習の支援がある。タイピングソフトウェア「Flash Typist ver 1.28」で日本語入力の練習を推奨することもその一つだが、その他に、インターネット上の日本語学習サイトを紹介し、実際にどのような練習ができるか体験してもらうことで、自律学習を促している。残念ながら、2015年度後期にはその時間を取ることができなかったが、殆どの学期で扱っている活動である。

日本語学習ができるサイトは多くあるが、近年の授業では「オンライン日本語練習」(<http://www.nihonmura.net/jp>)というサイトを利用している。ここでは、「ひらがな・カタカナの入力練習」「動詞の活用形」「漢字の読み方」「序数」の練習ができる。また、上級者向けの文法表現の紹介をしている。授業で主に使用しているのは「動詞の活用形」「序数」のページである。ある程度、総合 A で動詞の活用を学んだ後に紹介している。「動詞の活用形」のページでは、出題された動詞をテ形やナイ形、辞書形など、指定された形に活用させて入力する。「序数」のページでは、年月日の言い方、時間や分の言い方などを入力する。促音や長音で間違えることが多く、それらを意識した活動ができる。なかなか満点を取ることができず、教科書を見直しながら入力している学生も多く見られる。良い復習になると学生からも好評を得ている活動である。

日本語の学習サイトを紹介する以外に、自律学習の支援として、オンライン辞書の紹介と練習も行っている。近年紹介しているのは「jisho」(<http://jisho.org>)というサイトである。これは日本語-英語のオンライン辞書で、英語の説明しかないが、多くの用例が載っており、用法がわ

かりやすい。日本語学習者用に漢字の読み方があるのも推奨する理由の一つである。yahoo や google、excite などの翻訳、オンライン辞書も紹介しているが、日本語母語話者が一般的に使うオンライン辞書では、言葉を調べても漢字の読み方がわからず、意味もわかりにくいという学生が多い。英語がわからない学生には薦められないが、「jisho」はその点をカバーできるオンライン辞書と言える。

授業では、紹介したオンライン辞書を使って言葉の意味を調べる練習や、長文を読み、その長文内の言葉や表現、漢字の読み方を調べる練習を行った。また、発展練習として、その長文と同じテーマで作文を書くという課題を与えたこともある。

3.2.3 実際のイベント情報を利用した活動

ワードで、インデントやタブを設定し、見栄えの良い、体裁が整った書類を作成する練習として、実際のイベント情報を利用した活動を取り入れた。例えば、岐阜市内のある高校で、高校生と科学に関して英語で交流できる留学生を募集する貼り紙があった。それを利用し、同じようなレイアウト、フォントのチラシを作成する活動を行った。また、学生に何かイベントを考えてもらい、参加者を募集する同様のチラシ作成を行った。場所や日時、募集人数などの書き出しを描えるなど、見た目をきれいにすることや、注目してもらいたい部分を強調し、目に付きやすくするレイアウトを考えたり、読み手が理解しやすい文章、内容を意識して作成するよう指導した。架空の内容もあったが、クリスマス・パーティーや忘年会、旅行の参加者を募集する内容など、実際に自分が企画したい活動の内容で作成する学生が多く、チラシ作成後、どのイベントが一番おもしろそうで参加してみたいかなど、自然と話が広がり、興味を持って取り組めた。

4. 学生の反応と今後への提言

集中 A では、コースの最後の授業で反省会を行っている。そこでは、学生にアンケートに答えてもらいながら、口頭で直接意見を聞いている。アンケートにはパソコン演習についての項目もある。近年の学生の反応をいくつか紹介したい⁹。

- ・入力練習は大切だ。大学の授業やゼミで必要だが、全然日本語の入力の仕方を知らなかったの
で、練習できて良かった。
- ・タイピングソフトを使った練習は良かった。スピードが速いので、日本語を見て日本語で考え
られるようになるから。『みんなの日本語』の言葉を使っているのも良かった。
- ・入力練習はもっとあったほうが良い（宿題でも良い。学んだ文法項目の入力など）。プレゼン
の練習、パワーポイントの作り方ももう少し増やしても良い。
- ・おもしろかった。とても良かった。この授業は大切だ。
- ・時間が短い。もっと多くしても良い。
- ・発表はしたほうが良い。大学の授業でもするし、いい練習になる。
- ・パワーポイントの作り方をやってほしい。

このように、概ね、肯定的な反応が多かった。専門の授業のために、日本語での入力練習やパ

ワーポイントの作成練習、プレゼンテーションの練習は重要で、もっと練習が必要だと考える学生が多いことがわかる。

しかし、一方で、以下のような意見もあった。

- ・簡単だった。もっと難しいことをしても良い。
- ・パワーポイントは前に習ったことがあるので、おもしろくなかった。
- ・初めて日本語を勉強する人には良いと思う。

やはり、学生のコンピュータ・リテラシーによって、意見が違ってくるのがわかる。学生によって課題を変えたり、追加の課題を与えたりしてはいたが、物足りなさを感じる学生もいたようだ。

2016年度前期からパソコン演習が総合 A に組み込まれるが、上記の学生の反応を考えると、日本語入力の練習は継続的に取り入れると良いと思われる。総合 A で文字の導入が終わった頃から始め、文章表現 A の作文を入力して提出するなど、ワードを使った課題を出したり、宿題としてタイピング練習をしてくるようにしても良い。タイピング練習は、文字認識が弱い学生の能力を向上させる手段としても有効だと思われる。文字認識が弱い学生は教科書や授業での板書の理解に時間がかかり、コースの初期から授業についていけなくなることが往々にしてある。タイピング練習は練習すればスコアが上がっていくので、楽しみながら練習できる。繰り返し練習することで、文字を早く覚えることができるであろう。練習問題を英語や中国語などを見て日本語を入力するように作成すれば、言葉を覚える練習にもなる。反省会のアンケートでは、「日本語の勉強は覚えなければいけない言葉が多くて大変だ」という意見があった。言葉を覚えるのに苦労している学生は多いので、その助けになるのではないかと思う。

また、日本語学習サイトを利用して学習する時間も取れると良い。総合 A の授業の進度に合わせ、教師が指示する練習をしても良いし、学生が自分に必要だと思う練習をしても良い。後者は学生が主体的に学ぶ環境を与えることになり、コース後の自律学習を支援することにもなる。日々、新しいサイトやサービスが生まれ、良い練習ができる場も多くなっている。それらを実際にやってみることは、学生の学習に対する動機づけを高めるのではないだろうか。

パワーポイントの作成やプレゼンテーションの練習も多くの学生が重要だと考えている。2016年度前期は最終プレゼンテーションを行わないため、3.14項で紹介したように、長い期間をかけて準備や発表練習を行うことはない。しかし、学生の意見を考えると、何らかの形で発表練習はした方が良い。これまででも、文章表現 A で書いた作文を基にパワーポイントを作成し、発表してきたが、小規模でも、この活動は続けると良いと思う。

5. おわりに

2000年にパソコン演習 A を担当した当初のことを振り返ると、この15年間で、学生を取り巻く環境は大きく変わった。当初は、母国でパソコンに触れる機会が殆どなく、入力には人差し指でポツポツとしかできない学生が必ずクラスに数人はいた。今では大半の学生が自分のパソコンを持っており、母語での入力に問題がある者は殆どいない。生活の中でパソコンを使うことが特別

なことではなくなり、高いコンピュータ・リテラシーを既に持っている人が多くなった。パソコン演習 A の当初の目的が「コンピュータ・リテラシーを高めること」であったことを考えると、この授業が単独で行われなくなるのは時代の趨勢かもしれない。

しかし、最初の入力の手ほどきは必要で、継続的に日本語の入力練習をしたいと言う学生は多い。また、パワーポイントを使用した発表練習も、専門の授業を考えると必要であろう。今後も有用なインターネットのサイトやサービスが多く出てくるであろうし、それらを利用することは学生の益にもなると思われる。

初級学習者が日本語表記のパソコンを使って日本語の文章を作成したり、パワーポイントを操作して発表することは非常に困難なことである。パソコン演習の意義は、様々な練習を通してパソコンや発表のスキルを身に付け、初級レベルの日本語力でも日本語で発表できる、文章が入力できる、課題をこなせるという達成感や自信を得られるようになることであると考えられる。「パソコン演習」という名前はなくなるが、総合 A の中でパソコンを利用した授業、自律学習の支援を今後も続け、学生がそのような実感を得られるようにサポートしていけたら良いと思う。

注

- 1 2015年度後期は第2版を使用した。それ以前は全て初版を使用している。
- 2 同上。
- 3 コース終了時の学生数である。開始時は9名であったが、コースの早い段階で、3名は他のクラスへ移動した。最初の数回は6名以上で授業を行った。
- 4 『留学生のためのプロジェクトワーク』（宮谷・野原 2005）を、使用する OS、Microsoft Office に合わせて改訂し、授業で扱わない活動を削除した簡易版の教材である。
- 5 2015年度後期は総合 A で『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 II』の第2版を使用したため、それに合わせ、問題を変更している。
- 6 教師による作文のチェックは、文法が誤っている箇所や誤字脱字の指摘と内容に関するコメントで、訂正例は示していない。後述の「ピア・レスポンス」をする場合は、学生による推敲活動を妨げないよう、内容に関するコメントはしていない。
- 7 『日本語研修コース A クラス プロジェクトワーク実践報告集 2001秋期～2002春期』（岐阜大学留学生センター編 2003）、『同、2002秋期～2003春期』を参照のこと。
- 8 野原・吉成（2012）で、集中 A の授業で行ったペアによるピア・レスポンスの活動を紹介している。一例として参照していただきたい。
- 9 学生がアンケートに書いたり、反省会で述べた意見を担当教師がまとめて文章にしたものである。学生が表現したそのままの言葉ではない。

参考文献等

- 池田 玲子・館岡 洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 海外技術者研修協会監修（2000）『新日本語の基礎 I 復習ビデオ』スリーエーネットワーク
- 岐阜大学留学生センター編（2003）『日本語研修コース A クラス プロジェクトワーク実践報告集 2001秋期～2002春期』岐阜大学留学生センター

- 岐阜大学留学生センター編 (2003) 『日本語研修コース A クラス プロジェクトワーク実践報告集 2002秋期～2003春期』岐阜大学留学生センター
- 国際交流基金編 (1983) 『ヤンさんと日本の人々 国際交流基金ビデオ教材』国際交流基金
- スリーエーネットワーク編著 (1998) 『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (1998) 『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (2012) 『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著 (2013) 『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- 野原 美和子・吉成 祐子 (2012) 「初級日本語学習者によるピア・レスポンスの実態と効果 -- 読み手が学習者と教師の場合の比較」『岐阜大学留学生センター紀要2014』 pp. 39-55
- 宮谷 敦美・野原 美和子 (2005) 『留学生のためのプロジェクトワーク』岐阜大学留学生センター

参考ウェブサイト (2016年7月現在)

- オンライン日本語練習 Online Japanese Practice powered by NIHON MURA (<http://www.nihonmura.net/jp>)
- jisho (<http://jisho.org>)
- Web Frontier (<http://www.w-frontier.com/index.html>) 「Flash Typist ver 1.28」

初中級学習者を対象とした聴解授業

—「聴解演習 B」授業報告—

A Class Report of “Listening Comprehension B” for Pre-Intermediate-Level Japanese Learners

富田 久仁子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初中級学習者を対象とした聴解授業「聴解演習 B」について報告するものである。2015年度前期・後期に行った授業について、内容や指導方法を報告し、聴解授業のあり方を検討する。

1. はじめに

聴解の授業であるが、2007年度に「聴解演習 B」の前身である「聴解演習ⅡA」という授業を担当したのが始まりであった。翌年の2008年度から「聴解演習ⅡA」は「聴解演習 B」となり、現在に至っている。

聴解授業の目的は、「聞く力」を伸ばす事にあるが、「聞く」ことは実際には語彙や文法を知っていることと不可分の関係にある。近年、「聴解演習 B」クラスの対象となる学生について、基礎的な文法の習得がなされていない、または、知っている語彙数が非常に少ない学生が見られるようになった。これは、2015年度後期の学生がより顕著であった。そのため後期は文法復習の時間をとるなど前期とは若干異なった授業内容となった。上記のような学生の文法の未習得や語彙数不足に対応するため、前期後期ともに、基礎的な文法項目も随時復習しながら授業をすすめ、また、聞き取った内容を正しく理解できているか細かく確認しながら授業を進めた。

本稿では、2015年度前期・後期に行った聴解演習 B の授業実践について報告し、初中級レベルの聴解授業について考えたい。

2. 授業計画

聴解演習 B では、これまで毎学期初回の授業時にニーズ調査のため自由記述でアンケートを行っている。アンケートの内容は、「日本語の聞き取りで、何が困ったか」「この授業で何が勉強したいか」「日本語能力試験の聴解の勉強をしたことがあるか」等である。2015年度前期と後期のアンケートでは、「日本語の聞き取りで、何が困ったか」という質問に対して、多くの学生が「日本人学生の話がわからない」「普通体の会話、会話独自の表現がわからない」と答えた。また、「ゼミで先生の話がわからなくて困った」「日常生活で困ったことがあった」という答えもあった。「この授業で何が勉強したいか」という質問に対しては、「日常会話の聞き取り」「生活でよく使われる表現」という答が出てきた。

上記の回答は、これまでのアンケートでほぼ毎回見られるものである。留学生は研究室で日本人学生と英語でコミュニケーションをとることはできるが、日本人学生同士の日本語の会話はわからないので、それを理解できるようになりたいという希望を持つようだ。日本人学生の話すスタイルは学習者が日本語のクラスで勉強しているものと違うからわからない、だからそのスタイルの聞き取りを勉強したいという留学生は多い。また、ゼミや日常生活で、「言葉の意味がわからないこと」や「相手の話すスピードが速いこと」により、話が聞き取れず困ったという回答が多かった。

アンケートの学生の回答をふまえて、会話の聞き取り練習を中心に行うこととし、並行して、聞き間違いが起りやすい音、話し言葉において変化する音、縮約形などを授業で扱うことにした。授業を会話の聞き取り練習と音の聞き取り練習の2本立てで行う計画をたてたわけである。その他に、総合Bの授業において使われているメインテキスト（2015年度前期は『中級へ行こう』と『中級を学ぼう』の2冊、後期は『中級へ行こう』の1冊）本文の聞き取りも行うことになっていたため、実際は3種類の聞き取り練習を行うこととなった。

2015年度前期・後期の教材は、上記の総合Bのテキストの他に、会話の聞き取り練習では『聴解が弱いあなたへ』を使用した。このテキストはBクラスの学生のレベルに適しており、会話内容に関する文法や語彙の問題、会話のトピックに関連した留学生が興味を持つような短い読み物もあることから使用を決めた。音の聞き取り練習では、『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉基礎編』『聴解ストラテジー上』『聴解ストラテジー下』を抜粋して使用した。上記のテキストは音の聞き取り練習が多く、聞き取った音を文字で書かせる問題も多いことが使用の理由である。後期においては、復習文法の聴解練習のため、『わくわく文法リスニング』『学ぼう！にほんご初級1聴解練習問題集』『初級日本語聴解練習 毎日の聞きとり50日上』『楽しく聞こうI』『みんなの日本語初級I 聴解タスク25』を文法項目に合わせて抜粋して使用した。

前述のように、近年のBクラスの学生の特徴として、初級文法が身に付いておらず、また語彙数も少ない学生が多くなったことがあげられる。ゆえに聴解演習Bの授業においても、既習文法の定着や語彙数を増やすことを目標の一つとし、文法項目の確認や、語彙の説明などを丁寧に行うようにし、文法と語彙の復習テストを次週に行った。その他に当日の聞き取り練習から出題するディクテーションテストも行った。テストを毎回2種類行ったわけである。復習テストの目的は語彙や文法の定着をはかるため、テスト範囲を事前に示し、テスト範囲の復習を次週までの宿題にした。また、ディクテーションテストは授業内で行う聞き取り練習への学生のモチベーションを高めるため、またその練習の成果を測るために行った。

2015年度前期は上述の授業内容であったが、後期の授業においては、前半5回の授業で文法復習に重きをおいた聞き取り練習を行ったため、前期とは少し内容が異なっている。詳しい授業内容については後述する。

3. 授業内容

3.1 2015年度前期

3.1.1 クラスの概要

受講生は13名（集中コース8名、一般コース5名）であった。国籍内訳は、中国9名、オーストラリア2名、アメリカ1名、エクアドル1名であった。

この学期においては、学生の出席時数不足が目についた。専門の授業が忙しくなったという理由で学期後半に欠席が増え、4名が結局修了できなかった。通常に比べて多い数であり、非常に残念であった。

はじめの頃は、復習テストなどの勉強も事前にしてこない学生が多かったが、授業が進むにつれて、勉強してくるようになった。聞き取り練習にまじめに取り組んではいたが、初級文法の理解と基本的な語彙数が不十分な学生がおり、文法項目や語彙の説明に非常に時間がかかることがあった。

学生に行ったアンケートの結果をふまえて、前述の様に、音の聞き取り練習と会話の聞き取り練習、それに加えて、総合Bクラスのメインテキストの聞き取り練習も行った。3種類の聴解練習を学期を通して行ったわけである。

音の聞き取り練習では、学生からの要望（日本人学生の話がわかるようになりたい）に応えるため、聞き分けにくい音（「清音／濁音」「dとr（でんどう／れんどう）」「suとtsu（す／つ）」等）、変化した音（「すごい→すっこい」「そのまま→そのまんま」等）、縮約形などを中心に聞く練習を行った。

会話の聞き取り練習では、日常よく使われる語彙を知ることをめざし、日常場面での会話を聞き、語彙の紹介を行った。また、文法の確認もその都度行った。

3.1.2 授業活動

2015年度前期の授業の内容について、以下の表1に記す。

表1. 2015年度前期授業活動

回	授業内容	授業内小テスト
1	1) 授業についてのオリエンテーション 2) 授業アンケート実施 3) 『中級へ行こう』本文聞き取り1課 4) 音の聞き取り練習「促音」「撥音」「拗音」長音 5) 会話の聞き取り練習仮定表現の聞き取り「～と「～ても」	1) 実施せず
2	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り2課 2) 音の聞き取り練習「清音」「濁音」 3) 会話の聞き取り練習 敬語表現の聞き取り「～ておく」「～てある」「～ている」	1) 「仮定表現」テスト実施
3	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り3,4課 2) 音の聞き取り練習「似た音の聞き分け」「dとr（でんどう／れんどう）」「suとtsu（す／つ）」 3) 会話の聞き取り練習 「時間の前後関係」の聞き取り「意向形」の聞き取り	1) 「～ておく」「～てある」「～ている」テスト実施 2) 「仮定表現」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施
4	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り5課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」 「～ている→～てる」「～ておく→～とく」 「～てしまう→～ちゃう」「～てあげる→～たげる」 3) 会話の聞き取り練習 「～にする」「服のもよう語彙」	1) 「時間の前後関係」テスト実施 2) 「～ておく」「～てある」「～ている」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施

5	<p>1) 『中級へ行こう』 本文聞き取り6,7課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」 「ては→ちゃ」「なければ→なきゃ」「らない→んない」 3) 会話の聞き取り練習 「位置の語彙」</p>	<p>1) 「服のもよう語彙」テスト実施 2) 「時間の前後関係」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
6	<p>1) 『中級へ行こう』 本文聞き取り8課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」 「と→って」「という→って」「の→ん」 3) 会話の聞き取り練習 「順序」に関する表現</p>	<p>1) 「位置の語彙」テスト実施 2) 「服のもよう語彙」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
7	<p>1) 『中級へ行こう』 本文聞き取り9課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」 「ても→たって」「かもしれない→かも」 「たかな→たっけ」「たらどう?→たら?」 2) 会話の聞き取り練習 「禁止、許可」の表現</p>	<p>1) 「順序の表現」テスト 2) 「位置の語彙」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
8	<p>1) 『中級へ行こう』 本文聞き取り10課 2) 音の聞き取り練習 「促音」「撥音化」まとめ 3) 会話の聞き取り練習 「髪型の語彙」</p>	<p>1) 「禁止、許可の表現」テスト実施 2) 「順序の表現」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
9	<p>1) 『中級を学ぼう』 本文聞き取り1課 2) 音の聞き取り練習「促音化」「拗音化」 3) 会話の聞き取り練習 アドバイスの表現 「干支の語彙」</p>	<p>1) 「髪型の語彙」テスト実施 2) 「禁止、許可の表現」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
10	<p>1) 『中級を学ぼう』 本文聞き取り2課 2) 音の聞き取り練習「母音の変化」 3) 会話の聞き取り練習 「～てもらう」 「敬語」 「銀行に関する語彙」</p>	<p>1) 「促音化」「拗音化」テスト実施 2) 「髪型の語彙」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
11	<p>1) 『中級を学ぼう』 本文聞き取り3課 2) 音の聞き取り練習「カタカナ語」 3) 会話の聞き取り練習 「道案内の表現」</p>	<p>1) 「～てもらう」テスト実施 2) 「促音化」「拗音化」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
12	<p>1) 『中級を学ぼう』 本文聞き取り4課 2) 音の聞き取り練習「話言葉の音の変化」 「すごい→すっごい」「そのまま→そのまんま」 「アクセントの移動」 3) 会話の聞き取り練習 「頻度を表す語彙」</p>	<p>1) 「道案内の表現」テスト実施 2) 「～てもらう」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>
13	<p>1) 『中級を学ぼう』 本文聞き取り5課 2) 音の聞き取り練習「声の調子」「縮約形」 「ても→たって」 3) 会話の聞き取り練習 「誘う表現」 「あいまいな応答」</p>	<p>1) 「頻度を表す語彙」テスト実施 2) 「道案内の表現」テスト返却とフィードバック 3) デイクテーションテスト実施</p>

14	1) 『中級を学ぼう』本文聞き取り6課 2) 音の聞き取り練習「聞き分けにくい音」 「ダ行とナ行」「ダ行とラ行」 3) 会話の聞き取り練習 「受身、使役、使役受身」	1) 「あいまいな応答」テスト実施 2) 「頻度を表す語彙」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施
15	1) 『中級を学ぼう』本文聞き取り7課 2) 音の聞き取り練習「聞き分けにくい音」 「ジェの音とゾの音」「ジェの音とゼの音」 3) 会話の聞き取り練習 「擬態語」 4) N3相当の聴解問題を練習	1) 「受身、使役、使役受身」テスト実施 2) 「あいまいな応答」テスト返却とフィードバック

3.1.3 授業の流れ

毎時限の授業の流れは下記の通りである。

- 1 前週内容の復習テスト（会話聞き取り練習の中の語彙、文法に関して）
- 2 前週実施したテストの返却とフィードバック
- 3 メインテキスト本文の聞き取り練習
- 4 音の聞き取り練習
- 5 会話の聞き取り練習
- 6 その日の内容のディクテーションテスト（主に音の聞き取り練習に関して）

一時限の授業で扱う3種類の聞き取り練習は以下のようである。

1つ目は総合Bクラスのメインテキスト内の本文（300字～600字程度）の聞き取り練習で、穴埋めディクテーション（語単位、句単位）を行った。これは総合Bクラスの授業内で読解済みであるので、内容にはあまりふれず正しく聞き取ることに的をしばって行った。聞き取った音を正確に書くこと、また、本文は会話文ではないため、聞いた内容についてディクテーションシートを見ないで簡単にまとめて口頭で発表させることも行った。

2つ目は音の聞き取り練習で、聞き間違いやすい音、変化した音、縮約形等を扱った。学生によっては、特に聞き取りを不得意とする音がある。中国人学生では「清音と濁音」が、タイ人学生は「し、ち、す、つ」の音の聞き取りが不得意な学生がいる。学生達が授業内での練習でそれを自覚し、聞く練習のさいにその音に特に注意を払ってほしいという目的もあった。縮約形の聞き取り練習では、「～てしまう→～ちゃう」「～ておく→～とく」等、文法の復習が必要な場合が多く、時間がかかることも多かった。しかし縮約形の説明を聞いて日本人の言っていることがやっとわかったと納得したようであった。また、縮約形の聞き取り練習においては、短い会話の練習問題も多くあり、学生にとっては日常会話を聞く練習になったと思う。会話でよく使われる表現などもここで多く紹介することができた。

3つ目は会話の聞き取り練習で、会話で使われる文法や語彙の確認を行った後聞き取り練習、その後会話の内容に関連する語彙をできるだけ多く追加して紹介した。また、会話の内容について質問や意見、日本と比べた自国の状況の紹介など学生にできるだけ話をさせるようにした。次週の授業時に必ず語彙や文法のテストを行ったため、学生達が自宅学習で復習を行ってきたこと

が良かった点であった。

テストは毎回2種類行った。授業開始時の前述の復習テストと授業終了時のディクテーションテストである。前週の復習テストは会話の聞き取り練習の中で扱った文法や語彙についてのテストで、具体的に勉強する内容を学生に事前に指示しておいた。また、ディクテーションテストは、その日に行った主に音の聞き取り練習の中から抜粋して単語単位、文単位で行った。

最終授業で、N3相当レベルの聴解問題の一部を行った。これは練習として行い、点数化はしていない。授業内で再度問題を聞きながら解答を確認していったが、半分程度できていたようである。もう少し点がとれるのではないかと思っていたが、解答の選択肢が文で示されておらず、選択肢を聞き取って答えるものは難しいようであった。選択肢が文で示されているもののほうが、正解者が多かった。

3.2 2015年度後期

3.2.1 クラスの概要

受講生は15名（集中コース9名、一般コース6名）であった。国籍内訳は、中国7名、インドネシア4名、タイ2名、アメリカ1名、イラン1名であった。うち1名出席時数不足で修了できなかった。この学生も専門の授業があるということで、後半に欠席が多くなった。しかし、その1名を除いては、このクラスは欠席が少なくまじめで、授業開始時に行う前週の復習テストも、ほとんどの学生が事前に勉強して受けていた。一般コースの学生は欠席が多くなりがちであるが、この期の学生たちは熱心であった。

この学期のBクラスの学生は初級文法の理解が不十分であるということで、総合Bクラスにおいてメインテキストに入る前に授業で初級文法の復習を行った。これは、これまでなかったことである。そして、聴解演習Bでも、総合Bクラスの初級文法の復習項目に連動させて聴解練習を行うことになった。聴解演習Bの授業においては、総合Bクラスですでに復習済みの文法項目の聴解を扱ったが、必ず授業の初めに該当する文法の復習を再度行った。学生の反応が悪い場合は少し長めに復習の時間をとったこともある。その後に、その文法項目を含む聞き取り練習を行った。しかし、文法の復習に時間をかけてしまい、聞き取り練習の時間が短くなったことも多々あったことは反省点である。

このやり方は、該当文法が使われていることがわかった上で聞き取るので、内容の理解もよく、学習者の文法復習にも役立ったと思われる。

3.2.2 授業活動

2015年度後期の授業の内容について、以下の表2に記す。

表2. 2015年度後期授業内容

回	授業内容	授業内小テスト
1	1) 授業についてのオリエンテーション 2) 授業アンケート実施 3) 「て形」復習と聞き取り練習	1) 実施せず

2	1) 「ない形」復習、聞き取り練習 2) 「て形」復習、聞き取り練習	1) 「て形」テスト実施
3	1) 「辞書形」復習、聞き取り練習 2) 「た形」復習、聞き取り練習	1) 「ない形」テスト実施 2) 「て形」テスト返却とフィードバック
4	1) 「普通体」復習、聞き取り練習 2) 「～んです」復習、聞き取り練習	1) 「辞書形」「た形」テスト実施 2) 「ない形」テスト返却とフィードバック
5	1) 「授受」復習、聞き取り練習	1) 「普通体」「～んです」テスト実施 2) 「辞書形」「た形」テスト返却とフィードバック
6	1) 音の聞き取り練習「促音」「撥音」 2) 会話の聞き取り練習「敬語」「～ておく」「～てある」「～ている」	1) 「授受」テスト実施 2) 「普通体」「～んです」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施
7	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り1課 2) 音の聞き取り練習「拗音」 2) 会話の聞き取り練習「位置の語彙」	1) 「～ておく」「～てある」「～ている」テスト実施 2) 「授受」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施
8	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り2,3課 2) 音の聞き取り練習「清音」「濁音」 3) 会話の聞き取り練習「時間的前後関係の表現」	1) 「位置の語彙」テスト実施 2) 「～ておく」「～てある」「～ている」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施
9	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り4課 2) 音の聞き取り練習「似た音の聞き分け」 3) 会話の聞き取り練習「禁止、許可の表現」	1) 「時間的前後関係の表現」テスト実施 2) 「位置の語彙」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施
10	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り5,6課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」「～ている→てる」「～ておく→とく」「～てしまう→ちゃう」「～てあげる→たげる」 3) 会話の聞き取り練習「順序の表現」	1) 「禁止、許可の表現」テスト実施 2) 「時間的前後関係の表現」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施
11	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り7課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」「～ては→ちゃ」「～なければ→なきゃ」「～らない→んない」 3) 会話の聞き取り練習「アドバイスの表現」	1) 「順序の表現」テスト実施 2) 「禁止、許可の表現」テスト返却とフィードバック 3) ディクテーションテスト実施

12	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り8課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」 「と→って」「という→って」「の→ん」 3) 会話の聞き取り練習 「受身、使役、使役受身」	1) 「アドバイスの表現」テスト実施 2) 「順序の表現」テスト返却とフィードバック
13	1) 『中級へ行こう』本文聞き取り9課 2) 音の聞き取り練習「縮約形」 「ても→たって」 3) N3相当の聴解問題を練習 4) アンケート実施	1) 「受身、使役、使役受身」テスト実施 2) 「アドバイスの表現」テスト返却とフィードバック

3.2.3 2015年度後期の授業の流れ

授業については、前期と同様の部分が多い。しかし前述のように、前半（5回）は文法復習を組み込み、後半（8回）とは授業内容が異っているため、前半と後半に分けて記述する。

前半 10月12日～11月10日（5回）

- 1 前週内容の復習テスト（文法に関わる聞き取りについて）
- 2 前週実施したテストの返却とフィードバック
- 3 その週の文法復習
- 4 復習文法に関わる聞き取り練習

文法の復習とその聞き取りに重きをおいたため、音の聞き取り、会話の聞き取りは行っていない。総合Bクラスではテキストを使用していなかったため、メインテキスト本文の聞き取りは行わなかった。総合Bクラスの授業で復習した文法項目を、その授業から間を置かず扱ったためか、学生の文法の理解は概ね良かった。復習テストも文法に関わる聞き取り練習の中から、文法に重きをおいて行った。

後半 11月16日～2月1日（8回）

後半の授業内容は、2015年度前期の授業と同様の流れで行った。つまり、メインテキスト本文の聞き取り練習（穴埋めディクテーション）、音の聞き取り練習、会話の聞き取り練習の3種類の聞き取りを行い、授業開始時の前週の復習テストと授業終了時のディクテーションテストも前期と同様毎回行った。

最終授業で、N3相当レベルの聴解問題をテスト形式で行った。約44%の正答率であった。絵を見て解答するもの、解答の選択肢も聞き取りのものは比較的できていたが、解答の選択肢が文で記載されている問題の正答率はあまりよくなかった。テスト終了後に多くの学生（特に非漢字圏の学生）が、選択肢の文を読む時間が足りなかったと言っていた。問題文が聞き取れていても、それを解答に反映できなかった学生もいたかもしれない。

4. 授業を振り返って

聴解演習 B の授業を行うにあたり最も考えたのは、様々な言語を母語としている学習者の「聞く力」を、1つのクラスの中でどのようにして伸ばすかということである。個々の学生が、聞き取りにおいて自分の不得意な部分を自覚することが重要であると考え、単音の聞き取り練習では自分の間違えた音に注意を向けさせるようにした。

音の聞き取りで扱った縮約形は説明を聞けば学生は納得し、実際の会話場面で使用された場合にも意味は理解できるかもしれない。しかし、聞き取りが不得意な音については自覚していても、正しく聞くのはやはり難しく、ディクテーションテストで同じ間違いを何度も繰り返す学生が多かった。授業内での練習では限界があり、学生の音の聞き取り能力の向上にはなかなか結びついていけないのが難しい点である。

後期については、学期を通して文法に重きをおいた聞き取りを行ったので、学生の理解があまりよくない文法項目については、文法の説明に時間を費やさざるをえなかった。そのため本来の聞く練習の時間が短くなってしまったことは大いに反省しなければならない点である。文法説明に費やす時間と聞く練習の時間のバランスを調整できるとよかったが、うまくできなかった。文法項目により学生の理解レベルに随分差があったが、みな協力して助け合って授業に参加してくれたことは、非常に良かった点である。今年度は文法復習の聞き取りが終わった後も、会話の聞き取り練習の前に、出てくる文法項目の説明にいつもより時間をさいたが、これは次の聞き取りで注意すべき部分がわかって聞くので、学生の内容理解の助けになったと思われる。また、語彙についても、事前に説明をしておくことも多く行った。しかし実際の場面では、事前に次に話されることについて知っていることはほほないのであるから、予備知識なしで聞く練習もいれたほうがよかったかもしれない。

基本的な語彙を増やすことも目的の1つであり、そのため日常よく遭遇する場面を想定した会話の聞き取り練習を行ったが、学生も楽しんで会話を聞いていた。会話に出て来たものの他にできるだけ多くの関連語彙や表現を紹介した。例えば「お見舞いに行く」という会話では、病院関連の語彙や日本のお見舞いのマナーを紹介した。また、学生に日本での病院に行った経験やお見舞いの経験、自国のお見舞い等について話をさせた。学生はこのプラスアルファの部分にもよく興味を示し質問も多く出た。会話の中に出てきた語彙や文法のテストでも、自宅学習でまじめに勉強してきた学生が多くテストで良い点がとれていた。

1時限の授業の初めと終わりに2つのテストがあるというのは、学生達には重荷だったようである。復習としての語彙・文法テストと、当日の聞き取りに対するモチベーションをあげるためのディクテーションテストで、種類と目的は異なっているのだが、どちらか1つにしたほうがよかったかもしれない。というのは、学生に負担であるのも理由のひとつであるが、テストの返却時のフィードバックも丁寧に行っていると時間がかかり、他の予定に影響が大きいからである。そうかといって、せっかくテストを行ったのであるから、フィードバックを学生の能力向上につなげたいという思いもある。テストについては、解答をテスト後に配布して授業内でのフィードバックの時間を最低限にするなどの工夫をしなければならないと思う。

5. おわりに

「このクラスの学生は、コースが始まったときと比べて聴解能力が向上しただろうか」というのが、いつも学期の終わりに考えることである。教師の側だけでなく、学生自身も聴解能力が高まったと感じているだろうか。聞き取る力の向上は、音を聞き分ける力だけでなく語彙や文法の力が向上して初めて自覚されると考え、聞く練習だけでなく、文法や語彙の定着に時間をかけてきたが、その方針は正しかったのだろうか。文法説明に費やす時間が多くなってしまったことを考えると、授業内で実際の会話に近いものを聞くことに時間をもっと費やすべきだったかもしれない。

後期の最後の授業で行ったアンケートで、この授業の感想を聞いた。文法や言葉の説明があったからよかったという感想も多かったが、一方もっと聞く練習が必要だと思うという感想もあった。限られた時間の中で聞く練習時間を増やすためには、授業内で行っていた文法や語彙の学習を予習宿題として自宅で行うようにさせる等、もっと工夫が必要である。難しいことであるが、方法を考えていきたい。

使用教材

小林典子・フォード丹羽順子・高橋純子・梅田泉・三宅和子（2010）『わくわく文法リスニング』凡人社

甲斐沢とし子・黒沢美保・後藤倫子・武田聡子・吉峰晃一郎（2002）『聴解が弱いあなたへ』凡人社

洪川晶・宮本典以子・坂野加代子（2006）『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉基礎編』スリーエーネットワーク

日本語教育教材開発委員会（2007）『学ぼう！にほんご初級1 聴解練習問題集』専門教育出版
宮城幸枝・三井昭子・牧野恵子・柴田正子・太田淑子（2000）『初級日本語聴解練習 毎日の聞きとり50日上』凡人社

文化外国語専門学校（2013）『楽しく聞こうI』凡人社

平井悦子・三輪さち子（2006）『中級へ行こう』スリーエーネットワーク

平井悦子・三輪さち子（2014）『中級を学ぼう』スリーエーネットワーク

牧野昭子・田中よね・北川逸子（2015）『みんなの日本語初級I 聴解タスク25』スリーエーネットワーク

河口さち子・桐生新子・杉村和枝・根本牧・原田明子（2003）『上級の力をつける聴解ストラテジー 上巻』凡人社

河口さち子・桐生新子・杉村和枝・根本牧・原田明子（2003）『上級の力をつける聴解ストラテジー 下巻』凡人社

新 JLPT 研究会 松岡龍美・青山美佳・谷誠司・TAK 日本語能力試験研究会・金昭雄・長谷川由美（2010）『日本語能力試験模試と対策 N2』アスク出版

年 報 編 (2015年4月～2016年3月)

1. 日本語研修コース	53
2. 日本語・日本文化研修コース	67
3. 日本社会文化プログラム	70
4. 全学共通教育	72
5. 留学生指導	73
6. 留学生センター年間行事	82
7. 留学生センター交流ラウンジの利用について	100

資 料

岐阜大学外国人留学生数	102
-------------------	-----

1. 日本語研修コース

1.1 集中コース：第38期（2015年4月～9月）

1.1.1 スケジュール及び受講者

- 4月9日（木）開講式
- 4月10日（金）授業開始
- 7月30日（木）授業終了

日本語研修コース第38期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、国費研究留学生1名と学内公募による留学生20名（うち研究生12名、大学院修士課程2名、大学院博士課程1名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）5名）、及び留学生センター所属の留学生10名（うち日本社会文化プログラム6名、日本語・日本文化研修コース4名）の計31名が受講することになった。

プレースメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が4名、Bクラス（初中級レベル）が8名、Cクラス（中級レベル）が7名、Dクラス（中上級レベル）が12名となった。

1.1.2 各クラスの時間割と受講者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 A [石井]	総合日本語 A [吉成]	総合日本語 A [富田]	総合日本語 A [野原]	口頭表現 A [田辺]
2	総合日本語 A [吉成]	総合日本語 A [六郷]	総合日本語 A [石井]	総合日本語 A [田辺]	総合日本語 A [田辺]
3	総合日本語 A [野原]	文章表現 A [吉成]		総合日本語 A [村田]	
4	パソコン演習 [野原]				

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人から母国で日本語を学習したことがある人までの計4名（国費研究留学生1名、学内公募の研究生3名）が受講した。受講者の国籍は、ガーナ、エジプト、ネパール、中国であった。「総合日本語A」では7名の教員によるチーム・ティー

チングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。学生には授業外での予習・復習を求め、学習した文法項目の理解度を確認するための文法復習テストを6回実施した。また技能科目として、まとまった文章を書くための作文のクラス「文章表現A」、日常会話を学ぶ「口頭表現A」、コンピューターの基本操作（日本語入力の仕方、インターネットを使用した自律学習法、発表用ソフトの利用など）を学ぶ「パソコン演習」の授業がある。

今学期は少人数クラスであったので、一人ひとりの対応がしやすく、多国籍でもあったため、人数が少なくても様々な意見交換などができた。残念ながら学期終了3週間前に、学生の一人が一身上の都合で帰国することになり修了できなかった。文章表現Aとパソコン演習のクラスが連携し、学期末に行われる「プレゼンテーション発表会」では3名だけの発表となってしまったが、それぞれの「国の行事」を紹介する内容で、発表会に参加してくれた他クラスの学生からの質問やコメントなども得られ、充実した発表会となった。

[B クラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [富田]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [六郷]	総合日本語B [橋本]
2	聴解演習B [富田]	口頭表現演習BC [橋本]		口頭表現B [六郷]	文章理解B [村田]
3				文章表現B [三輪]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルの受講生8名であった。日本社会文化プログラム学生1名（アメリカ）、協定校からの交換留学生2名（オーストラリア2）、学内公募の研究生5名（中国5）であった。9月の修了判定の結果、修了規定を満たさなかった1名をのぞき6名が修了し、1名（日本社会文化プログラム学生）が単位を取得した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、初級文法を正確に使いこなすことを目標としながら、Bクラス終了時に中級前半レベルに達することを目標とした。

Bクラスでは、前半で『中級へ行こう』をベースに初級文法の復習と運用練習を行ない、

後半で『中級を学ぼう 中級前期』（スリーエーネットワーク）をベースに中級レベルの文法を学習した。総合日本語 B では、この 2 冊の文法練習を扱い、本文読解は文章理解 B、作文の部分は文章表現 B で扱った。また、文章表現 B では、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現 B と、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現 BC を設けた。口頭表現 BC は本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

このクラスは初級後半までの文法項目を再度学習し、正確に使いこなすことを目標としているが、今期の学生はスタートの時点で初級後半の文法項目が十分身につけていない学生が多く、「再度学習」ではなく、ほぼ初めてといってもよい項目を、少し早めのスピードで学習したため、伸びがほとんど見られない学生が見られた。また先学期に日本語研修コース全体のレベル設定を見直し、B クラスでは中級前半レベルを最終目標に設定したことにより、初中級の教科書と中級前半の教科書の 2 冊を半期で学習する内容になっているが、進度が早く学習項目も多いため、授業内容が身につかないまま半期を終えてしまう学生も多かった。コース全体における B クラスの位置づけをもう一度考える必要がある。

[C クラス]

時間割：総合日本語 C は必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 C [吉成]	総合日本語 C [六郷]	総合日本語 C [石井]	総合日本語 C [吉成]	
2	聴解演習 C [石井]	口頭表現演習 BC [橋本]	文章表現 C [城戸]	文章理解 C [野原]	
3	漢字・語彙 [吉成]	総合日本語 C [橋本]		口頭表現 C [田辺]	

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（C クラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者 7 名（日本社会文化プログラム学生 3 名、学内公募の博士課程学生 1 名、研究生 3 名）、国籍は中国（3）、アメリカ（2）、モンゴル、インドネシアであった。

「総合日本語 C」の火・水・木曜日の 3 コマで『中級を学ぼう（中級中期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら、中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。課毎にテーマを決めた文法項目を学ぶ時間も設けた。メ

インテキスト終了後、担当者毎に活動のテーマ（長文読解、ディベートなど）を決めて授業を進めた。毎週火曜日は文法の時間とし、日本語能力試験 N2 程度の文法項目を学ぶ時間とした。毎週月曜日は日本人学生との合同授業で言語学の基礎知識を学びながら、「読む・聞く・話す・書く」活動を通して日本語力を高める演習の時間とした。技能科目として 6 科目が用意され、少なくとも 5 科目を選択することになる。

残念ながら 2 名が成績不良で修了することができなかった。彼らの日本語レベルがこのクラスにあっていなかったというよりも、まじめに日本語学習に取り組む姿勢（授業態度、宿題提出状況等）に問題があったように思う。コミュニケーションをとるといふ点ではあまり問題はないが、正しい日本語で書いたり話したりすること、聞いて読んで、きちんと理解することができていなかった。学期初めのクラスガイダンスでは、到達目標や日本語を学ぶ目的などを話すが、学期途中でも繰り返し説明し、意識させる必要があるように思われた。日本語を学ぶ目的や意志を確認する指導も今後は考えていきたい。

[D クラス]

時間割：総合日本語 D は必修、技能科目は選択。合計 7 科目必修

	月	火	水	木	金
1		総合日本語 D [加藤]	聴解演習 D [城戸]		総合日本語 D [村田]
2	総合日本語 D [河合]			総合日本語 D [村田]	口頭表現 D [橋本]
4	文章理解 D [太田]				

D クラス受講者には日研究生が含まれるが、日研究生は上記科目以外に日研究生専用科目を受講する（第 2 章参照）。

授業報告（D クラス担任：土谷）

本学期の D クラス受講者は、12 名（日本語・日本文化研修留学生 4 名、日本社会文化プログラム学生 2 名、協定校からの学部所属の交換留学生 3 名、学内公募の研究生 2 名、同修士課程学生 1 名）で、国籍は、アゼルバイジャン、オーストラリア、韓国（3）、スウェーデン（2）、中国（5）であった。日本語・日本文化研修留学生（以下日研究生）は、秋学期に D クラスを履修し、春学期は全学共通教育科目等を履修するのが理想だが、今期（14 期）日研究生は 4 名が C クラスから始めていたため、4 名が本学期 D クラス所属となった。

本学期の最大の反省点は、クラス担任が担当授業の関係で総合 D に入らなかったことである。上記日研究生を含むクラスの大半の学生の学習が非常に低調で、試験では目を疑う

点数を取る者が複数名いたが、クラス担任が学生たちと直接接して状況を見つめることができなかった。学習意欲の高いクラスであれば担任が入らなくとも運営に支障はないが、本学期は上記日研生4名中3名が同コースを修了できなかったことが象徴するように、学習意欲も態度も低迷した。もちろん真面目に学習に取り組む学生もいたが、彼らにとっては学ぶものが少ない授業で、果たして教室に来ることに十分意味があったのだろうかと反省するばかりである。今後は、クラス担任は必ず総合Dに入り、責任を持って全学生に十分目配りをすべきであると猛省している。

留学生センター主催の日本文化ワークショップを今年度春学期にも2回開催し（5月13日（水）郡上踊りワークショップ、7月15日（水）能楽ワークショップ）、それらを授業の振替として学生に参加を促した。両ワークショップについては、p.83、p.85を参照されたい。

1.2 一般コース

4月10日（金） 授業開始

7月30日（木） 授業終了

[科目名と受講者]

クラス名(レベル)	科目名	受講者数
一般 A 1 (入門)	総合日本語 A 1	10
一般 B (初中級)	総合日本語 B	8
	聴解演習 B	
	文章理解 B	
一般 C (中級)	総合日本語 C (演習)	4
	総合日本語 C (文法)	
	聴解演習 C	
	文章理解 C	
	漢字	

[時間割]

		月	火	水	木	金
1	一般 A 1					
	一般 B			総合 B [橋本]	総合 B [六郷]	総合 B [橋本]
	一般 C	総合 C (演習) [吉成]				
2	一般 A 1		総合 A 1 [加藤]	総合 A 1 [富田]	総合 A 1 [三輪]	
	一般 B	聴解演習 B [富田]				文章理解 B [村田]
	一般 C	聴解演習 C [石井]			文章理解 C [野原]	
3	一般 A 1	総合 A 1 [河合]				
	一般 B					
	一般 C	漢字・語彙 [吉成]	総合 C (文法) [橋本]			

授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、未習（A1）、初中級（B）、中級（C）の3レベルを設定している。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多かった。以前は『みんなの日本語 初級I』（スリーエーネットワーク）を使用していたが、文法項目数、語彙数が多かったため、先学期から『学ぼう！にほんご初級1』（専門教育出版）を使用し、学習項目を少なくして授業を行なっているが、文法積み上げの授業形式では、授業に出られなかったときに学習した文法項目がわからないまま新しい項目を学習することになり、ついていけなくなる学生が出てきてしまう。また、クラスの最初に文字導入を行なうが、この時点で文字が身につかなかった学生もあり、授業で使用される文字が学習の妨げになってしまい、授業についていけなくなる学生が出てきてしまう。このように、一般A1クラス（未習）を受講する学生を考えると、従来の方法ではうまくいかないので、根本的に進め方を変える必要があると考えられる。

初中級クラス、中級クラスは、集中コースの授業から総合日本語、技能クラスの一部を受講する。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

1.3 集中コース：第39期（2015年10月～2016年3月）

1.3.1 スケジュール及び受講者

- 10月9日（金） 開講式
- 10月13日（火） 授業開始
- 12月26日（土）～1月5日（火） 冬季休暇
- 2月10日（水） 授業終了

日本語研修コース第39期は従来と同様、初級から中上級の4レベルのクラスを開講した。ここに、国費教員研修生1名、日韓共同理工系学部留学生1名と学内公募による留学生30名（うち研究生25名、大学院博士課程2名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）3名）、及び留学生センター所属の留学生13名（うち日本語・日本文化研修コース10名、日本社会文化プログラム3名）の計45名が受講することになった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、Aクラス（初級レベル）が9名、Bクラス（初中級レベル）が9名、Cクラス（中級レベル）が13名、Dクラス（中上級レベル）が14名となった。ただし、これらのクラス人数はクラス分け当初の人数であり、学期が始まってから、クラスの変更や、集中から一般へコースを変更するものもいた。

1.3.2 各クラスの時間割と受講者・授業報告

[Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 A [田辺]	総合日本語 A [吉成]	総合日本語 A [野原]	総合日本語 A [三輪]	口頭表現 A [田辺]
2	総合日本語 A [野原]	総合日本語 A [六郷]	総合日本語 A [富田]	総合日本語 A [六郷]	総合日本語 A [田辺]
3	総合日本語 A [石井]	文章表現 A [吉成]		総合日本語 A [村田]	
4	パソコン演習 [野原]				

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人や母国で日本語を学習したことがある人など、学習経験は異なるが初級学習者でまとめられる9名（教員研修生1名、学内公募の研究生8名）が受講した。受講生の国籍は中国（4）、インドネシア（2）、バングラデシュ（2）、ガテマラ

であった。ただし、学期当初は9名が集中 A クラスで学んでいたが、授業内容についていけず、本人や指導教員と相談した結果、ゆっくり学べる一般 A1 クラスに移った者が3名おり、最終的には6名のクラスとなった。

「総合日本語 A」では8名の教員によるティーム・ティーチングによって授業が進められ、日本語初級文法を学ぶ。今学期から『みんなの日本語 I・II 第二版』（スリーエーネットワーク）を使用し始めた。語彙や文法項目の提出順などの細かい変更があり、絵カード使用で苦勞することもあったが、CD-ROM 版の使用でも問題はなかった。教室にはパソコンやプロジェクター、ビデオデッキなどいつでも使えるようにしているため、CD-ROM 版の使用に伴い、パワーポイント等のプレゼンテーションツールを使用した授業が行なわれる機会も増えた。

今学期は学生の習得状況や様子を見て考えさせられることが多かった。まず、学期始めにクラス移動した3名だが、特になかな文字習得に遅れが見られ、うち二人が自ら、文字学習を行わない一般 A1 クラスへの移動を願い出てきた。個別の文字習得状況は初級クラスで最初に差が見られる点であるため、自学学習を中心にサポートをしてきたつもりであったが、足りなかったのだろうか。来学期は授業内での文字学習に時間をかけ、フォローできればと考えている。また授業スピードについても学生のレベルに合わせて対応していく必要があったように思う。全員が大学院入試を控えている学生であり、その準備と日本語学習の時間との調整に苦勞しているようであった。テストの成績がふるわない学生には補講時間を設けて対応し、無事修了できたが、授業時間内で対応できるような授業計画や指導方法が必要であろう。恒例となっている学期末に行われるプレゼンテーション発表会では、発表内容はよかったのだが、発音が悪く、聞き取りづらいことがあった。日々の授業での発音や音読の練習の必要性を感じた。来学期からは以上の点も踏まえ、様々な課題に取り組んで行きたいと考えている。

[B クラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 B [富田]	総合日本語 B [橋本]	総合日本語 B [橋本]	総合日本語 B [六郷]	総合日本語 B [橋本]
2	聴解演習 B [富田]	口頭表現演習 BC [橋本]		文章表現 B [三輪]	文章理解 B [河合]
3	口頭表現 B [野原]				

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

今期のBクラスは初中級レベルの受講生9名（日本社会文化プログラム学生3名、学内公募の研究生4名、博士課程学生2名、）であった。受講生の国籍は、中国（4）、タイ（2）、インドネシア（2）、アメリカ（1）であった。2月の修了判定会議の結果、6名が修了し、3名（日本社会文化プログラム学生）が単位を取得した。

このコースでは、プレイスメントテストの結果から、初級を終了していると判断できる学生をBクラスとするのであるが、最近、未習者ではないが初級を十分学習していない学生が集中コースを希望することが多くなった。未習で始まる集中Aクラスの後半に相当するレベルであり、Aクラスに入るには学習が進んでいるが、従来のBクラスでは未習項目が多くなってしまおうというレベルの学生が増えているのである。

コース全体の日本語レベルを見直し、Bクラスでは初級終了から中級前半までを学習目標としてクラスを進めてきたが、初級後半の項目を十分身につけていない学生が増えたこともあり、中級前半の学習項目を十分身につけないままクラスを終える学生も多いという状況が続いている。そのため、Bクラスは、クラス開始時のレベル設定、クラス終了時の目標レベルを再考する必要がある。

そこで今期は、クラスの前半で初級後半の文法項目を復習（未習項目である可能性もあるが）してから、初中級の文法項目を学習することにした。また、目標レベルを中級前半までではなく、初中級レベルに設定し、進度と学習内容を抑えることにした。

Bクラスでは、前半で『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。総合日本語Bでは文法練習を扱い、本文読解は文章理解B、作文の部分は文章表現Bで扱った。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

初級後半の復習を行なったことにより、初中級レベルの内容に対する理解は高まったように思われるが、その理解が定着するところまで学習を進めることができず、日本語能力の大きな伸びが見られる学生が少なかった。応用的な練習が十分できなかったことも要因のひとつである。また、文法項目を学習する際に使用する語彙を限定するなど理解を促すための方法を探したが、そのことが逆に語彙の増加を抑制することにもなってしまった。進め方をもう一度考える必要がある。

[C クラス]

時間割：総合日本語 C は必修、技能科目は選択。合計10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 C [吉成]	総合日本語 C [六郷]	総合日本語 C [吉成]		総合日本語 C [石井]
2	口頭表現 C [田辺]	口頭表現演習 BC [橋本]	文章理解 C [野原]	文章表現 C [土谷]	聴解演習 C [石井]
3	漢字・語彙 [吉成]	総合日本語 C [加藤]		文化 [森田]	
4					

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Cクラス担任：吉成）

中級前期レベルの学習者13名（うち日韓共同理工系学部留学生1名、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）2名、学内公募の研究生10名）が受講した。受講者の国籍は中国（10）、オーストラリア（2）、韓国であった。プレースメントテストの結果より、中級前期レベルといっても例年よりは全体的に低いことはわかっていたので、各科目での授業内容のレベルを下げる、授業進度を遅くする等の工夫を行なった。例えば、授業科目やスケジュールは前学期とほぼ同様であったが、「総合日本語 C」の火・水・金曜日1限の3コマで行なう『中級を学ぼう（中級中期）』（スリーエーネットワーク）の授業では、文型導入・練習に時間を多く取る、本文内容理解のための補助教材を作成するなどした。

結果として、クラス全体の日本語能力の向上はあまり見られない残念な結果となった。成績不良で修了できなかった者が3名、学期途中で帰国し、コースを途中放棄した者が2名おり、その他学生の成績もあまりいいものではなかった。宿題を必ず期日に出す、予習復習をするなどの基本的な学習態度ができていない者が多かった。また試験の成績はよくても会話のやりとりができないなど、総合的な日本語力の伸びが感じられなかった。中級クラスの学生は国で日本語を学んできている学生であるが、文字語彙・初級文法などの基礎ができていないことが目立っていた。学期が始まってからでも学生の日本語レベルにあった適切なクラスへの移動や、復習の時間を多く設けるなどの工夫を今後は行なっていきたい。

[D クラス]

時間割：総合日本語 D は必修、技能科目は選択。合計 7 科目必修

	月	火	水	木	金
1		総合日本語 D [土谷]	総合日本語 D [城戸]	総合日本語 D [土谷]	総合日本語 D [河合]
2			聴解演習 D [城戸]	文章表現 D [村田]	口頭表現 D [橋本]
3				文化 [森田]	
4		文章理解 D [加藤]			

D クラス受講者には日研究生が含まれるが、日研究生は上記科目以外に日研究生専用科目を受講する（第 2 章参照）。

授業報告（D クラス担任：土谷）

本学期の D クラス受講者は、当初 14 名（日本語・日本文化研修留学生 10 名、協定校からの学部所属の交換留学生 1 名、学内公募の研究生 3 名）で、国籍は、インドネシア、オーストラリア、韓国、スウェーデン（2）、タイ、中国（6）、ニュージーランド、フランスであった（途中で体調不良のため、研究生（中国）1 名が履修放棄したため、修了したのは 13 名である）。

本学期の D クラスは、稀に見る素晴らしいクラスであった。その大きな要因は、クラスの大半を占めた 10 名の日本語・日本文化研修留学生（以下日研究生）が、日本語力には濃淡があるものの、学習態度や協調性、積極性が高いレベルで粒揃いであったことである。自分の意見は言うが他の人の意見もきちんと聞くという、ある意味「大人」な学生が揃っていたと思う。前回の日研究生に問題が多かったため、余計に今回の日研究生の良さが心に染み込んだのかもしれない。彼らからの良い影響が他の 3 名の学生にも波及した。

概ね良好な D クラスであったが、小さな混乱があった。筆記試験を 3 回実施するが、初回試験で思ったように答案が書けなかった学生が若干パニックになり教員やクラスメートを驚かせたり、技能クラスの最終試験を連絡なく病欠した学生（研究生）の状況把握と救済措置で手間取ったりといった混乱である。後者からは、学部の指導教員が留学生センターの日本語研修コースについて誤った認識を持っていることが図らずも明るみに出た。この問題は D クラスに限ったことではないため、どう対応するか（もしくはしないのか、できるのか）を、腰を据えて考える必要がある。

1.4 一般コース

10月13日（火） 授業開始

12月26日（土）～ 1月5日（火） 冬季休暇

2月10日（水） 授業終了

[科目名と受講者]

クラス名(レベル)	科目名	受講者数
一般 A1 (入門)	総合日本語 A 1	10
一般 B (初中級)	総合日本語 B	8
	聴解演習 B	
	文章理解 B	
一般 C (中級)	総合日本語 C (演習)	9
	総合日本語 C (文法)	
	聴解演習 C	
	文章理解 C	
	漢字・語彙	

[時間割]

	月	火	水	木	金	
1	一般 A 1			総合 A 1 [富田]	総合 A 1 [村田]	
	一般 B			総合 B [橋本]	総合 B [六郷]	総合 B [橋本]
	一般 C	総合 C (演習) [吉成]				
2	一般 A 1	総合 A 1 [石井]	総合 A 1 [加藤]			
	一般 B	聴解演習 B [富田]				文章理解 B [河合]
	一般 C			文章理解 C [野原]		聴解演習 C [石井]
3	一般 C	漢字・語彙 [吉成]	総合 C (文法) [加藤]			

授業報告

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、初級、初中級、中級の3レベルを設定している。初級レベルについては初級前半、初級後半の2レベルを設定してきたが、初級後半レベルの受講希望がほと

んどないため、今期から未習者対象で継続学習をしない（終了後に次のレベルに進まず、半期で学習を終了する）クラスを一般 A1 として開講した。初中級（B）、中級（C）は、集中コースの一部を受講する。

[一般 A1 クラスの試み]

一般 A1 クラスを受講する学生は研究等で十分学習時間の取れない学生や特定の時間しか参加できない学生が多いため、学習項目を減らすなどの変更を行ってきたが、最初のひらがな学習でつまずき、ひらがなの読み書きが負担となって授業が十分理解できない学生が多いという問題がずっとあった。また、一般 A1 クラスは文法積み上げでの学習を行ってきたが、研究等で十分学習時間の取れない学生は既習項目が十分身につかないまま新しい文法を学ぶことになり、結果十分理解できなかつたり、途中で受講をやめてしまう学生がいたりした。

そこで今期は新たな方法を採用することにした。ひとつは文字導入を行わず、教材にローマ字を併記しているものを使用することにより、文字学習をせずに学習を進めてみることにした。また、文法積み上げではなく、機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結するような進め方を試みることにした。この2つの試みに合った教材を検討していたところ、『にほんごではなしましょう』（らんぐ）という教科書の存在を知った。この教科書は「ローマ字併記」「絵の多用」「文法の難易度にあまりとらわれず、日常生活でよくある場面ですぐに役立つ会話表現」という3つの特徴を持っており、今回の試みに適していると判断し、この教科書を使用することにした。この教科書には英語などの言語別の翻訳本が別にあるので、この本を教科書とともに使い、単語や例文の翻訳を確認しながら授業を進めることにした。

一般 A1 クラスの受講生は13名であったが、全員最後の授業まで学習を続けた。半数近い学生が途中で受講をやめてしまうのがこれまでの状況であったが、一人の脱落もなかったのは一般コースでは例のないことであった。学期末に行なったアンケートでも学生から高評価を得た。文字学習をしないこと、文法積み上げではないこと、等が一般コースの学生に合っていたと考えられる。今後もしばらくこの形で授業を進めていくこととした。

2. 日本語・日本文化研修コース

2.1 第14期（2014年10月～2015年8月）概要

第14期生は下記のように、大使館推薦の国費留学生4名（アゼルバイジャン・アゼルバイジャン言語大学、ベトナム・フエ外国語大学、スリランカ・サバラガムワ大学、ベトナム・ダナン外国語大学）、大学推薦の国費留学生4名（オーストラリア・シドニー大学、スウェーデン・ルンド大学、タイ・カセサート大学、中国・広西大学）、私費留学生2名（各大学との学術交流協定による交換数の枠内で、スウェーデン・ルンド大学、韓国・木浦大学）の合計10名だった。

第14期 履修／修了生（アルファベット順）

ボーデン, アレックサンダ (Boden, Alexander William John)	オーストラリア・シドニー大学
ブイ, ユン・ティ・ビック (Bui, Dung Thi Bich)	ベトナム・フエ外国語大学
ジャヤセーカラ, カヴィンドラ・ガヤンギ (Jayasekara, Kavindra Gayangi)	スリランカ・サバラガムワ大学
金 良宣 (Kim, Yangseon)	韓国・木浦大学
レ, チャム・ティ・トウイ (Le, Tram Thi Bich)	ベトナム・ダナン外国語大学
プラソムスィー, ハタイチャノック (Prasomsri, Hataichanok)	タイ・カセサート大学
鍾 佩容 (Zhong, Peirong)	中国・広西大学

第14期 受講生（アルファベット順）

アンデルソン, トム・カールホーン (Andersson, Tom Karlhoon)	スウェーデン・ルンド大学
アイダエワ, ザリファ・カムラン (Aydayeva, Zarifa Kamran)	アゼルバイジャン・アゼルバイジャン言語大学
モハマデディ, ファーボッド (Mohammadi, Farbod)	スウェーデン・ルンド大学

約1年におよぶ期間中、学生たちは、前半の秋学期に日本語と日本文化の科目を集中的に学び、後半の春学期には日本語と日本文化の授業に加えて、日本人学生と一緒に全学共通教育で開講されている授業を履修した。さらに、郡上八幡文化体験、郡上踊りワークショップ、美濃小倉太鼓体験、能楽鑑賞、大相撲観戦、陶芸実作、茶道実習など、伝統的な日本文化に触れる機会を数多く持った。

2.2 論文作成と発表会

本学日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることである。第14期生たちは、秋学期を終えて後半の春学期になると、それぞれの興味・関心にしがってテーマを設定し、指導教員のもとで論文の作成に励んだ。論文を完成できたのは上記の履修／修了生7名だが、それぞれ日本文化に独自の視点で切り込み、期待以上の出来栄であった。

論文提出後の8月2日には、今期生で9回目を数える「留学生は“日本”をどう見たか」と題する研究成果発表会を開催した（共催：岐阜市立図書館）。今回もJR岐阜駅近くの本学サテライトキャンパスで行ったが、猛暑のさなか、本学関係者のほか多数の市民の参加もあり、充実した発表会となった（学生たちにとっては緊張に震える一時だが、この山を越えると、学生たちには「解放」された、名残り惜しくもある時間が訪れる）。

論文テーマと指導教員

ボーデン, アレックサンダ (Boden, Alexander William John)

オーストラリア・シドニー大学

「和牛とWAGYUの行方—なぜWAGYUが日本で売られていないのか—」

(指導教員：森田晃一)

ブイ, ユン・ティ・ビック (Bui, Dung Thi Bich)

ベトナム・フエ外国語大学

「日本におけるベトナム留学生の現状」

(指導教員：土谷桃子)

ジャヤセーカラ, カヴィンドラ・ガヤンギ (Jayasekara, Kavindra Gayangi)

スリランカ・サバラガムワ大学

「小学生に対する英語教育—スリランカと日本の比較—」

(指導教員：土谷桃子)

金 良宣 (Kim, Yangseon)

韓国・木浦大学

「[日帝強占]期における芸術家と「親日派」の関係—舞踊家・崔承喜を中心に—」

(指導教員：森田晃一)

レ, チャム・ティ・トゥイ (Le, Tram Thi Bich)

ベトナム・ダナン外国語大学

「日本酒から見えてくる日本文化」

(指導教員：土谷桃子)

プラソムスィー, ハタイチャノック (Prasomsri, Hataichanok) タイ・カセサート大学

「日本とタイの特別支援教育—小学校における知的障がい者への教育を中心に—」

(指導教員：森田晃一)

鍾 佩容 (Zhong, Peirong)

中国・広西大学

「ハンカチ—中日におけるハンカチの使用現状を中心に—」

(指導教員：土谷桃子)

2.3 履修科目

履修科目については以下の通りである（このほかに選択科目もある）。

必修授業科目、1週間あたりのコマ数（単位数） 1コマ=90分

授業科目	秋期	春期	合計
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)
全学共通教育科目	—	2 (4)	2 (4)
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語発音・口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語聴解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
現代日本の社会	1 (2)	—	1 (2)
近代化と日本人	1 (2)	—	1 (2)
クロスカルチャー コミュニケーション	1 (2)	—	1 (2)
日本の表象文化	1 (2)	—	1 (2)
岐阜の地域文化	—	1 (2)	1 (2)
論文指導	—	1 (1)	1 (1)
修了論文	—	(4)	(4)
合計	12 (19)	9 (21)	21 (40)

3. 日本社会文化プログラム

3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を留学生センターで受入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行なうために開講したプログラムである。2007年度に開講し、2015年度は第17期となる。本プログラムは各学生のレベルに合わせた5つのコースを設けている（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース1、日本社会文化コース2）。

3.1.1 第16期（2014年度後期～2015年度前期）

2014年度後期に第16期の4名を迎えた。4名とも留学期間は1年間である。

4名のうち2名は異文化理解コース2と日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。もう1名異文化理解コース1と異文化理解コース2を受講したが、コース2は所定の単位を取得できなかった。また1名は自国での事情により2015年4月以降に留学を継続することができなくなり、半年間の留学期間で帰国した。

ディアス ジョナサン	アメリカ	サンディエゴ州立大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了
ボーン カーシー クリスティン	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	異文化理解コース2、 日本文化入門コース修了
ヒューズ マロリーニコル	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	異文化理解コース1修了

3.1.2 第17期（2015年度前期～2015年度後期）

2015年度前期に第17期の3名を迎えた。うち2名は留学期間1年間、1名は半年間である。

1名は日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。

2名は日本社会文化コース1、2を受講し、所定の単位を取得した。この2名は、留学期間中に岐阜県高山市のインターンシップに参加し、2016年2月に開催されたフォーラム「地域と岐大留学生」でインターンシップでの経験を日本語で報告した。

レイ コウガン	中国	江南大学	日本文化入門コース修了
エン ウサン	中国	江南大学	日本社会文化コース1、2修了

ゴ ゲン	中国	電子科技大学	日本社会文化コース1, 2 修了
------	----	--------	------------------

3.2 社会文化プログラム専用科目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2015年度前期の「日本文化へのいざない」は、本学客員教授で、茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いした。茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

4. 全学共通教育

4.1 概要

留学生センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

4.2 2015年度 前学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及 日本事情 科目	日本語 D I—文章表現—	月 3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本語 D III—聴解—	火 2	土谷	日本語・日本文化研修生、日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情 C I	火 3	森田	
	日本事情 A I	火 4	森田	
人文科学 科目	言語学入門—日本語学入門—	月 1	吉成	日本語研修コース集中・一般 C クラスも受講
	日本語口頭表現	火 2	橋本	日本語研修コース集中 B・C クラスも受講
	異文化論—年中行事（人の一年）に見る世界の諸地域—	火 3	森田	日本事情 C I と同時開講
	日本近世史—近世都市史—	水 2	森田	

4.3 2015年度 後学期

科目	授 業 名	時間	担当	備 考
日本語及 日本事情 科目	日本語 D II—文章表現—	月 3	土谷	
	クロス・カルチャー・コミュニケーション	火 2	太田	日本語・日本文化研修生も受講
	日本事情 C II	火 3	森田	
	日本事情 A II	火 4	森田	
人文科学 科目	言語学入門—日本語学入門—	月 1	吉成	日本語研修コース集中・一般 C クラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月 2	土谷	
	異文化論—多文化関係論—	火 2	太田	クロス・カルチャー・コミュニケーションと同時開講
	日本語口頭表現	火 2	橋本	日本語研修コース集中 B・C クラスも受講
	異文化論—通過儀礼（人の一生）に見る世界の諸地域—	火 3	森田	日本事情 C II と同時開講
	日本近世史—近世文化史—	火 2	森田	

5. 留学生指導

本稿では2015年4月から2016年3月までの1年間に留学生指導部門が行なった主な活動をまとめ、以下に報告する。

5.1 留学生に対する指導・相談活動

5.1.1 指導部門の体制

後述する相談には、留学生指導担当教員及び技術補佐員の二人で対応した。メールや電話で予約済みの学生以外は、相談の内容によってどちらが対応するかを、留学生センターに入って最初に出会う技術補佐員に判断してもらうという方法をとった。大きな問題が起こった時は二人で面談し、相談内容や事柄によっては相談者の指導教員、関連部署の担当者、留学生支援室職員等にも協力を仰ぎながら問題の解決に当たった。

留学生・日本人学生とも予約なしに各自の都合で来室するケースは今年度も変わらず、相談者に合わせて適宜対応した。今期の相談内容別件数・概要は以下の通りである。

5.1.2 相談の概要

5.1.2.1 相談件数とその内容

①留学生からの相談

(a) 学業関係 (113件)

授業・研究関係、単位の不足・未履修・留年・復学・研究室の変更等の学業問題・進学・復学・進路関係（学生との面談および科目担当者・指導教員・留学生支援室・学部事務との相談・連絡など）、大学院進学・受験関係（入試の手続き等についての問い合わせ・来訪、提出書類・研究計画書等の記入・記入方法の説明、文章のチェック、修了生からの進学関連の問い合わせ、専門分野の教員との面談、など）、日本語関係（オリエンテーション、全学共通教育・日本語研修コースの日本語の内容、プレイスメント・テストの日程、教室、時間割の問い合わせ、レベルの変更など）、研究室での諸問題、インターンシップ、資料提供、など

(b) 生活一般 (42件)

忘れ物対応、事故への対応、インターネット料金・停止、サマースクール生のサークル活動関係、イベント等の参加・手続き・連絡関係、など

(c) 経済問題 (13件)

授業料免除関係、奨学金関係（奨学金の種類・内容、決定の方法に関する質問、各奨学金への申請・手続き、など）、貸付制度の利用・返却手続き、アルバイト・求職、

など

(d) 住宅・住居問題（11件）

国際交流会館関係（入居・退去問題）、民間のアパート探しなどの問い合わせ・大家への連絡、留学生支援室会館担当者との話し合い、など

(e) 健康問題（5件）

健康診断関係、インフルエンザ、ケガ・病気付き添い、など

(f) 入管関係（15件）

一時帰国、資格外活動許可の申請者との面談・申請書の説明・記入・関係者との連絡など、ビザの更新、家族の呼び寄せ、など

(g) 市役所関係（6件）

外国人登録、国民健康保険加入手続き・保険料関係、マイナンバー関係（通知書の紛失）、など

(h) トラブルの相談（12件）

留学生の私的トラブルへの対応、人間関係・研究室のトラブル、サマスク生学外研到着時の遅延対応、など

②日本語研修生・日研生関係（55件）

来日時の説明・諸対応、各種オリエンテーション、勉学に関する諸問題、他大学大学院受験関係、進路・再留学関連、学研災加入手続き、病気・ケガ、病院引率・諸連絡、日本語能力試験について、弁論大会関係、パソコンの借用、アルバイト、イベント関係、など

③日本人学生からの相談（212件）

留学に関する全般的質問（サマースクールを含む）、協定校等への応募から出発・帰国後の勉学・進路等の相談、勉学計画書、トビタテ計画書等、留学中のメールでの諸相談、学業その他の相談、課外活動の運営・内容に関する諸相談、大学祭・各種イベント関係、サマースクール説明会・報告書関係、留学生の紹介依頼、チューター業務上の相談、広報関係（生協学生委員会、オープンキャンパス用冊子）、危機管理オリエンテーション関係、など

④大学内外関係（298件）

本学学部事務からの問い合わせ（留学生の受け入れに関する相談、大学協定・派遣関係、奨学金関係、一時金貸し付けについて、日本語コースの受講関連、など）、留学生の紹介、岐大OB・OG関係、危機管理マニュアル、ラウンジチューター関係、本学国際企画課からの相談・依頼（旅行命令簿の様式変更、業務分担、チューター業務、職員表彰、留学生センター長会議協議・照合関係、留学生センター長候補者選考、入

試用パンフ、ガイドブック校正、援助会支援関係、文化庁日本語実態調査、大学等訪問・来訪時の資料等準備、諸資料作成、イベント関係、サマースクール（受入・派遣）事務全般、チューター関係、インドネシア・オーストラリア等短期研修生（ガイドブック提供他）、広報関係、非常勤講師・岐阜大教職員からの相談、他大学からの問い合わせ・相談、新聞取材、大垣北高英文チェック関係、国際交流団体関係（岐阜市国際協会、中国語あそびサークル、岐阜県庁）、学研災関連（事故後の対応）、学研災（保険関係）、親からの留学相談、など

計 782件

5.1.2.2 相談の特徴

今年度多かった項目は、①大学内外関係、②日本人学生からの相談、③学業関係である。ここ数年の傾向であるが、留学生より日本人学生の来室が多い日もあり、留学生指導担当教員としては複雑な気持ちを味わうこともあった。メールによる相談も予想以上に多かった。減少した項目は入管関係、市役所関係、健康問題、住宅・居住問題、経済問題である。ビザの更新、再入国関係、国際交流会館関係などの諸手続きは国際企画課留学生支援係が担当しているため相談件数はごくわずかであった。関連部署に相談に行くよう、オリエンテーション時に説明していることが効果を挙げているものと思われる。以下、相談の特徴、課題等を簡単に記しておきたい。

①の大学内外関係の相談では、グローバル推進本部会議企画部門の委員としてイベントを企画・実施することが多かったため、連絡等が増加したことが要因として上げられる。技術補佐員は留学生センター主催の年間を通してのイベントに関与し、留学生指導担当教員は主に留学報告会（12月16日）、講演会（1月20日）、フォーラム（2月17日）に関与したが、企画・打ち合わせ・実施の過程で、学内外への依頼・相談等が生じたための増加である（会議そのものの件数は含んでいない。イベントの内容については、別項で記す）。国際企画課事務員の異動・変化、サマースクール（派遣）関連の依頼・相談、センター長会議、センター長選出関連での資料の準備・整理等の依頼も件数増加につながった。

②では、サマースクール及び短期留学に関する相談・帰国後の進路相談が大半を占め、全学部の日本人学生から留学に関する相談が寄せられた。しかし、例年との相違点はサマースクール参加者が多かった（グリフィス大25人、ソウル科技大2人）ためなのか、諸連絡の不徹底、応答の不備等のために、何度も連絡や確認をしなければならない事態が生じたことである。事前の語学研修や現地での出席率にも問題があり、帰国後も1ヶ月以上参加学生から連絡がなく、留学報告会での発表や報告書作成にも積極性が感じられないなど、例年とは違う状況に戸惑いを覚え、対応に時間を割いた割には、達成感を感じることがで

きなかった。

交換留学では、15年7月にはオーストラリア（シドニー工科大学）に2名、8月にはアメリカに4名（ウェストバージニア大学2名、ノーザンケンタッキー大学2名）が留学した。既述のように、サマースクールは計27名（オーストラリア25名、韓国2名）が参加した（後述）。

③学業関係では、休学中の留学生（元国費留学生）の復学関連の相談、大学院入試に関する相談、単位未履修・不足関連の相談が多かった。初めは関連部署の担当者に相談したものの、回答に納得できなかつたり、どうにか解決の道はないかと思つて再度センターに相談に来るといふケースが多かった。休学中の留学生とは昨年5月から相談が始まり、指導教員はじめ関係者との話し合い等にも参画して本年度から復学したものの、まだ問題が残っており相談を続けている。本人は自身の考えていることを聞いてほしいために、話にきているという状況である。時には関心のあることを文章にして届けてくることもあり、それに対する感想を求められることも多いが、なるべく本人の希望に沿うよう対応している。他方、指導教員とのトラブルにより大学院を修了できなかったことが原因で、授業料免除の申請ができず、経済面を含む相談を求めて来室した留学生もいた。指導教員は、留学生がこのような相談をしていることは知らないケースがほとんどである。

5.1.2.3 留学生相談部門としての活動

①新規渡日者に対するオリエンテーション

2015年4月の渡日者に対しては4月22日（水）に、10月の渡日者に対しては10月21日（水）に、日本語・英語、日本語・中国語による生活に関するオリエンテーションを実施した。中国語の通訳は留学生に依頼し、各学部事務の留学生担当者にも出席を呼びかけた。また、図書館、メディアセンターからも関連の説明があった。それぞれの必要に応じてどこに相談すればよいか部署や担当者を丁寧に説明し、ガイドブック等も渡しているため、近年混乱はおきておらず、各部署の分担・連携も取れている状態である。

日本語研修コース、日本語・日本文化研修コースのクラス別オリエンテーション、国際交流会館の到着時の説明及びオリエンテーションなども計画通り行なつた。また、本年度の国際交流会館の防火訓練は12月4日（金）に実施した。

②留学報告会

留学報告会「私達の留学の“真実”」を、今年度は工学部グローバル化推進室とも協議し、発表者を日本人に限定して12月16日（水）に実施した。例年通り、留学（スウェーデン：ルンド大学2名、アメリカ：ウェストバージニア州立大学2名、ノーザンケンタッキー大学1名、ドイツ：エルフルト大学1名）、サマースクール（オーストラリア：グリフィス

大学3名、韓国：ソウル科技大学1名）など、様々な方法により海外で学んだ留学体験者11名が、パワーポイント等を使いながら各自の留学体験を詳細に発表してくれた他、工学部から選抜された4名も加わった。工学部は一昨年より独自の留学報告会を実施しているが（10月28日実施）、その発表者の中から選抜された人たちであり、ハンガリー（パンノン大学）、韓国（慶北大学校）、ミャンマー（マンダレー大学）、イギリス（インペリアル・カレッジ・ロンドン）で研究を通して体験した事や感じた事を発表してくれた。しかし、特にサマースクールの発表者は事前にPPIなどのチェックをしておらず、チームワークも良くなかったため、聴衆に準備不足という印象を与えてしまうような有様だった。他方、受付・司会をしてくれる学生もなかなか決まらず、その任を全うしたとは言えない状態だったため、今年度のサマースクールに関しては参加者の選抜・指導等の面で多くの課題を残した。報告会の参加者は例年より少なく60名にとどまり、報告・質疑応答が終了した後に行う発表者との交流・質問の時間も、発表者だけが勝手に飲食しているような状況で、例年とは違って会の趣旨が徹底できなかった。

帰国した留学体験者が提出している報告書（留学の長所・短所、費用、語学レベル、出発までの流れ、留学先でのある一日、生活・活動環境、コメントなど）をまとめた小冊子と、工学部の留学報告書を参加者に配布した。

③派遣学生に対する事前研修、帰国学生との面談

今年度短期留学に出発した学生は6名（アメリカ4名、オーストラリア2名）であり、7月及び8月に1年間の留学に出発した。出発前には事務の担当者宮本氏とともに事前研修を実施した。危機管理セミナー（7月15日、後述）にも出席してもらって注意を促し、留学中にもメールで相談にのった他、月1回の報告書の提出時には、返信し、励ましの言葉を送り続けた。さらに、本年度帰国した学生全員と面談して、留学中の生活について聞き取りを行った。

④サマースクール説明会と事前研修

一昨年より実施されるようになった「留学フェア」（4月15日）には38人の参加があった。カレンダーの並びが悪かったため（29日が祝日）多くのイベントが同じ日に集中してしまい、昨年の参加者100人には遠く及ばなかったが、オーストラリアのグリフィス大学と韓国のソウル科学技術大学のサマースクールについて説明し、個別の質疑・相談等にも対応した。さらに4月22日（22人参加）、5月13日（17人参加）の両日に、グリフィス大学のみ説明会を実施した。昨年に続き5月中旬に説明会を行ったが、連休明けの落ち着いた時期に再度宣伝することができたため、今後も5月実施を恒例にするつもりである。前年の参加者が大勢かけつけて体験談を発表し、質問にも答えてくれたので参加者にとっては参考になり、よい交流ができたのではと感じている。

ソウル科学技術大学は定員が3名だったため AIMS のみで募集した。開催時期が学期中だったこともあり2名の参加にとどまった。しかし、韓国で MERS（中東呼吸器症候群）が発生したため、ソウル科技大にも何度か状況を確認、学生にも確認しながらの決定となった。木浦大学からは久々に通知があり募集をしたのだが、MERS のため開催自体が見送りとなった。

参加決定後、6月16日～7月17日までの5週間、週3回（火曜日、木曜日、金曜日、1回2時間）計15回にわたって英語研修を実施した。講師はソヨン ユンさん（シドニー工科大学からの交換留学生）、ヘレン ウー ラックさん（シドニー工科大学からの交換留学生）、パルムロース・ティム君（地域科学部研究生、日本語・日本文化研修コース修了生、ルンド大学卒業）、岩本理恵さん（教育学部4年、ノーザンケンタッキー大学へ留学）の4名に依頼した。語学研修のアンケートを巻末に付記したが、一般的に出席者が少なく（アンケートの提出も少なく）、課題を残す研修となった。

7月15日には講師（海外留学生安全対策協議会服部誠氏）を招いて長期・短期全参加者を対象に「危機管理オリエンテーション」を実施して出発に備えた。同日ソウル科技大学及びグリフィス大学のサマースクール参加者に対し、出発前オリエンテーションを実施した。当日は生協、事務、派遣担当教員の他、前年度の参加者にも来てもらい、全般にわたる諸連絡・アドバイス等を行った。

今年度のグリフィスサマースクのリーダーからは、到着時、一週間後と報告があり、その頻度で報告があるのかと期待したが、それ以降はなく、こちらからメールを出した。帰国後の簡単なメールの後には直接来室する学生もなかったため、召集をかける結果となった。

英語研修やグリフィス大学での出席率の悪さ、留学報告会で垣間見た問題点等に続き、報告書作成過程でも積極性のなさという類似の姿勢が窺え、例年にない課題を感じるサマースクとなった。関係者と共に学生の現状を直視し、参加人数や選考方法を考え、次年度に備えるために、2016年3月23日に1回目の会合を持った。

5.2 今期をふり返って

今期も多岐にわたる相談が寄せられたが、今年より活動を開始したグローバル推進本部会議の委員として、特に企画部門に関わったことにより、留学生センターとの共催によるイベントを多数実施したため、連絡・対応等々に予想以上の時間を割いた。3ヶ月連続で留学報告会、講演会、フォーラムを実施したため、後期は特に多忙を極めたが、講演会に日本語・日本文化研修コースの修了生ブレケル・オスカル氏を講師として迎えることができたことは、大きな喜びであった。

また、本年も数名の留学生の個人的な相談に長期間関わることになり、背後にある研究

室の問題や留学生の資質等を考えさせられることとなった。特に留学生の受入に関しては委員会等を通して地縁・血縁等による受入や専門性やその内容を考慮しない受入等の問題点を指摘し、改善をお願いしてただけに、問題の根の深さを感じている。

その一方で、上述したように、講師として修了生を迎えた他、卒業・修了した留学生たちの来訪やメール等による近況報告があったことは嬉しい出来事であった。就職して国内外で活躍している修了生の情報、修了生同士の結婚、子どもの誕生などの喜ばしいニュースを聞くこともできた。「芳名録」への記帳が増えていくのが楽しみである。

他方、多くの日本人学生との再会もあった。そのほとんどは留学や国際交流活動を巡って出会った学生達であるが、各分野で活躍している姿に接することができたことは大きな喜びであった。

上記のような個別の相談に加えて、留学フェア、サマスク（派遣）に関する一連の業務、ラウンジ行事（七夕まつり、新春パーティ）、ラウンジチューター関係、サマスク（受入）諸行事等多様な行事にも関わってきたため多忙な一年となったが、大きな問題が起こらなかったことは幸いだったと感じている。

最後に、留学生課課長補佐として、その後は技術補佐員として長年留学生センターと留学生に関わってこられた粥川美重子氏が退職されることになった。ここに改めて謝意を記しておきたい。

短期留学（サマースクール）事前研修アンケート集計結果 （グリフィス大学、ソウル科学技術大学等）

対象者（受講者）：27人

回収数：9人

回収率：33.3%（過去最低の数字）

1. 渡航先について

グリフィス大学 9人

2. 事前研修に参加した回数について

参加回数

1回2人、2回1人、5回2人、6回2人、9回1人、無記入1人

3. 参加できなかった理由（1で参加回数、3回以下の方）（該当者 3人）

㊐ 授業・ゼミ等があった 1人

- ⑥ サークル活動があった 1人
 ⑦ アルバイトがあった 2人
 ⑧ その他 1人 (ECC と市の英会話講座に行っていたため)
4. 研修の開催期間は？
 ① 適切 9人 ② 不適切 0
5. 研修時間は？
 ① 長い 3人 ② 短い 0 ③ ちょうど良い 6人
 ④ その他の意見 0
6. 講師について
 ① 良かった 8人
 ② あまり良くなかった 1人
7. 研修内容は？
 ① 良かった 9人
8. 事前研修は、有意義だったか？
 ① 有意義だった。 6人 ② 思わない。 3人
 a と回答された方で、意見があれば記入ください。(記入者数： 9人)
 ・英語を、ゲーム等を交えながら触れることができたから。
 ・ネイティブの留学生の方々と楽しくコミュニケーションが取れてよかった。
 ・英語を話す機会があって勉強になった。
 ・英語にずっと囲まれる環境に、少しは慣れることができたから。
 b と回答された方は、どうしてそう思うか具体的な意見があれば記入ください。
 ・参加できる日が全くなかった。
 ・日本人同士のペアワークだから。
 ・日本人のみの参加者構成だったので、必然的に日本語での会話が増えてしまったため。
9. 事前研修の必要性について
 ① 継続して行った方が良い 8人
 ② 実施しなくても良い (必要がない) 1人
 b と回答された方は、どうしてそう思うか具体的な意見をご記入ください。
 ・あれで英語力が伸びるとは思わなかったから。
10. サマースクールの実施にあたり、現行の開催大学以外で参加したい国や大学等について、希望や提案があれば記入してください。(記入者数： 1人)
 カナダ1人

11. 事前研修全体を通して、意見・提案等なんでも結構ですので記入してください。(記入者数： 6人)

- ・もう少し、日本人とではなく留学生の方と話すことができれば良いと思いました。
- ・グループを組むので、留学する人達と仲良くなれた。
- ・講師の人たちも良い人だったので、おもしろかった。
- ・リスニングやスピーキングなど実用的な力が身についたかなと思います。でも、結構日本語を使ってしまったので、英語を使うことに対して、もっと厳しくしておけば（自分に対して）良かったなと思いました。
- ・週3回も開いてもらえたので、予定が詰まっても行きやすかった。実際に英語を話すことの難しさを、オーストラリアへ行く前に肌で感じる事ができた。
- ・予定が詰まってもいけるスケジュール。英語のみに囲まれる環境に、少しでも慣れてよかった。

6. 留学生センター年間行事

留学生センターでは年間を通じ、様々な行事を行なってきた。2015年度（2015年4月～2016年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事（下線）内容について報告する。

2015年

4月

日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（4月9日）

日本語研修コース授業開始（4月10日）

5月

郡上踊りワークショップ（5月13日）

ノーザンケンタッキー大学（アメリカ）中村誠講師 来訪（5月29日）

6月

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）8週間コース受入開始（6月3日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）4週間コース受入開始（6月24日）

7月

ラウンジチューター企画“七夕まつり”（7月1日）

能楽ワークショップ（グローバル推進本部共催）（7月15日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）修了式及び歓送会（7月22日）

日本語研修コース授業終了（7月30日）

8月

日本語・日本文化研修留学生修了論文発表会（8月2日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月20日）

10月

シドニー工科大学（オーストラリア）尾辻恵美講師 来訪（10月7日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（10月9日）

日本語研修コース授業開始（10月13日）

11月

日本語・日本文化研修留学生 郡上エクスカーション（11月22日）

12月

ウィンタースクール日本語教育（12月9日～18日）

「十二単の着装と体験 ～日本の民俗衣装～」特別講義（グローバル推進本部共催）（12

月9日)

留学報告会「私達の留学の“真実”」(12月16日)

2016年

1月

ラウンジチューター企画 “日本のお正月” (1月14日)

講演会「日本茶に人生をかける」—スウェーデン人が語る日本茶の魅力— (講師：ブレケル・オスカル氏 (静岡県農林技術研究所茶業研究センター研修生・岐阜大学留学生センター第10期日本語・日本文化研修コース修了生) (グローバル推進本部との共催) (1月20日)

2月

日本語研修コース授業終了 (2月9日)

フォーラム「地域と岐大留学生」(グローバル推進本部・留学生センター主催、地域協学センター共催) (2月17日)

郡上明宝観光モニターツアー (2月23日)

岐阜大学活性化経費 (教育) 成果報告会 (2月24日) 【平成25年度募集分】

テーマ：日本文化 (郡上踊りと能楽) ワークショップ (平成25年5月14日、7月2日開催)

3月

カセサート大学 (タイ) (Kasetsart University, Thai) 訪問 (土谷桃子准教授) (3月1日～5日)

木浦大学 (韓国) 訪問 (森田晃一教授) (3月23日～26日)

6.1 郡上踊りワークショップ ～浴衣を着て郡上踊りをおどろう！～

このワークショップも、2015年度で4回目となり、留学生センターの恒例行事として定着した感がある。2013年度以降は7月に開催する「能楽ワークショップ」と合わせて「留学生と日本人学生のための日本文化ワークショップ (郡上踊りと能楽) ～踊って、謡って、体験して～」というシリーズで提供している (能楽ワークショップについては、85ページ参照)。サマースクール (受入) での郡上プログラムや、日本語・日本文化研修留学生の研修旅行などで密接な関係を築いている郡上市の、世界に誇る文化である郡上踊りを、今年度の学生も堪能した。

本ワークショップは、2015年5月13日 (水) 13:30～15:00、岐阜大学柳戸会館1階ホールにて開催した。開催に先立ち、希望者は12:30～13:30に浴衣の着付けをした。好きな浴

衣を選び、下駄の歩きにくさに驚いている留学生たちであった。日本語・日本文化研修留学生、日本社会文化プログラム学生、日本語研修コース履修生、工学部に短期訪問をしているマレーシアの協定校の学生等、総勢約50名が「かわさき」「春駒」の踊りの輪を作った。

講師には、郡上踊り口明方お囃子会会長遠藤光生氏をお願いした。遠藤氏は、郡上踊りで用いられる太鼓と三味線と笛もご持参くださり、学生たちは太鼓の試打の機会を得た。留学生参加者は希望すれば浴衣を着ることができたが、着付けについては今回も美濃市「せびあ会」にご協力いただいた。ワークショップの最後には、踊りの名手5名が選ばれ、講師から賞品を受け取った。また、全員に参加賞が渡された。

岐阜に留学したからこそ体験できる有意義で楽しいワークショップであるが、課題がないわけではない。まず、日本人学生の参加を期待しているが、非常に低調である。水曜日午後は各自のサークル活動やアルバイトに忙しかったり、大学内の他の行事と日程が重なったりすることが要因であろう。留学生センター単独では解決のしようがない問題である。

もう1点の問題点は、費用である。昨年度までは毎年度、岐阜大学活性化経費（教育）に申請・採択され、それを郡上踊りワークショップ及び能楽ワークショップに当てていたのだが、今年度から同経費に連続して申請できるのは2年間までという新しい条件が付され、本件は申請することができなかった。この通知が来たのが4月中旬で、すでに春学期の行事計画を立てた後の通知には当惑した。結果的には、郡上踊りワークショップ留学生センター予算をやりくりして開催、能楽ワークショップは岐阜大学グローバル推進本部の共催を得て費用を得ることになった。次年度以降について、資金面の検討を再度行なう必要がある。



6.2 岐阜大学サマースクール（受入）

岐阜大学サマースクール（受入）は、岐阜大学グローバル推進本部（旧国際戦略本部、2015年度より現組織）が掌握する全学事業であるが、留学生センターが実際の運営を担当している。今年度は、1988年度の開始から数えて28回目の実施となった。参加者は、 Lund 大学（スウェーデン）から17名、ノーザンケンタッキー大学（アメリカ）から2名、木浦大学（韓国）から3名、計22名を迎えた。ノーザンケンタッキー大学からの参加は1999年以來で、参加が復活したことは喜ばしい。サマースクール参加学生は、本学学生が務める宿舎チューター13名とともに、濃密で有意義な日々を過ごした。日程は、8週間コース（6月1日（月）～7月22日（水））および4週間コース（6月24日（水）～7月22日（水））であった。

実施の詳細については、留学生センターホームページにて報告している。参照されたい（ホームページアドレス：http://www1.gifu-u.ac.jp/isc/jp/international/summer_school/）。また、ホームページ記載を基にしたパンフレットも作成・刊行している。

6.3 留学生と日本人学生のための能楽ワークショップ ～見て、聞いて、体験して～

留学生センターでは、2010年度より全学の留学生・日本人学生を対象とした能楽ワークショップを毎年実施している。このワークショップの元となったのは、2005年度からサマースクール（受入）で実施してきた能楽の講義・実演である。その後、全学対象のワークショップとしての拡大（2011年度）、郡上踊りワークショップとのシリーズ化（2013年度）、能と狂言の両方を一度のワークショップで学べる内容の充実化（2014年度）を経て、今年度の実施となった。昨年度（2014年度）の能と狂言を同日に取り上げる試みは、講師からも好評で、今年度もぜひその形式で行いたいとの意向をお示しいただいた。多忙な4人の講師の予定を合わせることは容易ではなかったが、惜しめないご協力を得て開催が可能となった。





2005年度に端を発する10年の歴史を刻み、講師の先生方との信頼関係を築いて行われるワークショップの充実ぶりが全学的にも認識され、今年度は岐阜大学グローバル推進本部の共催を得ることとなった。留学生センターが長年ぶれずに貫いてきた「本物」に触れさせ学ばせる姿勢が、正当に評価されたことは嬉しい。留学生に比して参加が伸び悩んでいる日本人学生についても、今後は改善を期待したい。

今年度（2015年度）のワークショップは、2015年7月15日（水）13:00～15:30、岐阜大学柳戸会館1階集会ホールにて開催した。舞台は、前日に講師の安全に配慮した堅牢なものを設営した。12:30に開場し、参加者は、サマースクール（受入）参加学生22名を含む留学生44名、日本人学生21名、教職員19名、学外一般6名、合計90名であった（受付簿による）。今年度の日本人学生参加者には、邦楽をカリキュラムの一環として味方團先生に学ぶ教育学部音楽教育講座の学生が多かった。事前に音楽教育講座の教員に本ワークショップについて情報を提供したことが有効であった。

当日のワークショップの内容・順序は以下の通りである。

- ① 能の鑑賞：「石橋」^{しやつきょう}
- ② 能楽の概要（歴史、能と狂言の動作や表現の比較）
- ③ 能面と狂言面の比較（面そのものの比較、面をつけて演じる動作の比較）
- ④ 能の謡「高砂」の体験
- ⑤ 狂言の「大笑い」の体験
- ⑥ 狂言の鑑賞：「寝音曲」^{ねおんぎょく}
- ⑦ 能装束の着付け（代表学生1名への着付け）

講師の先生方は、前年度までの経験を踏まえ、より楽しくより貴重な体験ができるようにと毎年工夫を重ねてくださっている。今回の白眉は、②での能と狂言の表現の対比にお

ける「お酌」であった。泣き方や笑い方を対比させることは過去にもあったが、「能」の動作で酒をつぎ、「狂言」の動作でそれを飲み干す、また、その逆も行うということが、能・狂言それぞれの現役能楽師によって舞台上で行われるのは、稀有なことであろう。非常に興味深く貴重であった。

事前学習としては、サマースクール（受入）学生に対しては、当日午前中能と狂言についての概要を学ぶ講義を提供した。この講義は昨年度初めて試みたが、ビデオ等視聴覚で学びたいという声があったため、今年度はビデオを準備した。また、全学共通教育日本語科目（DⅠ、DⅢ）では授業の一部に事前学習を含ませ、特に聴解を目的とする全学共通教育日本語DⅢでは、能と狂言を取り上げた視聴覚教材を用いて理解を促進した。

当日は、新聞社（岐阜新聞）、テレビ（NHK）の取材もあり、学外への魅力発信につながったと思われる。毎年度京都から岐阜にお越しいただいている、観世流シテ方の味方團先生、田茂井廣道先生（以上能の講師）、大蔵流狂言方の山口耕道先生、茂山良暢先生（以上狂言の講師）、この4名の先生方に心よりお礼申し上げたい。このワークショップが、「留学生センターの」から、「岐阜大学の」重要なイベントになる一歩が踏み出せたのが今年度であった。来年度のより素晴らしい開催を今から期しておきたい。

参加者アンケート集計結果（抄出）（※原アンケート用紙は日本語・英語併記）

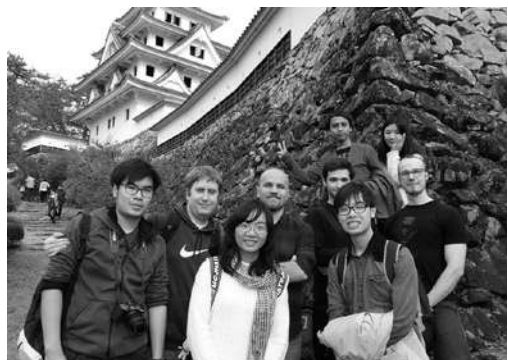
1. あなたは留学生ですか、日本人学生ですか。
留学生 39 日本人学生 16 その他 1
2. 今回のワークショップについて、どこで知りましたか。
授業で 46 ポスター 3
AIMS-Gifu 2 その他 2
3. このワークショップに参加する前に、能を観たことがありましたか。
見たことがある 17 見たことがない 39
4. ワークショップの中で、何がおもしろかったですか。（複数回答可）
能の舞 32 狂言の劇 47 講師の話 28
謡 22 所作（動き） 25 面 31
着付け 31
5. 全体として、このワークショップはどうでしたか。
とても良かった 44 良かった 10 ふつう 2
悪かった 0 とても悪かった 0

6.4 日本語・日本文化研修留学生（日研生）郡上エクスカーショ

留学生センターは、サマースクール（受入）（85ページ参照）、郡上踊りワークショップ（83ページ参照）等で、郡上市とは密接な関係を有している。特に郡上八幡国際友好協会（GIFA）からは毎年度多大なるご協力を賜っており、秋学期には、日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）の郡上エクスカーションにおいて、例年大変お世話になっている。

15期日研生（2015年10月～2016年8月）の9名は、2015年11月22日（日）、郡上を訪問した（1名は他用により欠席）。引率1名ともども、美しく楽しい1日を満喫した。

本エクスカーションの目的は、①日研生同士の親睦を深める、②大学内だけでは体験できない日本文化を体験する、③留学の意義を再認識する、の3点である。①は、過去に日研生同士があまり仲良くなることのないままプログラムを終えてしまった期があり、学生はもとより指導する教員も残念に思った経験に基づく。15期生については、この目的を説明した時に学生が大笑いをするほど既により友人関係を築けていたが、それでもやはり非日常の場で1日ともに過ごすことが親睦をより深めることに疑問はない。②は、郡上の美しい景観や歴史を知るのみならず、大学外の人々と触れ合う機会を重要と考えた目的である。彼らが学ぶ岐阜という地に、多様な地域や文化があることも体感してもらいたい。③は、留学開始後約2ヶ月经ち、開始当初の熱意と高揚が落ち着き、それとともに生活態度や勉強態度にたるみが見えたり、ホームシックになったりするタイミングであることを考え、気分転換の効果を狙ったものである。15期生には、たるみやホームシックの問題を持つ学生は存在しないように見受けられたが、折しも「郡上八幡城下町紅葉祭り」期間中の郡上での1日はよい気分転換となった。



当日は、10:00に郡上に到着し、まずは郡上八幡博覧館で展示物を見ながら郡上の歴史のエッセンスを学び、引き続き郡上踊りのミニ実習を受講し、全員が舞台上で春駒を披露した。その後町中の水路を見学しながら散策した。昼食にはとんかつやうどんなどの日本食に舌鼓を打ち、午後は郡上八幡城へ登った。幸い天気には恵まれ、途中の紅葉を楽しみつつ、天守閣に着くころにはいい汗をかいて半袖になる学生までいた。天守閣前で行われた、紅葉祭りの和太鼓演奏を楽しんだり、武将隊の方々と写真を撮ったり、賑やかに過ごした。たまたま当日城近くの神社で結婚式を挙げたカップルと会い、美しい着物姿の花嫁と凛々しい袴姿の花婿とともに写真に納まり、幸せのおすそ分けをいただくという僥倖にも恵まれた。その後、「タカラギャラリー」で手ぬぐいのシルクスクリーン印刷体験をした。各自が手ぬぐいの色、柄、柄の色等を迷いながら選び、それぞれにお気に入りの手ぬぐいを作り上げた。世界でひとつだけの何よりの郡上土産となった。

15期日研生は、勉学面でも生活面でも問題がなく、友人関係面でのトラブルも見受けられないという、稀に見る素晴らしい期である。本エクスカージョン当日も、9:00集合のところ、5分前までに全員が揃うという、留学生グループの行動としては珍しく完璧な集合をしたことに感心した。その他の行動でも文句のつけようがなく、この学生たちのためならと、つつい教員も力が入る。

学外行事を執り行うに際し、学生の安全確保には留意した。往復は大学のバスをチャーターし、事前に全員に保険加入を義務付けた。アレルギー、宗教上の制約等、昼食にも配慮が必要である。これら全てへの対応には、先にも述べたように、郡上八幡国際友好協会のご協力が不可欠である。このような地域の全面的なご協力が得られる大学は、他にはそうそうない。そのことを自覚しつつ、次回以降もぜひ有意義なエクスカージョンを実施したいと考えている。

6.5 岐阜大学ウィンタースクール

今年度（2015年度）、初めての岐阜大学ウィンタースクール（2015年12月4日（金）～22日（火））が実施された。このプログラムは、インド・アッサム州のインド工科大学グワハティ校（Indian Institute of Technology, Guwahati、以下 IITG）との協働教育の一環で、ウィンタースクールに参加した学生が将来的には岐阜大学の修士課程・博士課程に



戻ってくることを期待しているものである。今年度は初回であるのでモニター実施といった側面もあった。参加者は IITG の学部生及び大学院生 8 名であった。

本プログラムは、参加学生が各自の専門分野に適合した応用生物科学部または工学部の研究室において研究活動をするのが主たる目的であり、日本語学習は副次的なものである。しかし、将来的に岐阜大学に戻ってきてもらうためには日本語を少しでも知ることは重要であるとの考えから、サバイバルレベルの日本語教育を提供することになり、留学生センターがそれを担うこととなった。専任教員 1 名がコーディネーターを務め、実際の授業は非常勤講師 3 名が担当した。

授業日は、12/9 水、10木、11金、16水、17木、18金の 6 日間で、各日 90 分授業を 2 コマ実施した。使用教科書は『にほんごではなしましょう』（らんぐ）で、口頭活動を中心に行なった。

当初の計画では、参加学生は来日前に IITG で日本語の初歩を学んでくることになっていたが、急な事情でそれができず、学生たちは日本語ゼロの状態で来日した。プログラム最終日の振り返りの会では、彼らに簡単なスピーチを日本語でしてもらったが、わずか 6 日間の日本語学習でこれだけのスピーチができるということに、研究指導を担当した応用生物科学部や工学部の教員から多くの賞賛の声が上がった。学生が優秀であったことはもちろんだが、留学生センターが責任を持って実施した日本語授業が、適切かつ効果的であったことを誇りに思う。

学習成果を十分上げることができた一方で、準備段階の基本的な事務連絡の不徹底があったり、教室の確保が間に合わなかったり、運営面では課題が残った。初めての実施であるためある程度の不手際が発生するのは致し方ないが、次年度以降も同プログラムを実施するのであれば、運営面での積極的な改善が必須である。

6.6 十二単の着装と体験 ～日本の民俗衣装～

留学生センターは、本学の留学生に普段の教室では経験できない「本物」を体験する機会を与えようと、学外から講師を招いたワークショップや特別講義を年間数回行っている。「十二単の着装と体験」は、前年度（2014年度）に日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）専用科目「日本の表象文化」（授業担当者：土谷）の特別講義として試行した（2014年12月3日）。参加可能者を日研生に限って実施したところ、日研生からも講師からも好評であったため、2015年度には全学の日本人学生・留学生を参加可の行事として実施した。

2015年12月3日～22日に、インド工科大学グワハティ校の学生を迎える第1回の岐阜大学ウィンタースクールが実施されることとなったため、その学生たちも参加できる日程である12月9日（水）を選んだ（場所は柳戸会館2階集会室、時間は14:00～15:30）。日

本文化学習機会を提供することの重要性とともに、ウィンタースクールへの協力という要素も加わり、岐阜大学グローバル推進本部の共催を得た。講師は、前年度もお越しいただいた着付け講師の伊藤慶子先生、佐藤千里先生、およびボランティア5名の方々のご協力を得た。

十二単の着装モデルには、日研生の女子学生1名を予め選抜し、同学生に対しては13:00より下準備を開始した。化粧を施し、小袖および袴を着付け、髪を整えるといよいよ着装が始まる。講師およびボランティアの全7名も袴姿である。着装前に参加学生たちは十二単の歴史や名前由来などの簡単な説明を受け、期待を高めてモデルの登場を待っている。

十二単は高貴な身分の女性に、3名がかりで着付けをしていくもので、その手順や決まりは厳しく定められている。着付けを行う者はその最中に言葉を発することが許されないため、説明役の教員が着付けの進行に合わせて、随時日本語および英語で説明を加えた。小袖と袴姿のモデル学生が、単、五ツ衣、打衣、表着、唐衣、裳と次々を身に着けていく様子を、学生たちは盛んに写真に撮っていた。

すべての着付けが終わると再度写真撮影タイムとなり、盛装のモデル学生と写真に収まりたい学生が列をなした。その後、十二単の形を崩さないように脱衣した「空蟬」を示し、希望者はその空蟬の中に入って、いわば「十二単を着た風」の体験と写真撮影をした。この空蟬体験は男子学生にも好評で、思わぬ学生が思わぬ衣装で美しくなると、参加学生から歓声が上がった。

前年度の試行で学生に好評であろうことは当初から予想できていたが、思った通りの好評であった。参加者は約60名で、会場の柳戸会館2階集会室（和室）が狭すぎると感じた



ほどであった。日本文化に興味がある学生はもとより、日本文化とはほど遠い学生であっても、美しい着物のインパクトは絶大で純粋に楽しんでもらえたと思う。

日本語学習経験のないウィンタースクールの学生のために手配した通訳者が十分ではなかったことなど、小さな問題点はあったが、全体として、学生に日本文化体験の有益で楽しい機会を提供するという目的は達することができたと考えている。

6.7 講演会「日本茶に人生をかける—スウェーデン人が語る日本茶の魅力—」

1月20日（水）、グローバル推進本部・留学生センター共催により講演会「日本茶に人生をかける—スウェーデン人が語る日本茶の魅力—」を開催した。

講師を務めたのは、留学生センターの第10期日本語・日本文化研修（以下、日研）コース修了生ブレケル・オスカル氏である。ブレケル氏は日研コースに在籍中から日本茶に興味を持ち、修了論文でもお茶をテーマにしていたが（「岐阜県茶業のブランド展開—白川茶の場合—」）、猛勉強の末、スウェーデン人初の「日本茶インストラクター」となった。2016年3月まで静岡県農林技術研究所茶業研究センターで研修し、現在も国内外において日本茶に関するセミナーを開講している他、テレビやラジオ等、様々なメディアにも出演し、多方面から日本茶の普及活動に取り組まれている。

講演会では、日本茶が持つ他のお茶にはない特徴を、製造工程の違いや淹れる温度との関係、水質が及ぼす風味への影響など、多方面から解りやすく説明して下さった。また、「水出し」によって抽出した桜葉の香がするお茶の試飲もあり、繊細な春の香を味わうことができた。今冬初の大雪にもかかわらず、講演会には学生、教職員、学外の方々82名が参加し盛会であった。

本講演会は、日本茶の魅力を認識するよい機会となったが、留学生センターの修了生を講師にお招きすることができたことを何よりも嬉しく思っている。ブレケル氏は講演後も工学部神谷ゼミのメンバーとの懇談会（岐阜大学「のみやすい」×白川町「白川茶」プロ



講演するブレケル氏



試飲の様子

ジェクト)で、翌日は白川町白川園本舗等でお茶に関する貴重なアドバイスをされるなど尽力して下さったことも記しておきたい。

6.8 GHOGL& ISC フォーラム「地域と岐大留学生」

2015年度は、岐阜大学グローバル推進本部 (GHOGL) と留学生センター (ISC) の合同開催で、2つのイベントを開催した。そのひとつが2月17日 (水) に行なったフォーラム「地域と岐大留学生」である (共催: 地域協学センター)。本フォーラムの趣旨・実施要領等は、以下の通りである。

1. 趣旨

岐阜大学は、「「学び、究め、貢献する」地域に根ざした国立大学」を理念に掲げ、種々の分野で地域との連携、地域への貢献を志しています。今回のフォーラムは、「留学生」を視座として、「地域と大学」について考えたいと思います。

本フォーラムは、①郡上地域と留学生ホームステイ、②高山地域と留学生インターンシップの2部構成です。①では、今年度 (2015年度) まで20年間連続して岐阜大学サマースクール (受入) のホームステイプログラムにご協力いただいている郡上八幡国際友好協会会長 鷺見幸彦様より、留学生を受け入れることにより地域にどのようなメリットがあるのか、お話をいただきます。②では、留学生インターンシップに対して、受入企業・地域はどのような効果を期待するのか、インターンシップのコーディネートを担ったNPO 法人まちづくりスポット代表理事竹内ゆみ子様よりお話をいただきます。

上記①、②ともに、ホームステイやインターンシップを実際に経験した留学生からも発言してもらいます。留学生の存在を通じた地域と大学の関係を複眼的に検証し、課題の洗い出し、改善策の検討にもつなげたいと思います。

2. 日時・場所

日時: 2016年2月17日 (水) 13:30 ~

場所: 岐阜大学全学共通教育棟105教室

3. 登壇者 (スピーカー)

① 郡上地域と留学生ホームステイ

郡上八幡国際友好協会 会長 鷺見幸彦氏

日本語・日本文化研修留学生 (郡上ホームステイ体験学生)

シモン・ウィークルンド (スウェーデン)

② 高山地域と留学生インターンシップ

NPO 法人まちづくりスポット 代表理事 竹内ゆみ子氏

日本社会文化プログラム履修生（高山インターンシップ経験学生）

袁羽杉（中国）、吴限（中国）

地域科学部4年生 木村朋恵（米国交換留学経験者、高山の宿泊施設に就職予定）

本フォーラムは、「地域と岐大留学生」を複眼的に見る機会となることを目指した。郡上と高山、ホーステイとインターンシップ、受け入れ側（地域）と受け入れられる側（学生）、20年の歴史がある郡上ホームステイと2014年度から新たに始まった高山インターンシップ、留学生と日本人学生、このような双方向からの視点が重要だと考えた。

郡上八幡友好協会（以下 GIFA）の鷺見会長からは、GIFA の設立目的から歴史、特に岐大との関わりをお話いただいた。GIFA が当初は留学生受け入れ等の「交流」から活動を開始し、その後地域の外国人居住者との「共生」に活動が広がり、今後は「インバウンド（海外からの旅行者の受け入れ）」支援にも力を入れるというお話は、まさに日本が直面する（してきた）外国人との関わりの縮図であると感じた。その活動の中で、岐阜大学との関係を重視いただいていることに感謝の念を強くした。

NPO 法人まちづくりスポット（以下まちスポ）の竹内代表理事からは、まちスポの創立いたるまでの経緯と現在のまちスポの活動、その中のインターンシップ仲介の位置づけをお話いただいた。もともとは海外支援の NPO として活動していたが、そこから自身の地元を見直すことを痛感させられたというお話の迫りに圧倒された。留学生をインターンシップで受け入れる際



に、日本人学生受け入れとは違う配慮が必要であることや、岐阜大学に対する具体的な要望をお示しいただき、身の引き締まる思いであった。

ホームステイ、インターンシップ、それぞれを経験した留学生3名にも登壇し、日本語で発表してもらった。当初は3名の発表を予定していたホームステイ経験学生が、インフルエンザで2名不可となるアクシデントはあったが、登壇学生はそれぞれ発表スライドを準備し、自分の日本語を駆使して語ってくれた。彼らにとっても貴重な経験になったことは疑いない。最後の発表者として登壇した日本人学生は、米国留学を経て「海外と日本」を考えるようになり、海外からの旅行者の多い高山の宿泊施設に就職し、そこで自分の資質を生かしたいと語った。まさに「グローバル」を体現する学生の決断を、嬉しく心強く聞いた。

発表は興味深く、内容的には大変満足できるフォーラムであったが、運営面では問題がなかったとは言えない。本フォーラムは、冒頭に示したとおりGHOGLとISCの合同開催であったが、GHOGLの関わりは非常に希薄で、「合同」の名にふさわしかったかどうか疑問が残る。2月中旬という卒業・修了が近い時期であったり、各学部の行事があったりという時期的なまずさもあったかもしれない。フォーラム自体が非常にいいものだっただけに、その点が残念であった。

6.9 郡上明宝観光モニターツアー

2015年度の本センターの組織目標は4点あったが、その第4が「郡上市での留学生活動の整備など、地域社会における国際交流活動を支援する」である。郡上市と本センターとの関係は、サマースクール（受入）のホームステイや、郡上踊りワークショップなどで良好かつ密接だが、どちらかと言うと留学生が一方的に郡上からの好意を受けるものとなっており、双方向にメリットのある活動ができないものかと常々考えていた。そこで、2015年度は上記の目標を掲げ、留学生が地域（郡上市）に貢献する方策を探った。

年度当初から、関係者との懇談・打合せを重ね、いくつかの計画が立てられたが、中途もしくは寸前で頓挫することが続いた。ようやく年度末近くの2月末になり、郡上明宝エリアでの観光モニターツアーが実現し、安堵したのが正直なところである。今後の活動の端緒となる実績が作れたことは、大きな一歩であった。

郡上明宝モニターツアーの概要は、以下の通りである。

目的： 外国人観光客受け入れサポートのための日帰りモニターツアー

日時： 2016年2月23日（火）

訪問場所：道の駅明宝、めいほうスキー場、明宝温泉湯星館（岐阜県郡上市明宝）

内容：①各施設内の外国語表記等外国人観光客受け入れ体制チェック

②各施設での体験活動、従業員との意見交換

③まとめとして観光に関するアイデアや意見出し

参加者数：12名（留学生センター日本語・日本文化研修留学生4名、学部留学生1名、大学院生7名）

主催： 明宝ツーリズムネットワークセンター

後援： 明宝振興事務所、明宝観光協会

協力： 岐阜大学留学生センター、学びの森パスカル

交通手段として大学のマイクロバスをチャーターし、引率として留学生センター教員1名が同行した。現地では、明宝ツーリズムネットワークセンター等の現地職員・関係者が説明や体験指導をした。道の駅の休憩所磨墨庵するすみあんの古くて大きな囲炉裏に驚いたり、土地の名物明宝ハムを試食したりした。スキー場では「キッズパーク」でソリ滑りをし、スノーモービルにまたがって写真を撮らせてもらった。湯星館では希望者は温泉を楽しんだ。参加者は楽しみつつも、外国人観光客を迎える観光地として何がアピールできるか、何が必要かに目を配った。

ツアーの最後1時間強をかけて、振り返りを行い、各自アンケートの記入、グループに分かれての明宝の魅力と改善点のディスカッションを行なった。「少なくとも英語の表記はもっと欲しい」「建物や名物にどのような歴史や背景があるのか、ストーリーが聞けるといい」「安心して雪遊びや初心者がスキーを出来る場所を確保したほうがいい」といった提案が出た。明宝の関係者に熱心に耳を傾けてもらい、参加者た



ちは張り合いを感じたことと思う。

3月24日（木）に、明宝の関係者と留学生センター教員が会合を持ち、今回の振り返りと、今後どう展開させるかについて話し合った。主催の明宝ツーリズムネットワークセンター作成の「平成27年度外国人観光客受け入れサポートのためのモニターツアー事業実施報告書」の確認もした。単発のイベントではなく、また郡上明宝に限った活動ではなく、地域と留学生がどうつながるかという大きな視野を持ちながら、2016年度以降に臨みたいと考えている。

6.10 カセサート大学（タイ、学術交流協定校）訪問

岐阜大学の学術交流校のひとつであるタイ・バンコクのカセサート大学（Kasetsart University）からは、例年日本語・日本文化研修コースに優秀な学生が送られている。同校人文学部東洋言語学科日本語コースからの岐阜大学への留学生は、筆者が把握している2005年度以降については、日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）が2005、2006、2008、2012～15年度（現在）、社会文化プログラムが2014年度、以上8名である。

しかしながら、岐阜大学から同校へ留学する学生は、直近10年間は皆無であり、先方日本語コース教員と当留学生センター教員同士の交流もなかった。今後の学生交流を考え強化する上でカセサート大学を訪問することは有益であると考え、筆者（留学生センター専任教員土谷）が3月1日（火）～5日（土）、同大を訪問した。訪問の目的は以下の4点である。

- ① カセサート大日本語コース教員との交流・情報交換
- ② 岐大サマースクール（受入）、日本語・日本文化研修コースの広報
- ③ カセサート大の提供する英語で学習可能なコースについての調査
- ④ 日本語・日本文化研修コース・社会文化プログラム修了生との懇談

①②については、人文学部東洋言語学科を、③については International Studies Center (ISC) を訪問した。④については、期間中随時修了生と懐かしい再会をすることができた。

人文学部東洋言語学科日本語コースでは、出張前から連絡窓口となってくださった Professor Yupaka、学科長 Professor Pranee、Professor Bussaba、Professor Soysuda とお会いし、日本人教員にも挨拶をすることができた。Professor Bussaba と Professor Yupaka は昼食をご一緒くださり、その際に詳しく日本語コースについて教えていただいた。日本語コースに入るには、入学前に既に初級レベルの日本語を学習している必要があること、日本語コースの学生は全員日本留学を義務付けられていること、4年前に日本語

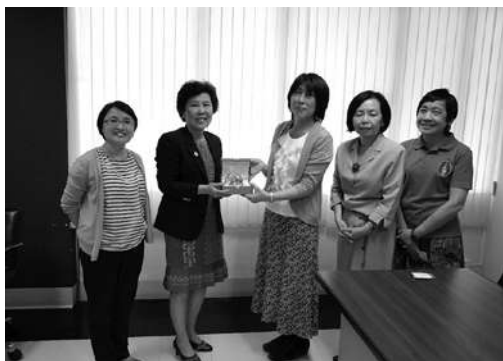
コースとは別に「ビジネス日本語コース」が開設され、そちらでは入学時の日本語レベルは問わず学生数も多いこと、ビジネス日本語コースの学生の中にも日本留学希望者がいることなどの情報を得ることができた。

引き続き、学生対象の岐阜大学サマースクール（受入）の説明会を実施した。交換留学や日研生コースには人数制限があるが、サマースクールではより多くの学生を広く受け入れることができる。1年間の交換留学とともに、サマースクールへも同大の学生が参加するよう、呼びかけを行なった。

International Studies Center (ISC) では、Management and Administrative Officer の Mr Krishna Parntang と Mr Thipaphol Boonsri と面談した。同大と ISC の概要の説明を受けたのち、英語で学べるプログラムについて聞いた。ISC は KUSS (Kasetsart University Summer School) という3週間のサマースクールや KUSEP (Kasetsart University (Semester) Exchange Program) という1学期の交換プログラムを提供している。KUSS は今年初めて実施するが、2008年開始の KUSEP には日本人学生の参加もあるとのことである。岐大生は留学先としていわゆる欧米圏志向が強いが、アジアの大学で英語を意思疎通のツールとして駆使する経験も貴重であろう。

東洋言語学科、ISC の両訪問を通じて感じたのは、日本の各大学が活発にカセサート大学との学生交流を行なっているという事実である。岐阜大学は、日研生が送られてくることだけである意味満足していたが、国際化を標榜するのであれば、より攻めの姿勢を示さなければ他大学の後塵を拝することになろう。このことに気づけただけでも、今回の出張の意義はあったと考えている。

岐阜大学留学修了生には、出張期間中非常にお世話になった。在学中の13期と14期日研生、14年度の社会文化プログラム生の計3名は、常時必ず1名が筆者のアテンドをしてく



カセサート大学人文学部東洋言語学科日本語コースの先生方と



カセサート大学 ISC の皆さんと日研生コース修了生と

れ、キャンパス案内や食事の手配をしてくれた。すでに社会人になっている5期と6期日研究生は、仕事をやりくりして出張最終日に面会に来てくれた。岐大で学んだ留学生が、それぞれ立派な社会人となり日本語を駆使した職に邁進していることを、何よりも嬉しく誇らしく感じた。彼らが口々に、岐阜大学に留学して良かった、あの1年は宝物だと言ってくれたことを胸に、今後も留学生に対する教育・支援に当たりたいと思う。

7. 留学生センター交流ラウンジの利用について

平成24年4月留学生センターに「国際交流ラウンジ」が設置され、早4年が経過した。このラウンジでは様々な活動が行われているが、中心となるのは学期中の平日午後3時から5時まで数名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流するラウンジチューター活動である。今年度は経験のあるチューターが卒業・修了、留学等で大学を離れ、新規のチューターが多く経験者が少ないことから、軌道に乗るまで少し時間を要した。また、例年月曜日から金曜日まで毎日チューターを配置していたが、前期は金曜日に担当できるチューターがおらず、比較的来訪者が少ないこともあり、金曜日のチューター配置を行わなかった。しかし後期では金曜日に配置することができ、その他の曜日と変わらない利用者数があった。

ラウンジには教育用パソコン、プリンター、大型ディスプレイが整備されており、学習・情報収集の場として多様な活動が展開されている。ラウンジの壁面にはサマースクール(派遣)参加学生が留学報告会用に作成したポスターや、活性化経費(教育)ポスター報告会用のパネル、また留学生センターで行われた様々なイベントの写真を掲示している。またラウンジでは留学生の生活相談、日本人学生の海外留学についての相談を行っており、留学や学術交流協定校に関する資料、留学経験者の報告書もあり留学に関する情報収集をすることもできる。

ラウンジは多目的に活用されており、サマースクール(派遣)説明会、サマースクール(受入)チューター説明会、サマースクール(8週間コース)歓迎会、日本語研修コースクラス発表、個人チューターの指導等が行われた。今年度もサマースクール(受入)事業の一環として、「役員との昼食会」がこのラウンジで開催された。会を通じて、学長はじめ役員の方々にサマースクールを知っていただくよい機会になると同時に、参加学生にとっても普段交流を持つことが難しい先生方と親しく言葉を交わす貴重な機会となった。

ラウンジチューターの企画による留学生向けのイベントも行われ、平成27年7月1日(水)に「日本の七夕まつり」、同28年1月14日(木)には「日本のお正月」が行われた。「七夕まつり」では、墨と筆で願い事を書いた短冊を笹の葉に結び付けたり、折り紙を折ったりと日本人学生と留学生との交流が図られた。一方「日本のお正月」では、カルタ取り、福笑い、百人一首(坊主めくり)、書き初め、折り紙、けん玉等を行った。中でも書き初めと折り紙が盛況で、好きな漢字や言葉を書いたり、折り紙細工を皆で教え合ったりしていた。いずれのイベントも留学生にとって日本文化の一端を知る良い機会となった。

ラウンジで開催している各種行事の様子は、岐阜大学HPお知らせサイト、岐阜大学学報、留学生センターHPに掲載してあるので、興味のある方は是非ご覧いただきたい。

表. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

年度	前期配置期間と利用者数	後期配置期間と利用者数	合計
27	4月13日～7月31日 354人（金曜日は閉室）	10月12日～2月4日 301人	655人
26	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
25	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
24	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

利用者についてみると、前期は金曜日のチューター配置がなかったことと、サマースクール（受入）参加学生の利用者減等により全体の利用者数が減っている。例年、宿泊施設である学外合宿研修施設へ帰るバスの便は昼と夕方の2便であったが、今年は午後1時発の1便のみとなったため、従来のようにラウンジで昼食をとったり、パソコンで情報収集をするなどラウンジを活用するサマースクール参加学生が少なくなったことが理由として考えられる。後期の利用者は毎年比較的少ないが、今年度は特に1月後半、寒気が強まってからの利用者の減少が目立ち、来訪者がいない日も何日かあった。とはいえ、前期は、留学生センター所属の日本語・日本文化研修留学生のサポートを担う論文チューター活動でもラウンジを利用し、資料の収集方法や論文の日本語添削等の指導に当たっていた。後期は、昼食時の留学生や日本人学生のラウンジ利用者が多く、お弁当を持ち込み、仲良く食事をとり会話を楽しんでいる様子が見られた。またラウンジに設置してあるパソコンやプリンターを使用する目的で来訪する留学生も増えてきたように思われる。

七夕まつり



ラウンジチューター



岐阜大学留学生センター紀要 2015

執筆者

太田孝子	留学生センター教授
土谷桃子	留学生センター准教授
野原美和子	留学生センター非常勤講師
富田久仁子	留学生センター非常勤講師

編集委員

森田晃一	留学生センター長（編集委員長）
太田孝子	留学生センター教授
橋本慎吾	留学生センター准教授
土谷桃子	留学生センター准教授
吉成祐子	留学生センター准教授

●編集後記

本年度は論文2編、授業報告2本および年報編、資料からなります。年報編には留学生センターの一年間の行事が報告されていますが、その一つに、留学生センター日本語・日本文化研修コース修了生による講演会があります。修了生が元気に活躍している姿を見られたことだけでなく、講演内容に満足した参加者の様子を見て、修了生とのつながり、岐阜大学や地域に還元する活動の大切さを強く感じました。

新しい年度になり、センター内の人事異動がありました。前年度まで留学生センター長を務めてくださり、センター紀要の編集委員長でもあった工学部竹内豊英先生、在学留学生資料や交流ラウンジの報告等で執筆を手伝ってくださった技術補佐員の粥川美恵子さんに心より感謝申し上げます。

岐阜大学留学生センター紀要 2015

2016年7月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学留学生センター
責任者 森田 晃 一

印刷所 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

Bulletin of the International Student Center
Gifu University
2015

1. Articles

OHTA Takako

The Supporting Activities of *Kichibei Yanagihara*: Focusing on the Educational Inspection
Opportunities for the Korean Female Teachers to visit the Main Islands of Japan 1

TSUCHIYA Momoko

Theaters in *Inaba* area of Gifu (2) :
Suehiro-za and *Kunitoyo-za* after the *Nohbi* earthquake 19

2. Class Reports

NOHARA Miwako

A Class Report of “PC Practice A” for Novice Japanese Learners 31

TOMITA Kuniko

A Class Report of “Listening Comprehension B” for Pre-Intermediate-Level
Japanese Learners 43

3. Annual Report (2015.4-2016.3)

Published by
The International Student Center
Gifu University, Gifu 501-1193, Japan